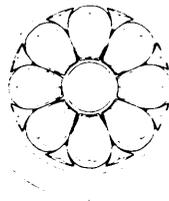


鞠智城跡調査報告書

—昭和42、43、44、54年度調査概要—



1981

菊鹿町教育委員会

鞠智城跡調査報告書

—昭和42、43、44、54年度調査概要—

序 文

霊峰八方ヶ岳の山麓湯の里菊鹿。清純の緑林に源を発す内田川・木野川の恩恵に浴す広大な沃野をもち、却初より作り営まれた殿堂、楽園、多くの古墳、城跡、石造物、名勝、祭祀、遺跡、天然記念物、古寺跡、佛閣、神社、古戦場、古文書等豊富な文化財を保持する。

菊鹿町が文化財の宝庫、古文化の里といわれるゆえんでありましょう。菊鹿町が自然休養村としてのイメージを持つことは、必然の姿であります。過去を知り現在をささえ、未来への道しるべとしての文化財の保存、保護の大切さはあらためて申すまでもありません。

今般、県指定史跡「鞠智城」について町道稗方～立徳線改良事業に伴う発掘調査を実施したのを機会に、県教育庁で42年より44年まで3ヶ年に亘って鞠智城跡の埋蔵文化財緊急調査概報を沿革資料として併せて発掘調査報告書を作成するものであります。

報告書刊行に当り、発掘作業、その後の整理作業と大変なご苦勞をおかけしました調査員の方々、並びに始終ご協力いただきました地元住民・工事関係者の方々に対して厚く御礼申し上げます。

今後、この報告書が各方面に亘り、ご活用いただき、文化財保護の一助ともなれば幸いに存ずる次第であります。

昭和56年 3 月31日

菊鹿町教育長 高 田 貫 一

序

まぼろしの城とさえいわれてきた肥後国の鞠智城跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町米原の一带に草深く埋もれたまま受け継がれてきた。

しかるに、最近とみにはげしくなった開田事業のあおりで、この重要な史跡も今のうちに調査をしなければ、永久に失なわれかねない状態となった。

ここに熊本県では昭和42年度から3ヶ年計画をもって国の補助を得、全国的にも重要な上代山城の跡を早急に調査することになった。本年度はその第1年目として昭和42年7月24日から2週間の期間、先ず表面調査により「鞠智城」の範囲を明確にし、必要な地区の記録撮影や実測図を作成するとともに、将来保護すべき地域、遺構の確認につとめた。

本書は、その年度計画による第1年目の調査結果の概報であるが、初年度の調査によりいろいろの成果が得られて「伝」の字が消え「鞠智城跡」と改められる日も近いうち実現するものと思われる。

本調査に当たり終始御協力下さった下記の熊本県文化財専門委員の方々をはじめ、県内在住の研究者の方々及び地元関係者の方々に對し、深く感謝する次第である。

なお、本書の刊行に当たり、御多忙の中に執筆下さった諸先生方に対して、ここに厚く御礼を申し上げるものである。

昭和43年3月

熊本県教育委員会

各種開発工事によって破壊が予想される文化財の保護対策の一つとして熊本県が国庫補助を受けて埋蔵文化財の緊急調査を開始して本年度は第3年目にあたる。

本年は昨年に続いて鞠智城跡の調査を進めるとともに、圃場整備事業が計画された三万田遺跡の遺構分布調査を実施した。

両調査ともきわめて不利な自然条件の中で実施されたにもかかわらず、予期以上の成果をおさめ得たのは、調査員諸氏をはじめ、地元関係者の努力と協力のたまものと深く感謝する次第である。

なお、本書の刊行に当たり、御多忙の中に執筆くださった諸先生方に対して、ここに厚く御礼を申し上げるものである。

昭和44年3月

熊本県教育委員会

熊本県が鞠智城跡の調査を開始したのは、昭和42年のことである。当時激しい勢いでひろまっていた開田工事によつて、「幻の城跡」と言われていた鞠智城跡はその姿を明らかにすることなく失われるのではないかと思われた。このため、遺跡の記録保存とともに、保存対策に必要な資料の収集を目的として、国庫補助による調査が開始されたのである。

この調査は予期以上に困難な事業であつたにもかかわらず、ここに一応当初の目的を達成し得たのは、調査員各位をはじめ、地元関係者の遺跡に対する深い愛情と絶大な協力があつたからで、ここに衷心から感謝申し上げる次第である。

なお、今回の調査の結果、予想以上に重要な遺構が遺存していることが明らかになつたが、城跡の全貌を明らかにするためには今後更に調査を継続する必要がある。同時に遺跡の保存については、今後の大きな課題と考えられるので関係者各位の理解と協力をあわせて願うものである。

昭和45年3月

熊本県教育委員会

例 言

1. この報告書は、熊本県教育委員会および菊鹿町教育委員会が実施した鞠智城址の発掘調査報告書である。
2. 本書中、一次～四次の調査報告書は概に刊行されているが、発行部数が少い為、入手が困難であった。1980年に実施した町道稗方～立徳線に伴う事業調査報告と併せて再録した。再録にあたって、熊本県教育委員会の御承諾を賜つた事を感謝する。
なお、各次の調査の報告書の奥付は次のとおりである。
○一次、二次 昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報（伝鞠智城跡） 昭和43年3月刊行
○三次 昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概要（伝鞠智城跡） 昭和44年3月刊行
○四次 昭和44年度埋蔵文化財緊急調査概報（鞠智城跡） 昭和45年3月刊行
3. 本報告書の本文の執筆者については、文末に記すとおりである。第5次調査についての図面の作成は高谷和生、鶴島俊彦がおこなつた。
4. 本文の体裁については、これを統一していないが、第4次調査の第1図（遺跡位置図2頁）は重複するため削除している。
5. 頁数は、今回新たに通し数を付し、旧版のそれは()で残した。
6. 第五次調査の遺構名称は次のとおりである。S D—溝、S K—土壌、S F—道路状遺構、S X—不明遺構
7. 本書の編集は高谷和生、鶴島俊彦がこれをおこない、鳥津義昭氏の多大なる協力を受けた。

本文目次

() は旧版の頁を示す

第一次・二次調査

I 経過概要	1 (1)
II 鞠智城の歴史	2 (2)
III 鞠智城研究略史	4 (4)
IV 古代山城の遺構	
1. 地理的位置	5 (5)
2. 遺跡・遺構の概要	5 (5)
3. 池ノ尾の門礎石	7 (7)
4. 堀切の門礎石	12(10)
5. 深迫の門礎石	16(14)
6. 馬こかしの道	24(22)
7. 三枝石垣	28(26)
8. 佐官どん	30(28)
9. 米原部落内の礎石群	33(31)
10. 少監どん・紀屋敷	34(32)
11. 長者原の遺構	35(33)
12. 宮野礎石群	38(36)

第三次調査

I 経過概要	49(1)
II 佐官どん	51(3)
III 深迫門礎地区	54(6)
IV 土塁	60(12)
V 阿高礎石推定地	62(14)
VI 小結	64(16)

第四次調査

I 経過概要	67(2・3)
II 長者原礎石群	68(4)
III 宮野礎石群	74(10)
IV 長者山の遺構	79(15)
V 小結	82(18)

第五次調査

I 調査にいたる経過	87
II 発掘調査の経過	87
III A区	91
IV B、C区	91

V	D区	108
VI	E区	112
VII	F区	120
VIII	G区	120
IX	H区	120
X	I区	120
XI	総括	123

挿 図 目 次

1.	米原長者原全景	見開き 2・3(2・3)
2.	遺跡位置図	5(5)
3.	遺跡付近の地形図	折込 7・8
4.	池ノ尾遠景	9(7)
5.	池ノ尾門礎石周辺地形図	10(8)
6.	池ノ尾の門礎石	11(9)
7.	池ノ尾の門礎石実測図	11(9)
8.	池ノ尾の門礎石付近土壌断面図	12(10)
9.	掘切地形図	13(11)
10.	木野神社の門礎石	14(12)
11.	掘切の門礎石	14(12)
12.	掘切の遠景	15(13)
13.	掘切の門礎石	15(13)
14.	木野神社の門礎石	15(13)
15.	深迫の門礎石周辺	見開き 16・17(14・15)
16.	深迫の地形図	18(16)
17.	深迫の門礎石	19(17)
18.	深迫の門礎石の実測図	19(17)
19.	深迫の門礎石周辺	見開き 20・21(18・19)
20.	深迫の門礎石周辺トレンチ	21(19)
21.	馬こかし遠景	22(20)
22.	馬こかし地形図	23(21)
23.	馬こかし石垣	24(22)
24.	馬こかしの石垣実測図	25(23)
25.	三枝石垣地形図	26(24)
26.	三枝石垣実測図	27(25)
27.	三枝石垣	28(26)

28. 佐官どん地形図	29(27)
29. 佐官どん礎石群堆積図	31(29)
30. 佐官どん全景	32(30)
31. 佐官どんの礎石群	32(30)
32. 米原西方の山	見開き 34・35(32・33)
33. 少監どん	36(34)
34. 長者原礎石列	37(35)
35. 宮野地形図	38(36)
36. 宮野瓦出土地状況	39(37)
37. 宮野礎石列所在地	39(37)
38. 米原地区測量図	折込 41・42
39. 伝鞠智城跡付近の地形図	50(2)
40. 佐官どんトレンチ配置図	51(3)
41. 第5トレンチ	52(4)
42. 第7トレンチ	52(4)
43. 第7、8トレンチ土層実測図	53(5)
44. 第6トレンチ土層断面図	53(5)
45. 深迫地形測量図(昭和42-43)	54(6)
46. 深迫門礎石発掘風景	55(7)
47. CGEトレンチ断面図	55(7)
48. Cトレンチ平面、断面図	56(8)
49. Cトレンチと柱穴	57(9)
50. 深迫土塁推定地を北方(三枝石垣)より望む	57(9)
51. 深迫土塁推定地断面図	58(10)
52. 遺物実測図	59(11)
53. 土塁実測図	61(13)
54. 奥かけ松付近景観	62(14)
55. 阿高の礎石	62(14)
56. 阿高礎石群	63(15)
57. 長者原礎石実測図	69(5)
58. 黒色土と礎石を抜いた跡	71(7)
59. 南半分の礎石	71(7)
60. 宮野礎石群	74(10)
61. 宮野礎石群配置図	75(11)
62. 宮野出土古瓦	76(12)
63. 宮野礎石土層断面図	77(13)
64. 長者山	79(15)

65. 長者山地形図	81(17)
66. 米原台地全景	見開き 82・83(18・19)
67. 遺跡図	84(20)
68. 調査区全景	87
69. 鞠智城跡第5次発掘調査地区全図	折込 89・90
70. B、C調査区	92
71. B、C区平面図、東壁断面実測図	折込 93・94
72. B、C区ピット計測値	95
73. 軒丸瓦、丸瓦実測図	96
74. 平瓦 a・b・c 類実測図	97
75. 平瓦 d・e 類実測図	98
76. 平瓦 f・g・h 類実測図	99
77. C区出土、丸瓦・平瓦	100
78. C区出土、平瓦	101
79. C区出土、軒丸瓦	102
80. 平瓦叩き目集成	102
81. 各区の丸瓦、平瓦出土数	103
82. 平瓦各類観察表	104
83. B、C区出土土器実測図	106
84. B、C区出土土器	107
85. D区全景	108
86. S F 501断面実測図	109
87. D区出土土器実測図	110
88. D区出土土器	111
89. E区全景、S K 502	112
90. E区東壁断面実測図	見開き 112・113
91. D区平面図	折込 115・116
92. E区平面図	折込 115・116
93. 礎石抜き取り穴	117
94. 礎石抜き取り穴断面実測図	117
95. E区出土土器実測図	118
96. E区出土土器	119
97. F、G区平面図・F区北壁断面実測図・F区西壁断面実測図	折込 121・122
98. 鞠智城跡第5次調査出土軒丸瓦復原図	125

昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報

第一次・二次調査

1 経過概要

伝鞠智城跡として熊本県がその一部を史跡に指定したのは昭和34年12月8日のことである。この時指定されたのは地表にその遺構を見ることができる鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原 530番地、通称金蔵といわれる礎石列のある地点と、菊池市大字木野字深迫1907番地、今回調査をした深迫の門礎石があった場所だけであつた。遺構のほとんどが地下に埋まっていた指定当時にあつては、遺跡の保護についてそれほど問題にはならなかつたし、また現在のように指定について直接保護問題と結びつけて考えなくてよかつたと思われる。

しかるに昭和40年を契機として熊本県内には急速な農業構造改善、畑地開田等の開発事業がはじまつた。そして旧地貌の復原さえも不能になるような大工事がいたる所で行なわれはじめた。とくに昭和41年9月には鞠智城の中に遺構の存在が想定されていた米原台地の中央部、長者原一帯にブルドーザーが進入し、畑地桑園の水田化工事が開始され、それによって数多くの礎石、焼米、古瓦が何らの記録も残すことなく失われてしまった。

この遺跡は現在まで何度か部分的な調査がなされているが、全域にわたる詳細な学術調査がおこなわれたことはない。そのため保護対策に大きな支障を生じ鞠智城を永久に謎のままに葬るおそれさえあつた。故に将来この地での開発計画が存続する以上、現地調査はきわめて緊急を要することとなつた。

しかるに城域はきわめて広大にわたり、調査を単年度でおわることは諸種の事情で困難性があるため、本年度は従来明確でなかつた遺跡の外郭線を明らかにすることと、基本的な実測図の作成に主力をおいて調査を実施した。調査については昭和42年度埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助をうけて熊本県教育委員会が主催し、地元菊池市及び菊鹿町教育委員会が共催した。そして昭和42年7月24日から8月2日までを第1次調査とし、昭和43年3月10日から3月12日までを第2次調査とし2期にわけて実施した。

調査の経過については後段の調査日記の通りである。第1次調査には、城の外郭線の確認、米原地区測量図作成、所在が明らかな門礎石地点の調査に主力をおき、第2次調査においては、第1次調査によって作成した米原地区測量図の修正と、米原地区内遺構の探索に主力をおいた。

両次の調査とも気候にはあまり恵まれなかつた。とくに第1次調査時には酷暑の密生した山林中の作業等で筆舌につくしがたい苦労もあつたが、初年度の調査として予期以上の成果をあげ得たと思う。しかしながら鞠智城の全貌を明らかにするには、不明な点があまりに多い。開発攻勢激化の折、この調査はできる限り早急に実施する必要があると考える。

なおこの概報の執筆については次の調査員が担当した。

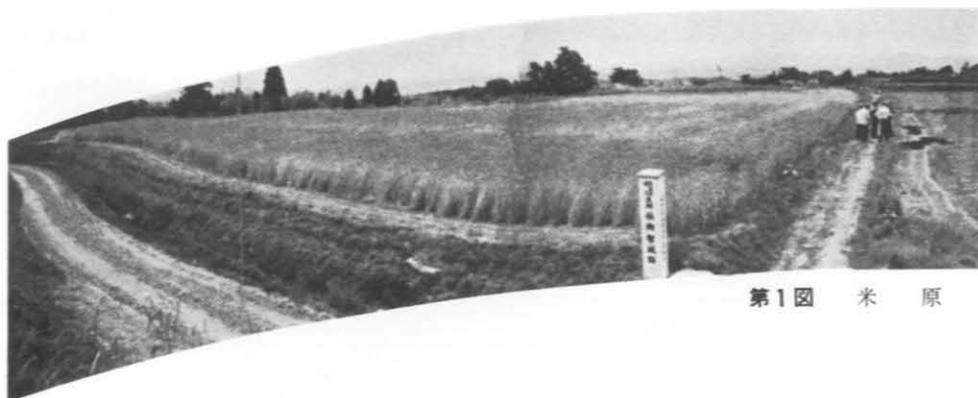
1. 経過概要 (上野辰男) 2. 鞠智城の歴史 (乙益重隆) 3. 研究略史 (坂本経堯) 4. 古代山城の遺構、(1) 地理的位置、(2) 遺跡遺構の概要 (坂本経堯、乙益重隆)、(3) 池ノ尾の門礎石、(4) 堀切の門礎石 (原口長之)、(5) 深迫の門礎石 (三島格)、(6) 馬こかしの道 (隈昭志)、(7) 三枝の石垣 (杉村彰一)、(8) 佐官どん (田辺哲夫)、(9) 米原部落内の礎石群、(10) 少監どん紀屋敷、(11) 長者原の遺構、(12) 宮野の礎石群 (乙益重隆)、小結 (乙益重隆) (上野辰男)

2 鞠智城の歴史

鞠智城のことがはじめて史上の記事に見えるのは、統日本紀文武天皇2年（698年）5月の条に「甲申、大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕ひ治めしむ」とあるのが最初である。当時この城は大宰府の北の備えとして設けられた大野城と、西南方の備えとして設けられた基肆城とともに、南の備えとしてとくに重要な施設であつたことがうかがわれる。これより先に大野、基肆城の築城については、日本書紀天智天皇4年（665年）秋8月の条に、百済の王族出身でかつ、祖国を失い日本に亡命して来た達率憶礼福留・同四比福夫をして、筑紫国において大野および椽（基肆）の二城を築かしたことがみえる。故にこれらの二城とともに、33年後になって繕治せしめる必要を生じた鞠智城も、大野・基肆の二城と相前後した頃築かれたことがうかがわれる。

日本書紀によると西暦6世紀の中頃は、わが国にとって内憂外患、多事多難な時代であった。すなわち645年孝徳天皇の大化元年には大化改新が行なわれ、その国内整備もととのはないのに朝鮮半島では、つぎつぎに重大な事態が生じた。そして天智天皇2年（663年）には、百済救援のため出兵していた日本の水軍と、唐の水軍が今の韓国忠清道錦江の河口にあった白村江において激戦し、ついに日本は敗北し、百済は滅亡するにいたった。このような国防上の急にそなえて日本の各地には、多くの防塞施設が設けられた。まず天智天皇3年には対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、筑紫に水城が築かれた。ついでその翌年には長門国に城が築かれ、大野・椽城が築かれたことはすでにのべた通りである。さらに同六年には倭国に高安城を、讃吉国山田郡に屋嶋城を、対馬国に金田城が築かれた。このような情勢下にあつて鞠智城も築かれたのである。

鞠智城はどこに築かれたのか、日本書紀にも統日本書紀にも明らかでない。しかし後にのべるように平安時代になって、史上の記録に散見する菊池城が肥後国にあったことと、ここにのべる鹿本郡菊鹿町米原を中心とする遺構を考える時、それがこの地にあつたことは疑念の余地がない。とくに鞠智はクク



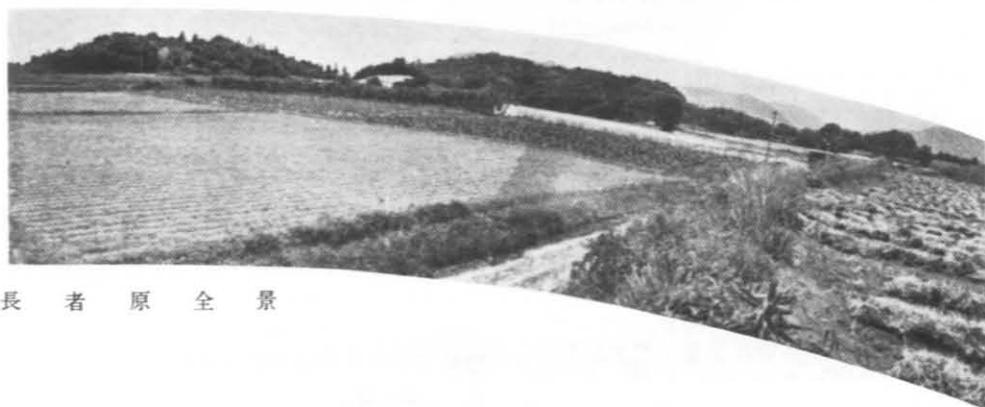
第1図 米原

チと読まれ、平安初期に編纂された倭名類聚抄によると、肥後国菊池は久々知とよばれた。故に上古の終り頃まで鞠智と書かれたのが、奈良時代になって二字好字佳名の原則から、菊池と書かかれるようになったことは推察に難くない。

菊池城は平安時代になるといろいろと不吉な事件がおこった。まず文徳実録によると天安2年（853年）閏2月「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という奇怪な事件がおこった。そして「丁巳、又鳴る」とみえ、相ついで不可解な事件が重なっている。当時の菊池城院が現存する遺構のどこに比定しうるか明らかでないが、今後の研究課題として注目される。さらに大宰府の言上した報告によると、同年5月1日「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という三度目の怪事件がおこっている。そしてこれらの事件があたかも前兆をなすかのように「同城の不動倉十一字火く」という記事を見るのである。おそらく今回調査の行なわれた米原部落の南側、通称長者原の一带から出土する焼け瓦と火にかかった礎石、焼け米は、その時の火災を物語るものであろう。

さらに三代実録元慶3年（879年）3月16日丙午の条によると「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」という記事がみえる。このばあいの「菊池郡城院」は一に「菊池郡城境」とも「菊池郡城院」ともみえるが、おそらく菊池城院のことにはわかりなからう。とにかくこうした一連の不吉な事件が相ついだ後、菊池城のことは永遠に史上から消えてしまうのである。そして城の所在地はもちろん、遺跡、遺構さえもわからないまでに忘れ去られてしまった。そして城のことが再び問題視され、考証されるようになるのは江戸時代後期以降のことである。その研究過程を略年譜風にたどつてみることにしよう。

（乙 益 重 隆）



長 者 原 全 景

3. 研究略史

- 1、鞠智城についての研究文献は江戸後期になつてあらわれた。
 渋江公正の「菊池風土記」には「文徳実録の天安二年菊池郡不動倉十一宇火あり」との記事を米原村長者屋敷に擬している。
- 2、桃源問答には「菊池の初代則隆以来の居城となつた深川の菊の城は、鞠智城の旧跡を取りしつらひて居城としたとも考えられるが、城家の居城であつた木庭村も鞠智城の旧跡か」とも述べている。
- 3、「肥後国誌」は深川説を否として、鞠智城は兵庫や不動倉などをもっている官城であるので隈府、水島、米原の一带におたる広大な地域を占むるものであらうとみている。
- 4、明治になつて「大日本地名辞書」は「鞠智城を辺地の肥後国菊池郡に求めるのは、大野城を豊後国大野郡に求めるのと同じである」と笑っている。
- 5、昭和に入って大阪毎日新聞社熊本支局長であつた中島秀雄氏は同紙上に「米原の要害こそ続日本紀天武天皇二年五月、大野、基肄城と共に繕治された鞠智城跡であらう。礎石の並ぶ山、多くの礎石が出た畑、焦米が層をなして埋っている畑、涼の御所、烏ヶ城 シヤカンドン、紀屋敷、宮床、馬洗淵、長者井などの地名がある」と報じている。
- 6、熊本地歴研究会は基肄城跡を踏査して米原における遺構と比較し、基肄城跡の研究者久保山善映氏や松尾禎作氏等も米原遺構を踏査して「長者の的石」は朝鮮式山城の城門礎であることを確めた。
- 7、坂本経堯はしばしば米原一帯の地形、遺構を踏査して、昭和12年8月「地歴研究第10篇第5号」に「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」さらに昭和17年7月「日本談義 通巻51号」に「鞠智城考」を発表した。
 鞠智城の文献を集録して性格を考え、米原高台に登る東、南、西の城門礎、水門礎、長者山の礎石間尺、土塁線などは朝鮮式山城の規模に類し、焦米の多量の埋没は天安二年不動倉十一宇火くの史実を語り、とくに土塁線は自然尾根を利用して外側を切落し、鞍部にのみ盛土した状態に注意し、さらに土塁線は米原台地縁辺だけでなく、これを内郭として墨線は頭合より木野丘陵を北に登って城北の谷をいだけ外郭を形成することに注意した。
- 8、昭和13年城北村長松尾條規氏は城北村史蹟顕彰会会長となり鞠智城跡を調査し標木を建てて保護顕彰につとめた。
- 9、昭和28年10月 九州大学教授鏡山猛氏を中心とする九州文化総合研究所の大宰府、大野城、基肄城の調査の一連として「鞠智城跡の調査保護計画」をたてて県に陳情したが実現しなかつた。
- 10、昭和28年11月 坂本経堯は熊本史学会に「鞠智城について」発表した。
- 11、昭和31年8月 国学院大学教授滝川政次郎氏を主査とする菊池古文化調査団は米原一帯の遺構を調査し、とくに長者山の礎石列を実測し、明治大学教授島田正郎氏は菊池市において「高勾麗国内城と鞠智城」について講演した。
- 12、昭和33年9月 熊本日日新聞社発行「熊本の歴史」に鞠智城跡を米原に求めて登載した。

13、昭和34年12月 熊本県教育委員会は「史跡伝鞠智城跡」として指定した。

(坂 本 経 堯)

4 古代山城の遺跡

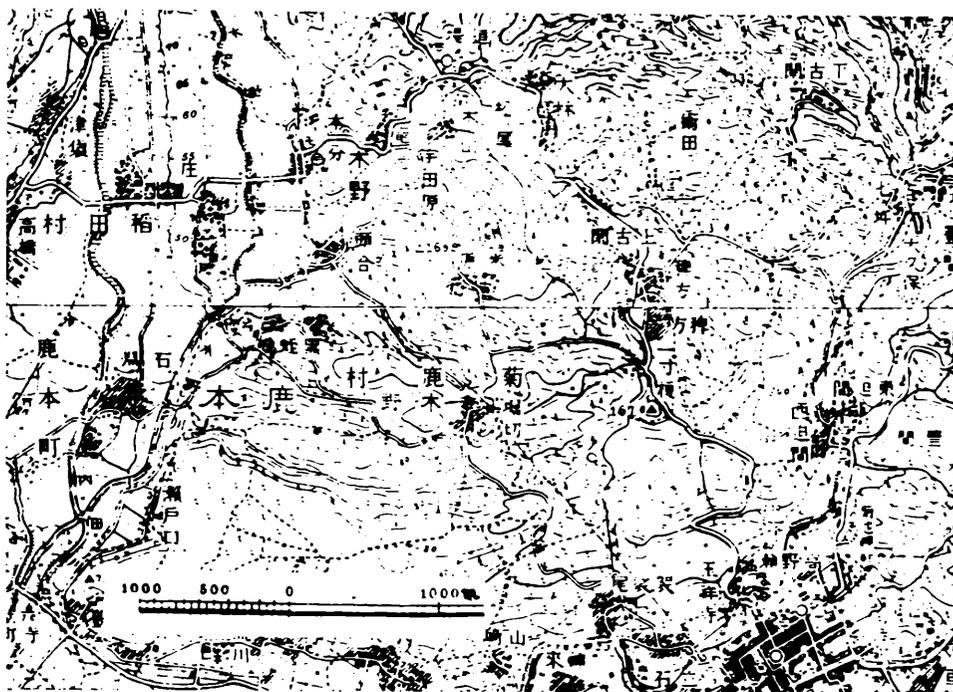
(1) 地理的位置

菊池・山鹿平野の北縁を限る連山の主峰、八方ヶ岳の西南麓には多くの小河川溪谷が入りくみ複雑な地形を形成する。中でも木野川の支流初田川流域の小盆地、およびその小支谷に面した米原の小盆地は、標高わずかに 160m前後の高地にすぎないが、深く湾入した谷や急峻な崖線で区切られ、さながら天然の要隘を形成する。このような天然の地形をそのまま利用し、上代山城を築いたのが鞠智城で、その遺構は熊本県鹿本郡菊鹿町大字米原を中心に広く展開する。

(2) 遺跡・遺構の概要

鞠智城の遺構は従来多くの先学によって探索されてきたが、それらの位置や地名・内容については必ずしも正確に把握されたものばかりではなかった。しかし従来の知見と聞きこみによって知られている遺跡は概ね次の箇所をあげることができる。

まず建物礎石群の所在地についてのべると、米原部落内では人家の間をめぐっておびたしい花崗岩の礎石があるが、それらのほとんどが旧位置から移動している。また米原部落の南方、長者原の畑地帯



第2図 遺跡位置図

には、明治の頃まで礎石列が残っていたというが、耕作のじやまになるため埋めたり割ったりし、今では「長者どんの足形石」をはじめ数個が点在する。とくに昭和40年夏の開田工事には、多くの礎石が発見されたが、多くは庭職人に買いとられたという。また長者原の西端を限る高地を長者山とよぶ。この地は現在部落の共同墓地と雑木林、くぬぎ林からなり、建物の礎石列がみとめられる。礎石列は実測された結果軸心間隔7尺、南北5間、東西4間の建物4棟が東西に2棟、南北に2棟ずつつながっていたものと想定されている。眺望すぐれ、伝説によると「米原長者の御金蔵跡」とよばれる。また長者山の東麓、字宮野の畑からも古瓦が発見され、周辺に礎石列があったというが今では埋没して明らかでない。

その他頭合部落^{つごう}の宅地内には、もと並んだ状態で礎石群があり、田子山および頭合を起点として木野の丘陵を北にたどった土塁線の頂部にも礎石群があったというが、いずれも現存しない。

つぎに城門礎石とみられるホゾ穴のある石材についてのべると、まず米原部落の東南側、菊池市深迫には巨大な平石が畑の中に斜に埋まっている。その相対する礎石こそ現存しないが、おそらくこの地は鞠智城に出入する城門の一つであつたことがわかる。同様なホゾ穴のある門礎石は菊池市堀切より上りつめた旧道のほぼ中央部に埋没しており、これと相対する門礎石は現在堀切の木野神社の鳥居わきにすえられている。その他にも城門礎石は、黒蛭の谷から米原に上る道路わきの池ノ尾に1個残る。石材は深迫や堀切の例に比べるといちじるしく小さいが、ホゾ穴の大きさや形はまったく同じで、花崗岩を使用する。おそらくその相対する礎石は洪水などで流失埋没したのであろう。

鞠智城の外周を特色づける施設の一つに、山の尾根をめぐる延々とつらなる土塁線がある。その土塁は盛り土によって堤防状をなすものもあるが、多くは山の尾根の部分を連続的に加工したものである。すなわち山の尾根の、城外側を急崖に切り落して上面をならし、城内側には犬走り状の「車路」を設ける。このような土塁は福岡県大野城や、佐賀県基肄城などにしばしばみるところで、鞠智城の場合も同様である。現在土塁線のたどりうるのは、米原部落の西方を限る「長者山」および「灰塚」、「スミの御所」、「佐官どん」の峰にわたる尾根、およびその支脈をなす「権現さん」の峰にわたってみとめられる。その他にも米原部落の南方菊池市の堀切より同市一寸榎にわたる崖線、黒蛭より池ノ尾方面にわたる崖線、木野川の沖積平野にのぞむ頭合部落や本分部落の背後を限る山の尾根などに、断続的にそれらしきものをみる。

以上のほかにも鞠智城の内外には、由緒ありげな地名や施設が各所に点在するが、その実態は明らかでない。すなわち米原部落内には「少監どん」、「紀屋敷（まつりやしき）」、「岩蔵山」、「長者井戸」その他の地名があり、米原西方の丘陵には「スミの御所」の地名も存する。また黒蛭の谷には石垣を築いてつくった樋門があり、米原部落の南方「馬こかし」の難所には道路の片側を高い石垣で築く。さらに一寸榎に通じる「三枝」にも道路の側面を高く石垣で築いた所がある。もちろんこれらの樋門や石垣は構築手法からみて近世の所産と考えられるが、城の配置や周辺施設から考えて、何か由緒ありげに思われる。

とくに鞠智城の外郭は、米原部落を中心とする周辺約5キロ以内の地域に限られるか、それとも従来云われていたように道場・竜徳・頭合の背面をめぐる山の尾根づたいに、牛落しの谷をへだてて黒蛭・堀切を経て東北方金頭の峯^{ほんがしら}につらなる周囲約11キロの、ぼう大な外郭線によって構成されるかについては、今後の調査をまたねばならない。（坂本 経 堯・乙 益 重 隆）



第3図 遺跡付近の地形図

(3) 池ノ尾の門礎石

鹿本郡菊鹿町本分から頭合を通して約66分の1のゆるい傾斜をのぼって800mばかり行くと右手に池ノ尾の門礎石がある。(第5図)

北方から木野・頭合と続いて来た丘陵の稜線——鞠智城の外郭線であろうといわれるこの稜線が、方向をかえて急に西方に屈行する。その方向変換点にこの門礎石がある。西北方からの交通を遮断検問するにふさわしい地点である。

門礎石は雨水によってできた浅い谷の谷頭にある。花崗岩の風化した粗粒砂からなる地盤は侵蝕が激しく、調査時には地表下約50cmに埋没していた。

門礎石の周辺を掘開して地層を調査した結果赤色砂土、青色粘土、花崗岩砂土、灰色砂土、黒色砂土などが間に塊石をまじえて乱雑に堆積していることがわかった(第8図)このことから、門礎石の現在の地点は原位置から移動しているといわねばならない。原位置はおそらく現位置から谷の方向に約10mぐらゐさかのぼった地点に想定される。というのは、その地点が谷をさかのぼった方向への傾斜変換線にあっており、現在も畑の畦畔が1m近く高くなっていること、さらに後にのべるが、その点と西方稜線を結ぶ線上にめくら水門のあとではないかと思われる塊石、切石が埋没しているからである。

門礎石の岩質は花崗岩で、長軸が谷の方向にむかい、その平面形は長軸の長さ1.43m、短軸の長さ1.15mの卵形を示す。礎石表面長軸の北端から23cmの点を中心として直径17cm、深さ14cmの門のほぞ穴がある。(第7図)

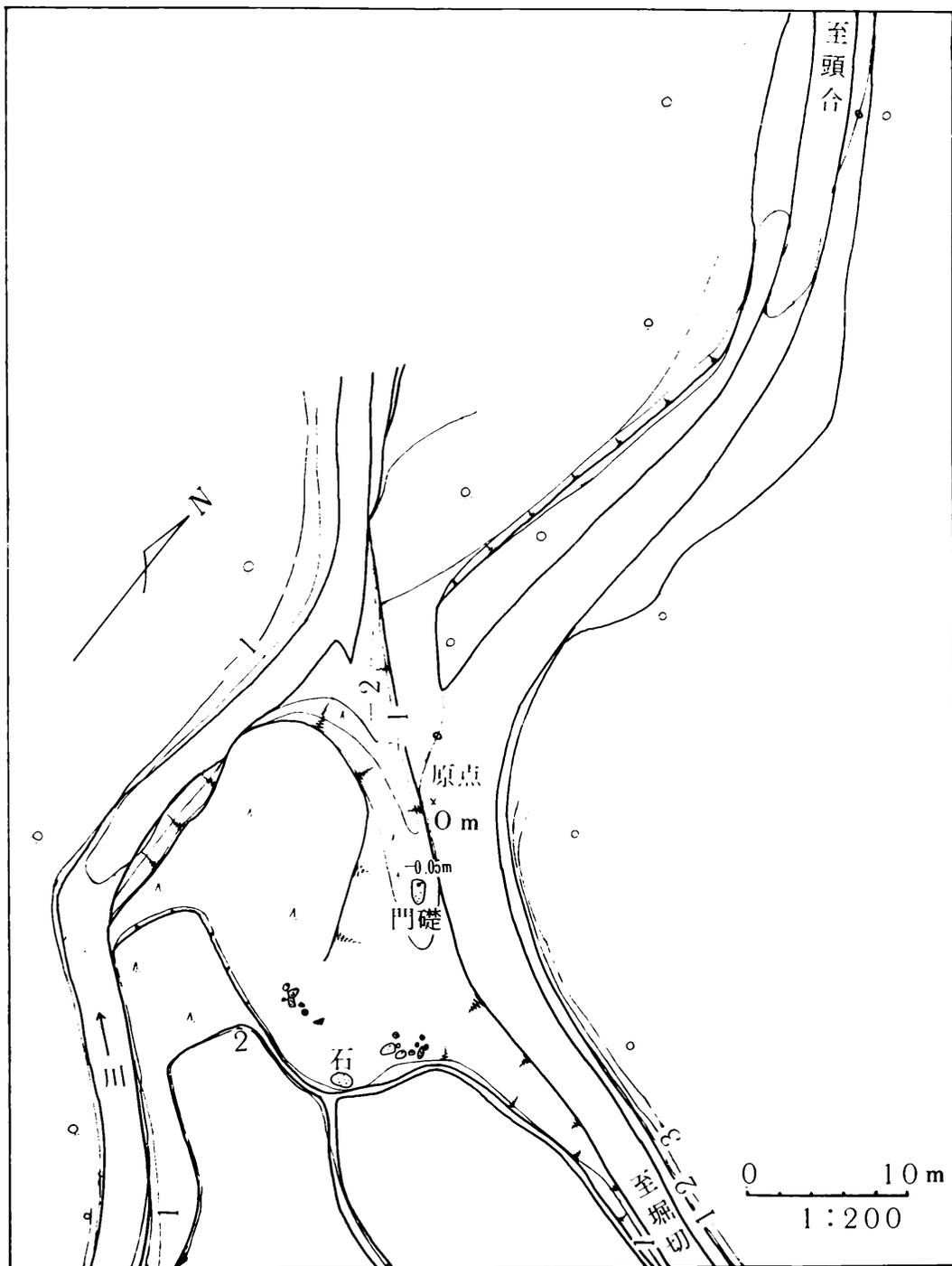
ほぞ穴の内面は磨滅して平滑である。ほぞ穴の最深部は穴の中心をそれて北側によっている。ほぞ穴のふちの磨滅の程度も、穴のふちが一樣に磨滅しないで南側の部分が磨滅がつよい。穴の底面に鉄錆がこっている。門扉のほぞを受けるために鉄製の受け皿がおかれていたことを示すものである。①

現存する門礎石に対応する門礎石があと1基あるべきであると考え、原位置と推定される付近を掘開したが、遂にそれらしいものは発見できなかった。しかし掘開作業の途中、一定の範囲に塊石、切石があることに気付き一帯を掘開した。門礎石の周囲とおなじく流入した土砂が約50cmの厚さに被覆している。

土砂を除去するにつれて多数の塊石、切石が出てきた。その配列に石垣状の



第4図 池ノ尾遠景



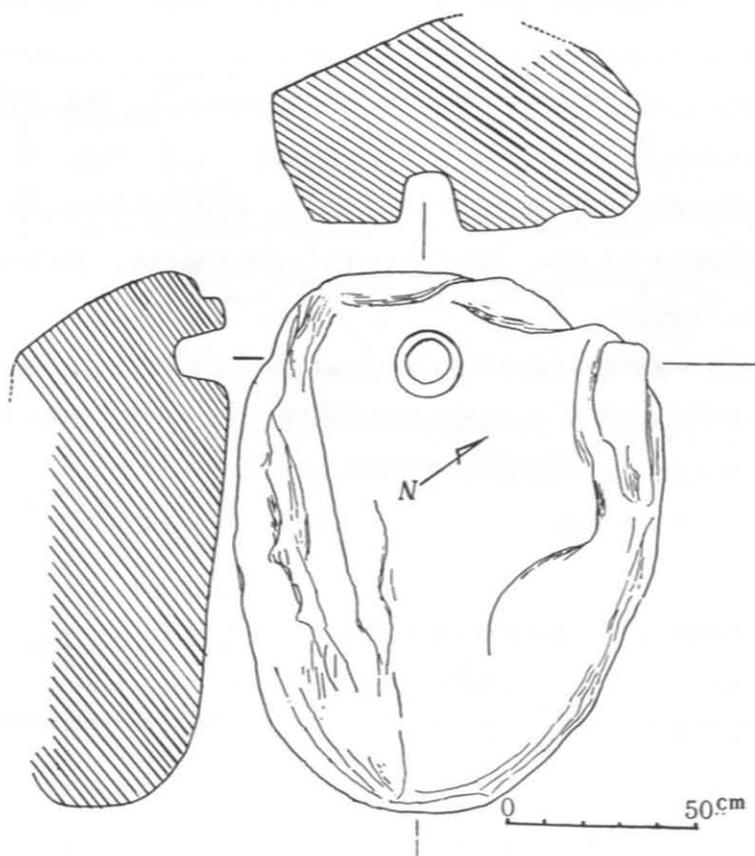
第5圖 池ノ尾の門礎石周辺地形図

遺構が復原できないだろうか、また配列に一定の方向がもとめられないかなど、②細心の注意をもって掘開し測量したが遂に確認できず、今回の調査を打ち切り再び地中に埋没した。これらの塊石、切石のなればは石垣線をなす可能性が強い。

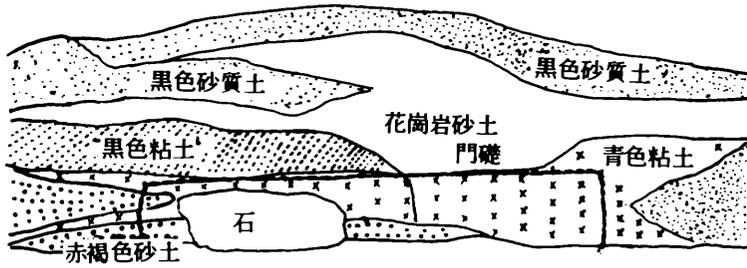
註 ①②九州大学教授鏡山猛氏の御教示をうけた。



第6図 池ノ尾の門礎石



第7図 池ノ尾の門礎石実測図



第8図 池ノ尾の門礎石付近土南側壁土層断面略図

(4) 堀切の門礎石

隈府又は黒蛭方面から米原へ入ろうとする重要な通路の一つに堀切がある。読んで字のごとく米原を囲繞する山稜を堀りとおして道路を通じている。この調査に行った当初、泥熔岩の崖を2～30mもの長さにながってつくった墜道がいくつもあることが深く印象に残っている。

堀切は高さ約4mの鞠智城の外郭線かと思われる稜線を道路幅3.50mをもって切りとおして通路をつくっている。(第9図) この切り通した南側、米原から言えば稜線の外側に門礎石がある。はじめ崖にたてかけてあったが、あとで現在地に移転したという。調査時には流入した土砂におおわれて全くその所在がわからず、村民にたずね、おおよその見当をつけて掘開作業をはじめ、深さ1.50mで、はじめさがしあてたほどである。

門礎石は巨大な1枚石を用い、表面を削平して平滑にしている。平面形は長方形を基準とするが変形が著しい。石の長さは長軸線上で2.66m、幅はもっとも広いところで1.84m、石の厚さ約50cm～20cmを有し花崗岩である。(第11図)

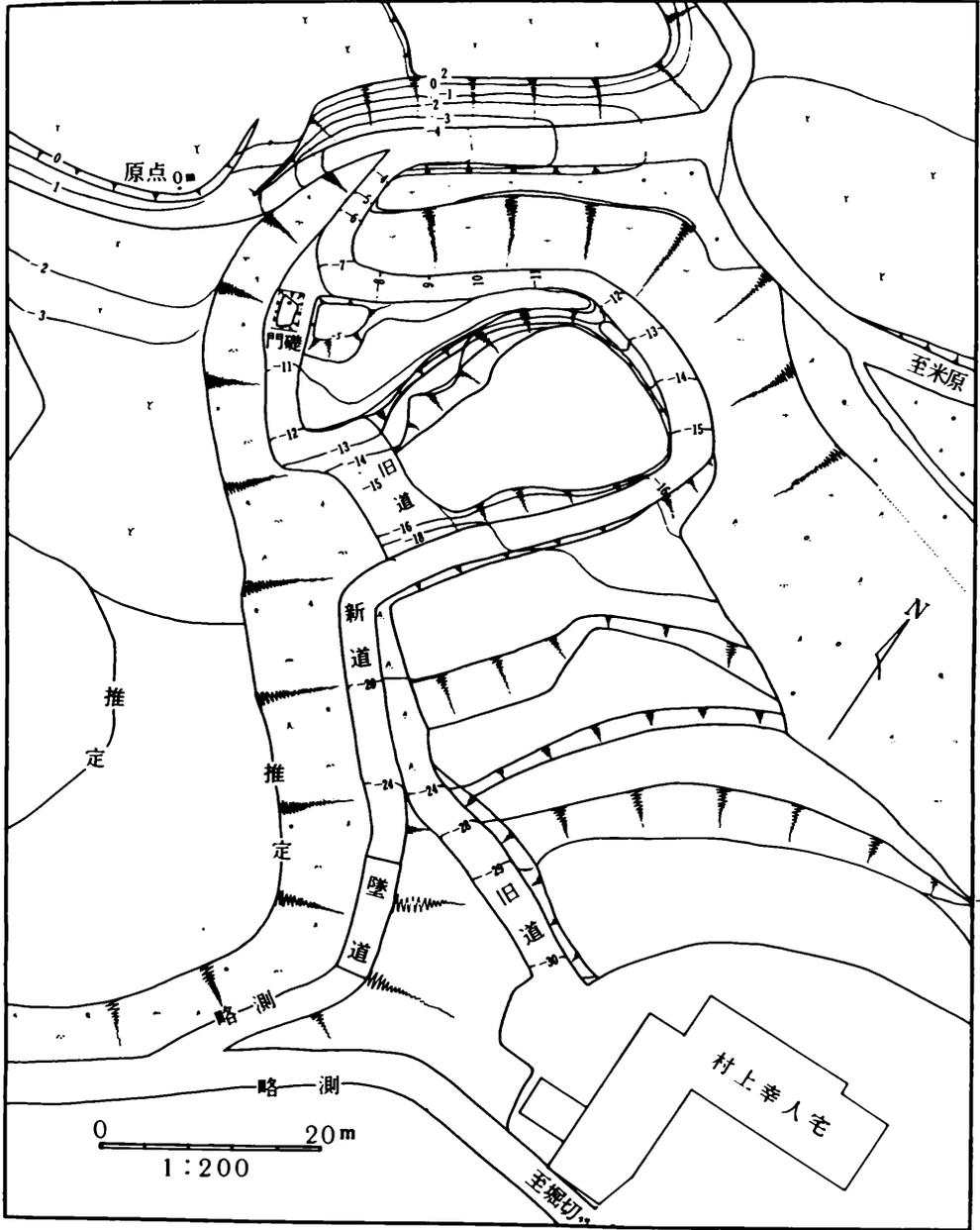
門礎石表面の長軸線上、一侧に寄つて直径16cm、深さ15cmのほぞ穴をうがっている。穴は底部に近くに従ってせまくなり底径10cmとなる。穴の南側が磨滅の度が強い。穴の内壁、上線から約5cmさがったところに門扉廻転軸の受皿による茶褐色の鉄錆が残存している。

門礎石のほぞ穴に近い側面約40cmにわたって緩やかな弧状に欠ぎ取られ、磨研されている。おそらく門扉を支える掘立柱をたてたあとであろう。

おなじ堀切部落の木野神社石段下に礎石がもう1基ある。古老の話では50年ばかり前に堀切の門礎のあった場所からここに移転したといい、前記堀切の門礎石と一対をなすものである。

これを仮りに木野神社門礎石(第10図)と称する。

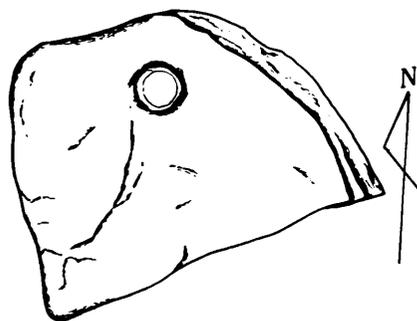
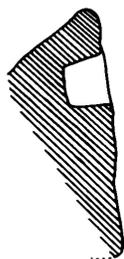
木野神社門礎石の平面形は長方形に近いが、それも多少変形している。石の全長は短軸線上で80cm、長軸のもっとも幅の広いところで1.04mを有する。石表面の北端から24cmの点を中心として直径10cm、深さ14cmのほぞ穴がある。堀切門礎石と同質の花崗岩で全体に10度傾いている。



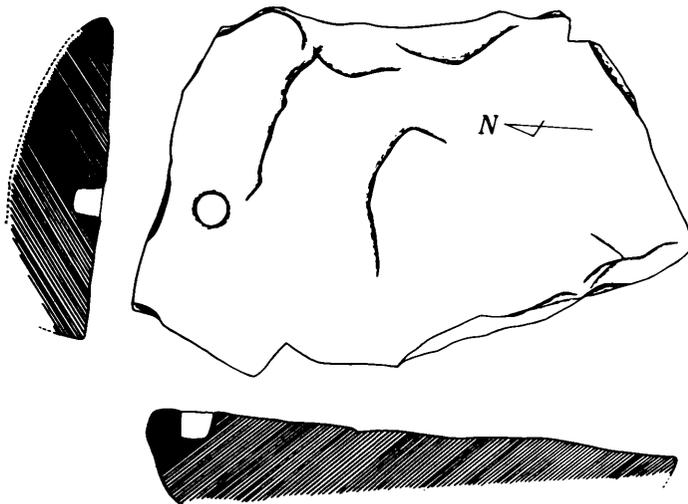
第9図 堀切地形図

調査終了後堀切門礎石と木野神社門礎石の実測図をつきあわせたところ、この2個の門礎石はほぞ穴を両端において、おのおのの石の端が接合することがわかった。もと同一の個体であったのが割截されて1個は原位置近くに残り他の1個は持ち去られて木野神社に運ばれたことが判明した。古老の話は必ずしも全部を尽くしていなかったけれども事実を伝えていたわけである。

(原 口 長 之)



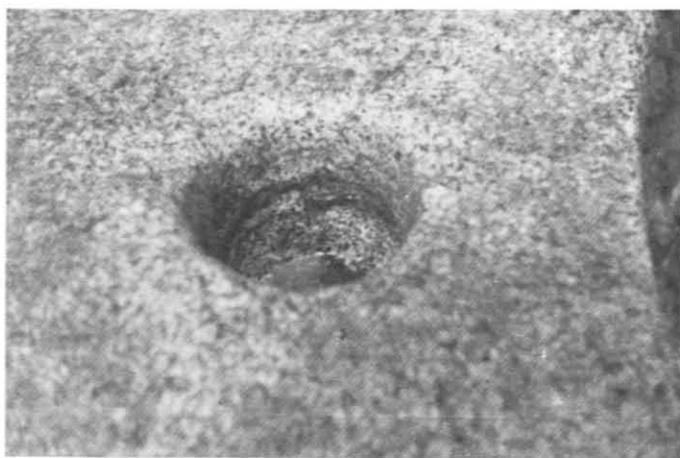
第10図 木野神社の門礎石約1/25大



第11図 堀切の門礎石約1/38大



第12図 堀切の遠景



第13図 堀切の門礎石



第14図 木野神社の門礎石

(5) 深迫の門礎石

門礎石を中心とする遺跡は、鞠智城全域からみればほぼ東南に位置し、行政的には菊池市深迫に属する。古くから「長者ドンの的石」とよばれる巨大な門礎石が、谷頭近くの畠地の崖面近くに半ば傾斜し、埋もれかけている。本期間の調査目的を

① 深迫遺跡の地形測量 ($\frac{1}{200}$)

② 礎石の実測をかねて、その埋没状況を知るために、礎石に接してトレンチを入れる。

の2点にしぼって調査した。以下調査所見の内、重要と考えるものを、箇条書きに列挙して記載する。

門礎石 (17、18図)

- 1、この門礎石については、背後の崖上から転落したとも従来云われ、かつそのようなことを推定させる地形でもあるが、この考え方は今回の発掘の結果からは否定される。
- 2、トレンチ断面の所見によれば、旧地主の萩尾氏が約30年前、この石を移動させる目的で掘った穴が明かに認められ、それ以外には層序の攪乱は全く認められなかつた。
- 3、なお、門礎石の下位及びそれと同一のレベルの層には、布目瓦の破片、石塊、鉄釘、炭化物などが伴出した。
- 4、現在門礎石の傾斜するのは、除去の目的で根石を抜きとり、反対側から持ちおこしかけた傾斜と考えるのが、合理性のある考え方であろう。
- 5、したがって礎石は多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考える。
- 6、石質は花崗岩(当地方ではコメ石という)で、その寸法は長径2.68m、短径2.26m、厚さ約80cm以



第15図 深迫の門礎石周辺

上を測り、上面はことさらに加工した痕跡はないが、概ね平滑面を呈する。一侧に偏して円形の
納穴が穿たれているが、仔細に見ると、二段にえぐられかつ完全な同心円になっておらず偏ってい
る。また納穴内部を観察すると使用による磨滅面は西側がもっとも強い。このことは回転方向に関
連する。寸法は下記のごとくであるが、この寸法は池ノ尾所在の門礎石の納穴の寸法に近似するよ
うである。さらに納穴のある側の礎石の縁が明瞭なえぐりではないが、浅い不整形のカーブをもっ
ている。納穴寸法 深さ14cm(約4寸6分) 短径18cm(約5寸9分) 長径20cm(約6寸6分)。

- 7、門扉の柱根につくられた出納を、納穴に嵌入して門扉が廻転する式の、納穴礎石に属するが、納穴
内には堀切門礎石で認められたような、軸受けの機能をもつ 鋳鉄の 受皿があったような痕跡はな
い。
- 8、廻転の方向を示唆するのは6でのべた納穴内面の磨滅程度の差異が西側においてより著しいことか
ら、門扉が後に開く「内開」の門扉であったことを推定させる。
- 9、対称位置に同様の礎石があるのか否か、片袖式の門扉なのかについては、それを検出するために、
トレンチを拡大したのでその項でのべる。

拡大トレンチ (20図)

門礎石より南に上記の問題を解決するためにトレンチを拡大した。その結果トレンチ内においては対
称をなす門礎石(西礎石)はなかつた。但し発掘面積が狭少であるため、結論については、次年度の調
査まで留保したい。また門礎石より東側についても、全く鉄を入れなかつたので、同様に留保したい。
以下拡大トレンチについての所見をのべる。

- 1、納穴の中央より南に約 5.8m(唐尺19尺)余の地点に、礎石をぬいたあとの根石群とでも称すべき
長径約20cm余の石群を発見、石質は花崗岩であるが、凝灰岩も1箇ある。(現地表より-60cmの深



(北側から望む)



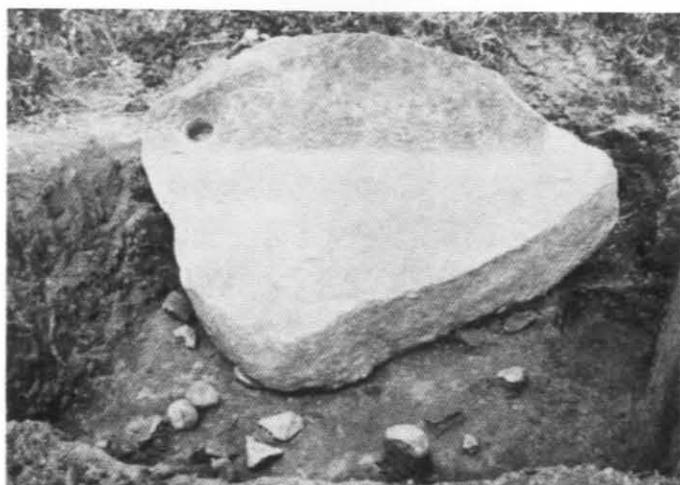
第16図 深 迫 の 地 形 図

さである。) 石群の周囲と下位には、黒色土を認める。あたかも穴を穿った際に嵌入する上層の土のような印象を与える。石を抜いた穴は現存長径約 1.2mを測るが、これは上位は削平されいてるので、上位の径はこの数値よりもさらに大きいことが考えられる。

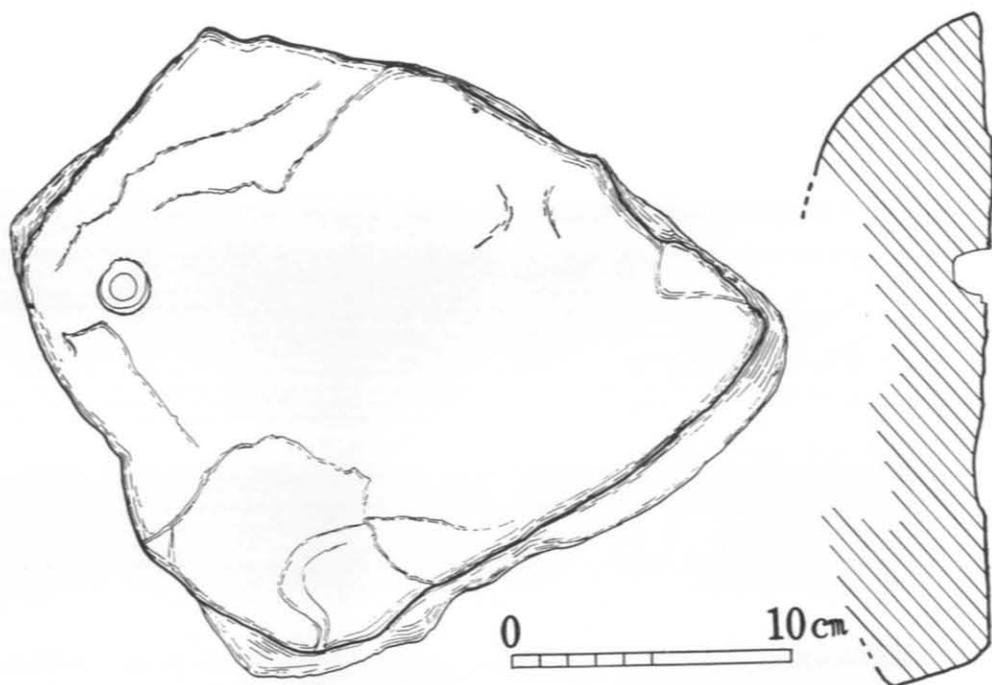
2、門礎石と根石群と考えられる石群との間は、後代のいも穴や背後崖面からせり出した土などを別にと、概ねピンクがかかった硬い粘土である。これは人為的な盛土ではない。幅 3.6m (12尺) 但し内法を測る。

3、上記2のピンク色の粘土の地山の東西断面は中央部がわずかではあるがやや高く平坦である。南北断面は門外、つまり谷の方にやや低く傾斜し、黒土をかぶっている。これらの点は自然の地形にも合致している。

4、この地山面には幅12cm程度で長さ20cmの礫がくいこみ凝灰岩の



第17図 深迫の門礎石



第18図 深迫の門礎石の実測図

細片や土師質の細片がみられる。

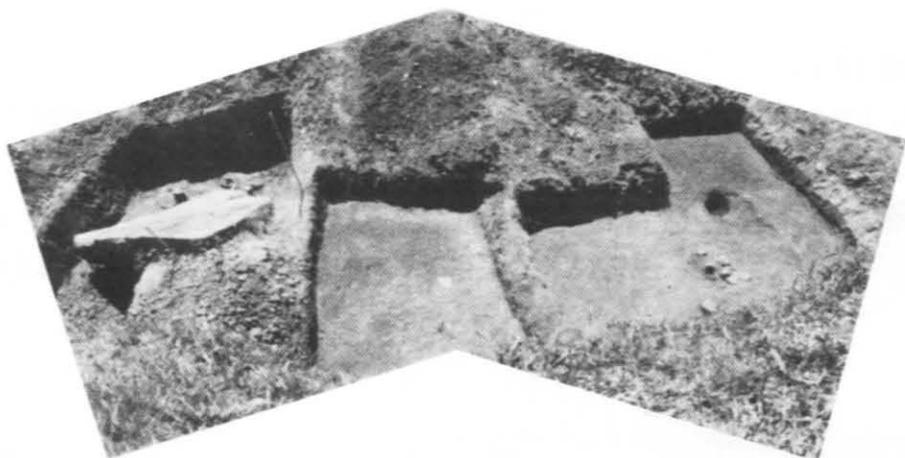
- 5、1の石群に近く、直径40cm、深さ34～40cmのピットが検出された。このピットは周囲の土と識別はかなり困難で、ただ硬度を異にする。内部から遺物は検出されていない。

測量における所見

- 1、谷頭近く位置する礎石の、相対する谷（迫）はさほど大きい方ではない。開口部近くの県道まで約300m位である。けれどもその勾配はかなり急で、現在でも六の段崖が形成されている。深迫の城門に達する道路を考えた場合、往時はたとえ距離はみじかくとも、かなりの坂道であったと考えてよいのではあるまいか。
- 2、ことに門をくぐって、城内に入ってから、現在地形のままでは普通の方法では登れない程の崖である。これは谷頭から土をせり出して開いた段畑が各所にあるからである。門礎石の位置から城内と推定される、比較的平坦部まで50数mの距離を上るには、どうしてもひどい坂道を登るかまたは曲折の多い道路を通るほかない。
- 3、近距離でかつ勾配の急な道を通つたとすれば「階段」を設けるという特別な施設がまず考えられる。現地形においてそれを示唆するかのような「はり出し」が礎石の下の崖面に1箇所、上位に3箇所。これらを当時の階段の痕跡と認められないだろうか。勿論これらは崖面を縦断せねば確言で



第19図 深迫の門礎石周辺



第20図 深迫の門礎石周辺トレンチ

きないことで、決して断定するのではないが、われわれは上記のような想定を今年度の調査時に考えたのであえて記録しておく。

- 4、この想定をたすけるのは拡大トレンチ所見1・2・3でのべた、硬い地山で、これは両門礎石の間の、路面を物語るものではあるまいか。
- 5、深迫の城門に到達するまでの道路についても、中央、右より、左よりなどのルートがあろう。何れであるかについては、憶測する資料はあっても、その証拠はない。上記のことがらとともに次年度



(南側から望む)

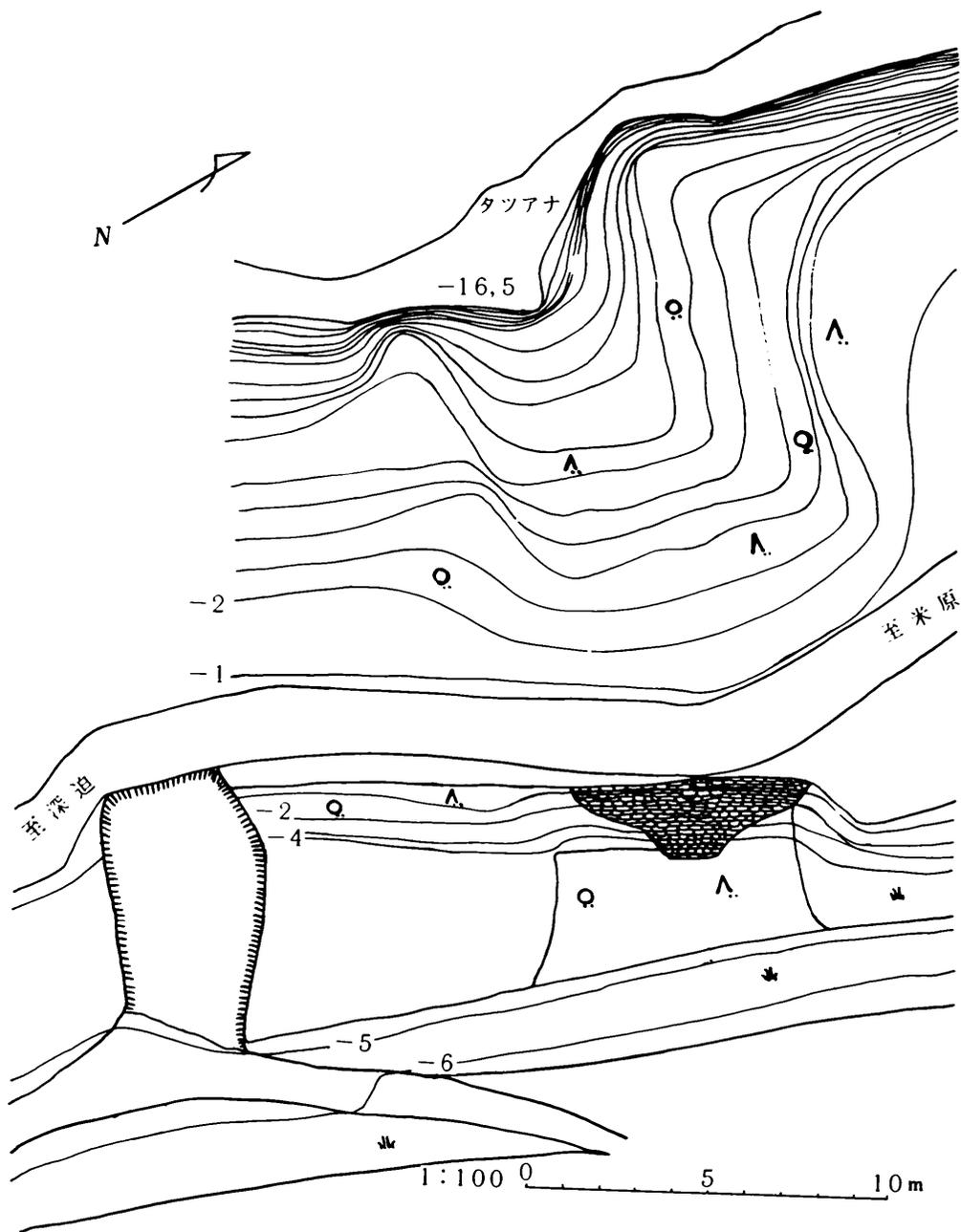
の課題である。

最後に、上記各項を要約すると、拡大トレンチにおいて検出した根石群は、西側門礎石の抜きとられた跡で、両礎石の間の硬い地山は当時の路面で、しかも前記のごとき勾配をもつ。しかしてピットは両礎石に附属する柱の穴であろうか。東礎石は納穴礎石で内扉は後開きであろう。(三島格)

註 坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」地歴研究 1937年 熊本 県地歴研究会刊



第21図 馬こかし遠景



第22図 馬こかし地形図

(6) 馬こかしの道

深迫門礎から米原に進む場合どうしても通らねばならない通路がこの「馬こかし」である。この地点は通路が急にせまくなり要衝の地といえる。現在東側は水田が湾入し、西側は軟弱な凝灰岩を鋭くえぐった自然の崖になっている。この馬こかしの通路は坂本経堯氏の記憶によると、昭和初年には非常にせまくて丸太棒を渡してあり、現存する東側の石塁については草木が繁っていてよく分らなかったとのことである。しかし地元の老人の話では石塁を築いた記憶もなければ、祖先が築いたという言い伝えも残っていない。したがって石塁の築造時期は分からないにしてもかなり古い築造であることがいえる。

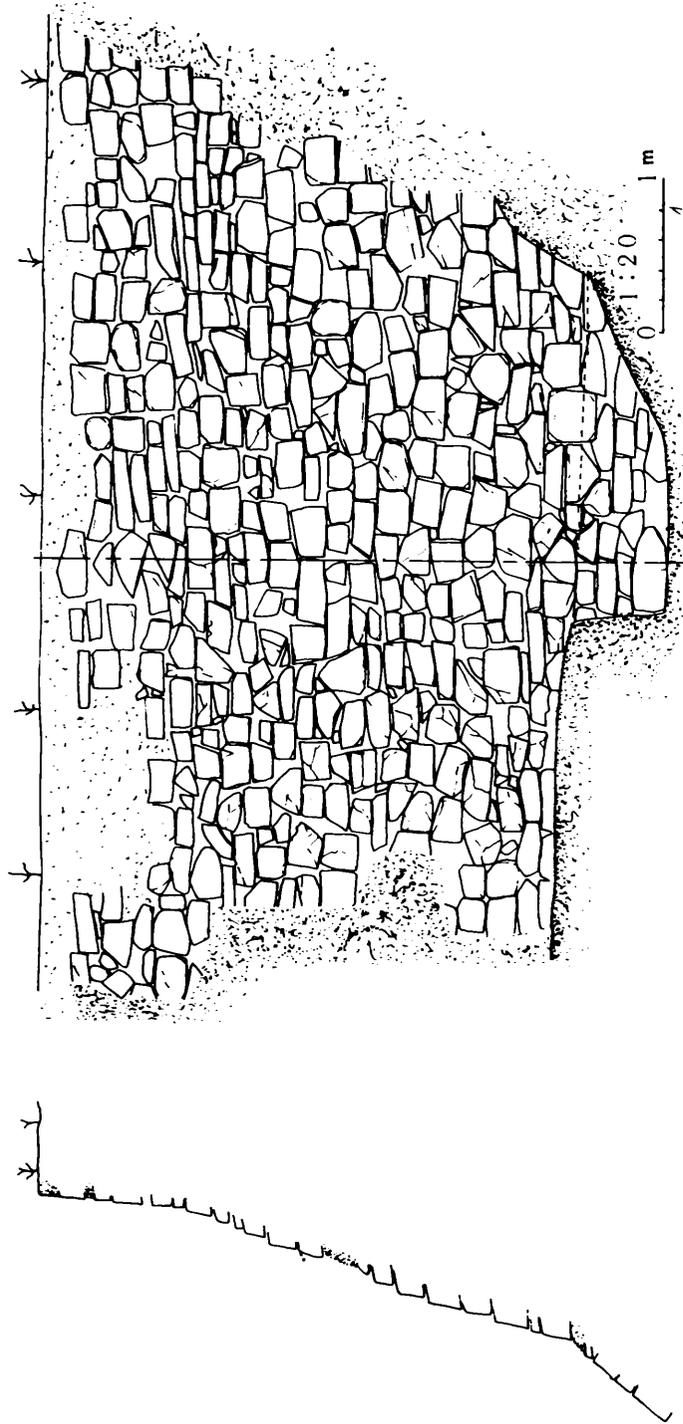
さて石塁は先述のとおりこの通路の東側にのみ認められる。その規模は長さ約6.6m、高さは約4.3mまで確認できる。傾斜は断面図に示すように非常に急勾配で、上から約2mまではややそり気味であるが、その下約3.8mまでは幾分ふくらみをもち、それ以下は根固め状に裾を広げている。石材はほとんど凝灰岩を加工して使用し、一部に安山岩質のものを認める。石塁の築造状態はほぼ長さ30~60cm、厚さ10~30cmの切石をほとんど水平に積みあげ、すき間には小形の石をつめこんでいる。なお石塁の奥行きについてはその深さ、形状ともに不明である。

石塁の裏に当たる西側の崖は目のくらむような急傾斜で、水平距離にしておよそ10mで12mの落差があり、さらにそこからはほとんど切り立ったようになっていて、道路面との比高16.5mを計る。崖の最深部は俗に「タツアナ」と呼ばれており、降雨のときは流路となる。タツアナから上を見上げると、凝灰岩の浸蝕崖がちょうど屏風のように切り立ち、その間からわずかに空が見えるといった感じである。

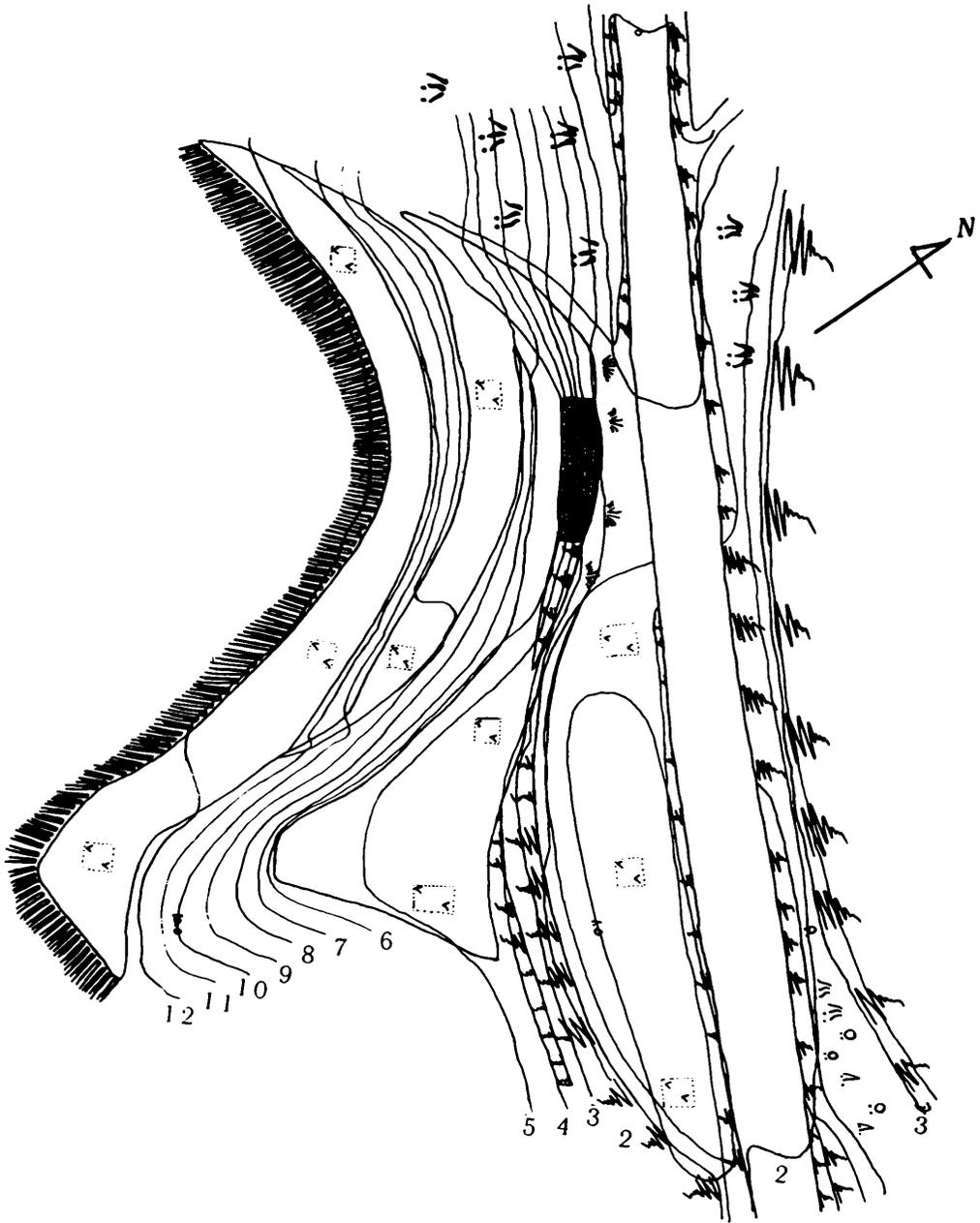
(限 昭 志)



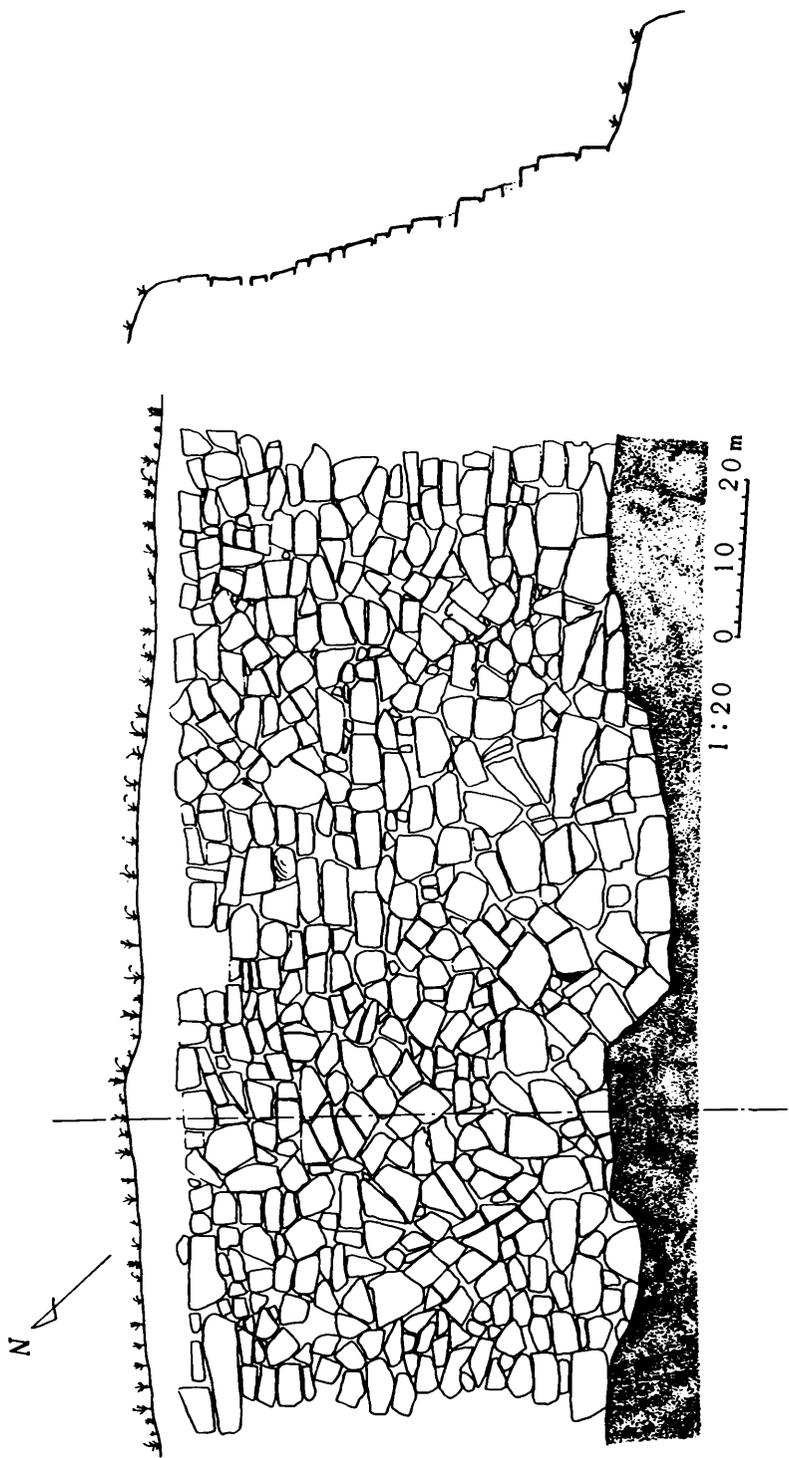
第23図 馬こかし石塁



第24図 馬こかしの石垣実測図



第25图 三枝石垣地形图



第26圖 三枝石垣實測圖

(7) 三枝の石垣

三枝石垣は米原・一寸榎方面をむすぶ道路筋に在る。米原台地の南側北崖にそって道路は連なる。石垣付近の地形(25図)は、東西に走る道路の南、北側がかなり急な崖線をなす。

石垣は道路の南面に位置する、道路をはさんだ北側崖には石垣は認められない。しかし、崖の基部に数段にわたって石垣を築いている。

石垣についてのべると(26図)その長さは約8.30m。高さ約4.30m。中央部の傾斜は約75度を有する。石垣は15段~20段形成されている。石材はほとんど凝灰岩で大きき約50cm×70cmの切石を用いている。

石垣上部の二段は下部の築造と異り石材は同質であるが、切石を用いて上面を水平に保ち、全体に安定感がある。とにかくこの部分は後世補強したものであろうか。最下部の石垣の築造にあたっては比較的大きな切石を用いて赤土層にくいこませている。

石垣の築造にあたっては空隙の充填に意がそそがれ、切石間の空隙には不定形ではあるが、断面の平らな石材で補強している。

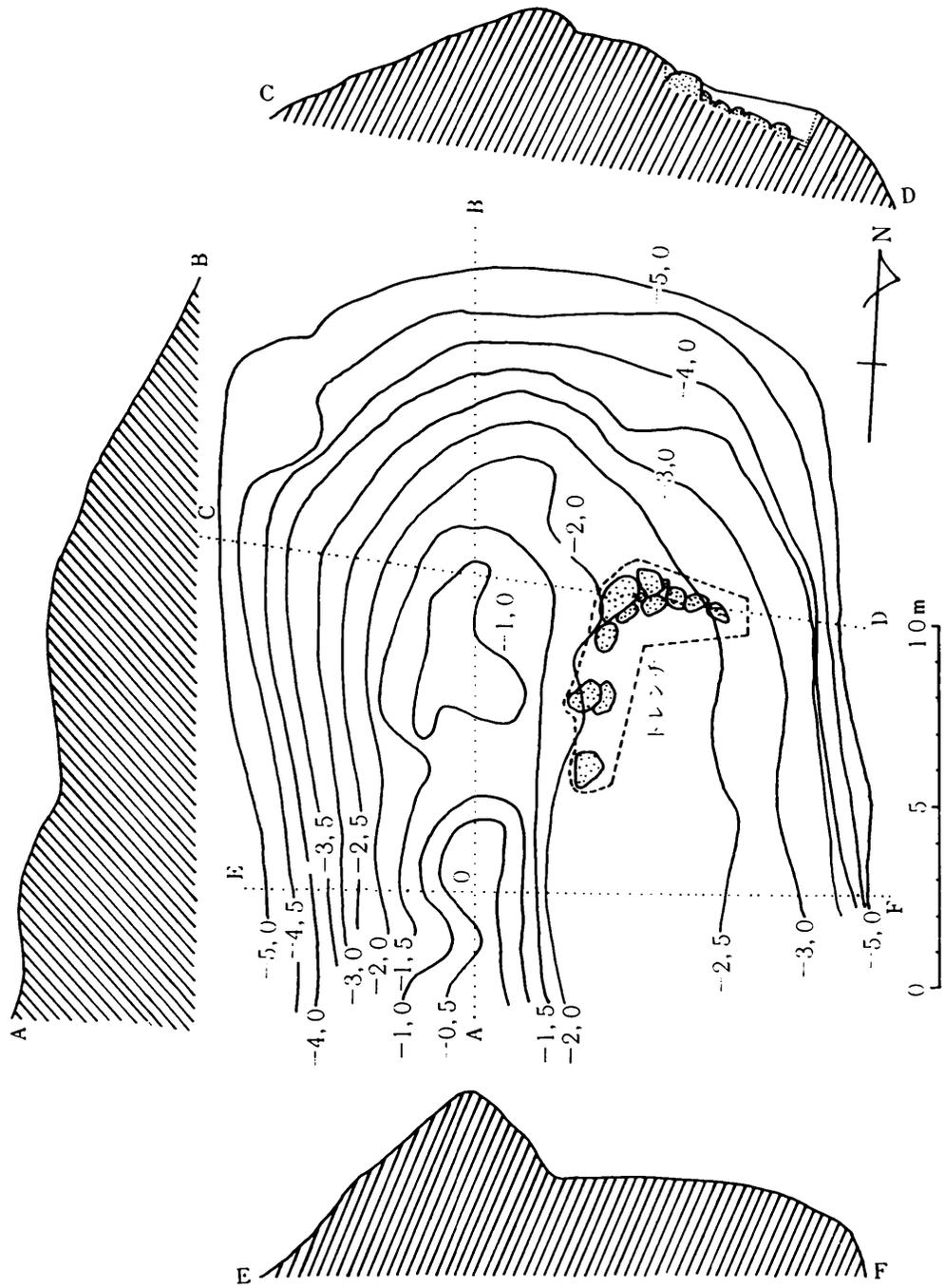
全般的に築造に当っては、形を呈し、つまり下石は左斜めにおかれ、上石は右斜めされている。上石が右に落ちようとする力を下石の支点が左側におかれている。このような「組み方」は一般に「右きき」の人の手法に多いという。石組みの一部に形状を呈した矢を打ちこんだ痕とみられるものも認められた。

石垣を中心とする附近から遺物の発見はなかった。

(杉村 彰一)



第27図 三枝石垣



第28図 佐官どん地形図

(8) 佐 官 ど ん

米原部落の西方には長者山、および団子冷しの峠・灰塚・スミノ御所など、一連の峰が北にむかっ
てのびている。これらの連峰には土塁線と車道が延々として構築されている。その最北端の峰にある平
坦部が「佐官どん」である。

この地は従来注意されたことがなかったが、今回の調査にあたって「佐官どん」という呼称と、この
地方で米石と称している花崗岩が数個露出しているという聞き込みがあったので、現地を踏査したとこ
ろ、果して礎石群の堆積を発見した。しかも露出している石材には一定の秩序がみとめられたので、新
たに調査地区に加えた。

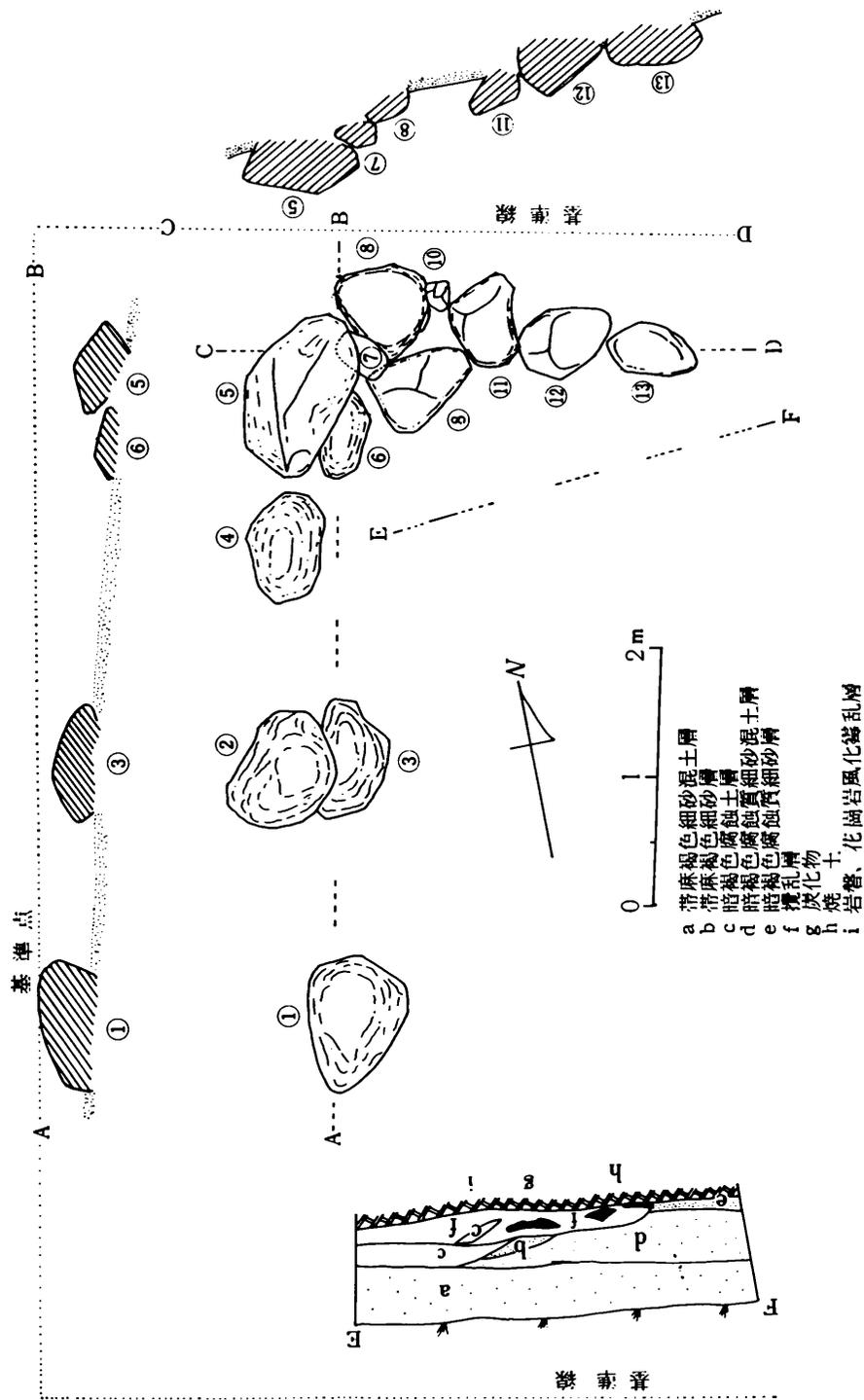
令の制度によると、佐官どんとは官吏四等官のうちの「サクワン」と同音で、しかも鞠智城の中心部
と考えられる米原の部落の中には「ショウゲンドン」という地名が残っているところから、大宰府職名
としての少監や、大・小典の名称を思わせる由緒ありげな地名には少なからず心をひかされた。

調査にかかってみると、露出している礎石の1号から5号までのうち、2号以下は移動したものであ
ることが、形状・レベル・柱間などから容易に推察された。1号はかなり安定しており、或は移動して
いないかも知れないので、これを基準に長さ1mのステッキボーリングをもって礎石や根石の埋没状況
を探查したが、5号から東へ石の堆積があることを知りえたほかは何の手がかりもなかった。建築用地
として残された平面も幅10m内外という狭い面積であるし、土も軟らかかである、1号のレベルを基準
として考える場合、探查洩れはないつもりである。

従って5号から東へトレンチを掘開し、埋没している石を露出していった。その結果13号までの石群
を発見したが、7・10号は根石程度の石である。しかし、これらの石群はもしかすると自然堆積である
かも知れないので、発掘途中注意していたところ石群の間から、かなりの量の炭化物や焼土が発見さ
れ、人間生活の痕跡が濃厚にみとめられた。

土層断面図E Fは石列より約1m南寄りのトレンチ南壁のもので、同種の土層は地形に即して北へ傾
いているので、石列(11号～13号)はFの攪乱層の中にあることを確認した。この土層図から考察する
と、まず岩磐の上に攪乱層があり、その中に石列・炭化物・焼土が共存するという点が注目される。石
列の堆積状況からして、この礎石は原位置を離れ、地面の傾斜に沿って押し転がされた状態と考えられ
る。しかし、その時期がいつであったかは、土器などを包含していないので不明であり、埋没された原
因もわからない。その後C層・E層、次いでF層、次にB層、最後にA層が堆積しているが、それらは
西側の土塁が崩れていったものと思われる。

もし、攪乱層が想定される建造物一帯の広さにわたって存在し、その層の高さに礎石があるというこ
とも考えられるが、1号～8号の礎石を上を押し上げることは現実には困難であろう。むしろ、礎石が



第29圖 佐官とん礫石群堆積図

存在した面は1号の存在する現在の地表面からそう深いものとは思えない。そうだとすれば開墾か何かの理由によって礎石を隅に片付けたのであろう。開墾とすれば地下80cmも掘って埋める必要はない。もっと浅くてよいはずであり、それも石を落とし込むに足る土壌だけで充分と思われる。然るに石列より1mも南へ離れたEF線にまで攪乱層のF層が存在するという事は、石を転がす時少なくともEF線より北側に広く窪地があったことを示している。しかも礎石が岩盤に直接接していて間層を持たないことからみて、石を転がした時期は新しくないと考えられる。



第30図 佐官どん全景



第31図 佐官どん礎石状態

このように考えてくると、開墾による埋没も否定されるべきであって、他の理由を考えねばなるまい。むしろ建造物が現在の地表に近い高さに存在し、西は土塁で保護され、東は深い切落しになっていて、北が手薄であり、しかも最北端の位置などからすると、建造物の北側は当初から岩盤の深さまで切落しになっていたとは考えられまいか。この場合なら、この建造物の焼失後、礎石を転ばせて落せばこのような状態になろう。しかし普通礎石は後世まで原位置に残存するのが例であり、古く礎石を落とし込む必要があったかは疑問である。また北端における切落しを証明するためには、南北にトレンチを入れてF層がなくなる線すなわち切落し線を確認する必要があるだろう。

ともかく現存する11個の礎石群は、土塁線の最北端に当るこの地に、建造物があったことを示しているのである。

この地に立てば、北麓の木山から西へ竜徳・頭合をまじかに見ることができる。崖線の切落しが深く地形的にみても要害の地であることがうかがわれる。

尚、土塁線を南にたどれば、約30mほどのところに、花崗岩が4個露出しており、史蹟顕彰会の標木が立っている。更にこれより約13m南にたどると、西へ数m入ったあたりに標高168.9mの三角点がある。

(田 辺 哲 夫)

(9) 米原部落内の礎石群

鞠智城の中心部をなしたと推定される米原部落内は、古くから集落に占拠され、城内遺構のほとんどが失なわれている。今わずかに残るもとの礎石群や、由緒ありげな地名・伝承などについてのべると次のようなものがある。

まず人家のまわりに寄せあつめ、または積まれた礎石群についてのべると、それらの石材はほとんど花崗岩の自然石を用い、部落民はこれをコメイシとよんでいる。その他にも礎石にはわずかではあるが安山岩の自然石が用いられ、部落ではこれをアワイシとよぶ。これらのコメイシやアワイシからなる礎石群は、現在地表に露出しているものだけでも50個以上の多数にのぼるが、旧態の配置を存するものは皆無に近い。わずかに原田成一氏宅地内に残る花崗岩の礎石2個と、礎石を掘り取った痕跡は有力な手がかりとなるもので、建物の柱間間隔7尺を有したことがわかる。建物は何間何面であったか明らかでないが、主軸が南北に長い長方形の配置が想定される。

その他にも部落のほぼ中央、米岡佐吉氏宅地の東端に1個と、部落の西北端米岡運喜氏宅の庭先と桑畑に各1個、花崗岩の礎石が残っているが、これだけで建物の配置を复原することは困難である。礎石の多くは火にかかった形跡をみとめるが、瓦はほとんど見当たらない。おそらく部落内にあった当時の建物群は、谷に面した平坦部を利用し、主軸が南北にむかう一定の規格をもって配置されたのではないかと推定される。

(10) 少監どん・紀屋敷(まつりやしき)

米原部落内には今でも由緒ありげな地名を存するが、それらの来歴は明らかでない。まず部落の東南隅、原田康憲氏宅地のつづきには、深い谷にのぞむ約80平方mの凹地があり、部落ではこの地を「少監どん」とよんでいる。その理由には何の伝承もない。現地は西方と南方に一段高い(高さ約1.50m)桑畑によってかこまれ、東側は高さ約10m以上におよぶ急峻な崖になっている。表面調査の結果、ヘラ目のある古瓦一片を採取したが、それだけでは年代判定の対象にならない。礎石その他遺構らしいものは何もなく、およそ部落内の最もせまい片隅に、このような由緒ありげな地名を存すること自体に疑念を生じる。

ちなみに大宰府の官制には長官としての帥をはじめ(権帥をあてることもある)大弐・少弐・大監・少監・大判事・大典・小判事・大工・主神など、特有な制度があった。中でも少監は従六位上相当官で、奈良時代頃までは中央政府から来任したが、平安時代の終り近くなると土豪などが歴任し、しかも定員を上まわって10数名も就任することがあった。鞠智城米原部落の一隅に、たまたま「少監どん」の地名を存することは、たとえその由緒がわからないとはいえ、先にのべた米原の西北方に位する「佐官どん」の遺構とともに注意すべきであろう。或は推察するに鞠智城の城主は少監の位にある者を任じたのであろうか。それとも米原に住んでいた土豪が、たまたま少監に任ぜられたのであろうか。いずれにせよ今後の研究が期待される。

また米原部落の北部寄りの高木郁郎氏宅地内には「紀屋敷」の地名が残っている。これを部落ではマツリヤシキと発音する。現在宅地の周囲には割って積んだらしい建物の礎石材や、加工石材の堆積をみるほか、遺跡または遺構を語るべき要素は何らみられない。宅地内は約90平方mもあるので、今後



第32図 米原西方

ボーリングまたは発掘調査すれば、或は何らかの遺構が発見されるかもしれない。ちなみに大宰府の役人には肥前の土豪紀氏が、大監・少監その他の官職に就いていたことを物語る記録はあるが、鞠智城との関係は見当たらない。また「紀」を「マツリ」とはいかにしても読めないのに、あえて呼称するのはどうしたことであろうか。或は祭祀を行なったところであろうか。

その他部落内には中世の名田をおもわせる地名が少なくない。まず「紀屋敷」の東隣には「弥次郎丸」と「恵庵屋敷」の地名が併存し、その東隣には「六郎丸」の字名がある。さらに部落の南端、公民館の前には「乙丸」の地名があり、部落唯一の商店迫本ツル子氏宅地には「屋敷」の地名を存する。おそらくこれらの地名は鞠智城とは無関係であろう。また公民館の北方、原田秀喜氏宅一帯に「中グリ」の俗称名を存するのは、この一帯に散在する五輪塔や石碑につながる、寺院があったことを物語るのではなかろうか。尚、米原部落の西北端、矢野形家氏宅裏に祭られている「岩倉山」は、自然の岩塊を数個集積した小祠を祭り、たとえ現在の施設は近代の所産でも、祭そのものの形態は古くさかのぼるにちがいない。

部落の西北隅の最もひくい位置にある「長者井戸」は、部落民の飲料水を供給する大切な天然の湧水池で、年中豊富な水量を保持する。

(11) 長者原の遺構

ここにいう長者原という地名は、米原部落の南側入口「六蔵」から、北は部落公民館付近まで、東は米原への幹線道路をもって限られ、西は長者山、御金蔵の東麓一帯にわたる約4・5ヘクタールの地域を総称する。この一帯に建物の礎石群があり、炭化した米を出土することは早くから知られており、おそらく米原長者の伝説や、米原の地名もそのことから起こったにちがいない。



の 山 (この山脈の頂部に土塁が近々と残る)



第33図 少 監 ど ん

文化6年(1806年)石上宜統の著わした『卯花園漫録』によると「肥後国山鹿郡不動倉といふ所」に焼米を出土することがみえている。おそらくこの不動倉という地名は、当時の関係史料から考えて、文徳実録天安2年の条にみえる「菊池城不動倉十一字火」の記事に比定するのあまり、現存地名の山鹿市にある不動岩と混同し誤ったものとみえる。故に米原の焼米はよほど古くから広く知られていたにちがいない。このように長者原における焼米を多量に出土する現象は、石上宜統の誤った記事をまつまでもなく、天安2年に焼失した菊池城の不動倉十一字の遺構を物語っていることはいうまでもなからう。

現地にはもと畑をめぐる多くの建物礎石群が整然とした配置で残っていたが、米原部落に入る南からの幹線道路をつくったさいに、多くの礎石は道の下に埋没したという。加うるに去る昭和41年の開田工事には10数個の礎石が掘りおこされたが、菊池市の庭園師に引とられたといわれる。

現在礎石列の残るのは熊本県の指定標木のたつ高木則行氏の水田、および水田用揚水ポンプ小屋に接した原田信裕氏の桑畑、この北隣に位する堀野隆氏田。さらにその北隣にあつて全体の約半分は埋められた高木二一氏の水田などである。その他にも乙丸の水田(米岡孝臣氏所有)その西約20mに位する矢野形家氏所有の水田などである。中でも昭和43年2月の調査によると高木則行氏の水田には、長辺がほぼ南北にむかう4間2面分の配置をもって、建物礎石列がならぶことがわかった。もちろんこの調査はボーリングによって探りあてたもので、発掘露出すればさらに大きな規模を呈するにちがいない。本年度の調査には時間的にも労力的にも余裕がなかったが、近い将来にはぜひ礎石列の再現を期したい。

掘切、一寸榎方面から米原へ入る幹線道路の東側、すなわち字上原には、何ら遺構らしいものを発見できなかった。わずかに公民館寄りの農道に礎石2個を発見したが、すでに開墾のさい動かしたとみ

え、周囲から現代遺物が出土した。また開田された直後にはわずかながら布目瓦や土師器、須恵器の細片が採取されたが、それだけでは何のきめてにもならない。

次に米原の地名起源ともなり、米原長者の伝説を生むにいたった焼米の出土地点については、ほぼ次のようなことがわかった。米原部落の人びとの話によると長者原の幹線道路の西側に展開する水田や畑には、ほとんど全面にわたって焼米を出土するという。しかしもっとも濃厚な分布がみられるのは熊本県の指定標木の立っている一帯、とくに高木則行氏の水田と小道をへだてて隣接する高木辰彦氏の水田、および揚水ポンプ小屋付近の桑畑と水田などである。とくに迫にのぞむ高木二一氏の畑にはおびただしく、地下約30cmに層をなすところがあるという。今回も耕作されたあとから、約5合分ぐらゐの焼米を採取した。

尚、長者原一帯から採取される炭化物には、焼米のほかに粟・稗・小麦などの雑穀類が炭化したものもみられる。とくにこれらの雑穀炭化物は長者原の共同墓地周辺に多かった。



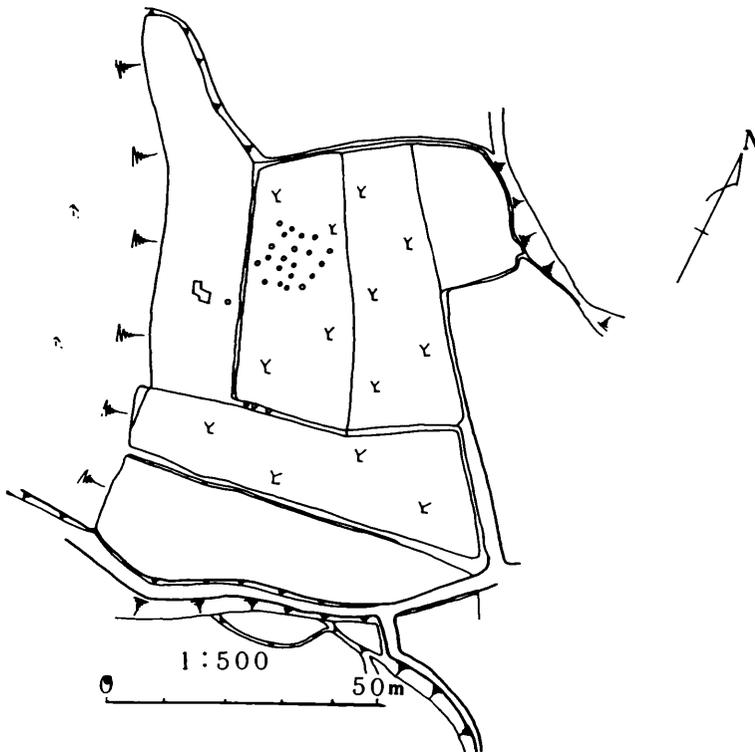
第34図 長者原礎石列（礎石は白線内に埋没している。）

(12) 宮野 礎石 群

米原長者の御金蔵跡と称する長者山の東麓には、従来多くの古瓦を出土した。しかるにその遺構はもちろん、何の手がかりもえられなかったので、昭和43年度にはこの地区の全面的な発掘を予定していたが、たまたま今年の3月に入ってブルドーザによる開墾が行なわれ遺跡は消滅した。

開墾直後に行きあわせたわれわれは、古瓦の堆積している地点2箇所をえらびトレンチを掘開したが、すでに土層は攪乱され遺物だけを採取したにすぎない。古瓦は平瓦と丸瓦からなり、荒い布目のあるものと、ヘラ目のあるもののほかに、格子目文を有するもの数片があった。それらの量は破片点数にして約5—60片にのぼり、おそらく鞠智城創築当時のものと推定される。すでにブルドーザは多くの古瓦を、北側の低地埋立にさいして再発掘することさえできないほど深く埋めてしまった。おそらく長者山東麓宮野における新しく開墾した地区には、1—2棟分の建物が想定されるが、今となっては確かめようがない。

昭和43年3月、新しく開墾された長者山の東麓地区には、古瓦出土地のほかに礎石群の埋没することがわかった。もちろんそれらの礎石群はボーリング作業でつきあてたもので、全体の配列や規模にはま



第35図 宮野地形図 (○ ○ ○ 礎石列)

だ疑念がある。しかし石のならばを図上復原によって判定した結果、この建物は長辺が南北にむかい、5間3面をなすものようである。何ぶんそれらの礎石列は桑畑の下に埋没しているため、全面的に発掘することは困難であるが、将来水田化されない限り保存条件はよい。昭和43年度の調査にはこれらの礎石のうち、一部だけでも露出し、建物の全体配置を把握する計画である。

尚、宮野の米岡孝臣氏所有桑畑では建物1棟分の礎石群しか探索できなかったが、すでに畦畔には自然礎石の移動したもの3個が寄せられており、ボーリング作業をつづけると他にも数棟分の建物が確認されるであろう。表面採取の結果、古瓦の細片は、迫の農道にのぞむ崖線まで、かなり広範囲におよぶことがわかった。(乙 益 重 隆)



第36図 宮野瓦出土地状況



第37図 宮野礎石列所在地(礎石は白線内に埋没している)

小 結

鞠智城の調査が企画され、ようやくそれが着手されたときにはやや時期おくれの感があった。すなわち米原部落内に残る礎石列はすべて変形移動し、城門礎石のごときも旧位置のままを存するものがほとんどなく、古代山城のあとを物語る遺構はすでに消滅したのではないかとさえおもわれた。とくに昔から最も重視され、米原長者の伝説を生み、地名の起原ともなった 焼米出土地は 未調査のまま 水田化され、加うるに古瓦出土地として知られる御金蔵東側の宮野まで、不用意に開墾されてしまった。しかるに調査に着手してみるとこうした懸念は氷解した。さすがに城は雄大な規模と多くの重要施設を擁したところだけに、新しい知見があいつぎ予算と時間の不足をかこつほどであった。すでに個々の物件、ならびに遺跡、遺構については各項に詳しいのであらためてくりかえさないが、来年度以降に実施すべく見送った計画は少なくない。その主なものだけをあげると次の事項がある。

- 1、城域の確認。
- 2、山頂をめぐる土塁線の分布図作成。
- 3、土塁の発掘と実測。
- 4、御金蔵の測量と礎石列の実測。
- 5、少監どんの発掘。
- 6、紀屋敷における遺構確認のための調査。
- 7、宮野礎石群の露出と実測。
- 8、長者原礎石群の露出と実測。
- 9、池ノ尾門礎石垣線の発掘。
- 10、土塁の分布調査。
- 11、土塁の発掘。
- 12、周辺の調査。
- 13、その他昭和42年度分の補正調査。

以上、今年果せなかった事項だけでもばく大な作業量が残っており、これらを完全に遂行するにはわずか1—2年でできるものではない。むしろ長期にわたって継続的に調査を遂行することによってこそ、はじめて鞠智城の実態は明らかになるであろう。(乙 益 重 隆)



第38图 米原地区测量图

調査日誌(抄)

第 1 次 調 査

昭和42年7月24日(月)晴

午前11時宿舎延命館集合、午後2時から結団式 後米原台地周辺の地形、遺構を見てまわる 夜調査員会議、調査計画、内容、目標、分担、問題点について討議する。

7月25日(火)曇時々小雨

時々的小雨について調査は開始される。鞠智城跡北西部外郭線と想定されていた竜徳、頭合、堀切一帯の踏査を開始する。密生した山林のため歩行も困難である。馬こかしは人夫による伐採と平行し測量杭打ちをはじめ。深迫の門礎石地点は測量と共にトレンチを入れる。米原地区測量も骨組測量を進める。

7月26日(水)小雨時々晴

池ノ尾門礎石の調査をはじめ。外周班は米原台地西側の山林中を遺構を求めて歩きまわり、深迫、馬こかし作業は順調に進む 夜の研究会で鏡山教授から指導をいただく。

7月27日(木)晴

馬こかし、池の尾、深迫、測量各班順調に作業は順調に進行する。

7月28日(金)晴

深迫のトレンチ面積を拡張する。馬こかしの石垣の測量を終る。池の尾門礎石の付近で土塁等の遺構をしらべたが明確なものは出なかった。踏査の結果外郭線は米原、宇田原の崖線ではないかと考えられるようになった。

7月29日(土)晴

猛烈に暑い。堀切門礎石の作業にかかる。堀切部落から13名の労力奉仕があり、約2m下に埋まっていた礎石を露出していただく。深迫門礎石周辺のトレンチを拡大する。三枝の実測にかかる。キングラ、稗方を結ぶ外周線も調査したが人工的遺構は見られず。

7月30日(日)晴

堀切門礎石実測、地形測量を進める。佐官どんは昨日午後から下刈を開始したが午後露出していた礎石と思はれる石のまわりを掘り出す。

7月31日(月)晴午後3時頃からひどい夕立にあう。

堀切、深迫、三枝各班共に測量実測を進める。佐官どん発掘と平行し実測を進める。鏡山教授九大 学生4名来る。

8月1日(火)晴午後夕立

堀切、三枝、佐官どん調査を終る。外周線は鏡山教授と坂本らまわる。米原部落婦人会からおやつをいただく。

8月2日(水)晴

各班とも図面の修正、深迫をはじめ各発掘地点の埋めもどし、物品整理等を済ませる。現地で午後1時30分から調査結果報告会および解団式をおこなう。

第 2 次 調 査

昭和43年3月9日(土)晴

午後6時宿泊地延命館に集合、第2次調査については打合会をひらき、調査対象、方法、任務分担について討議する。

3月10日(日)晴

米原地区 500分の1図の修正。ステッキボーリングの結果、長者原の高木則行氏水田、地表下50cmに礎石列1群を発見する。

3月11日(月)曇後雨

ボーリング調査を進めたが確実な遺構は発見できなかった。長者原の揚水ポンプ室付近では礎石群があった地点を教えられたが、開田によって1m以上埋まり、たしかめ得なかった。宮野の開墾地で瓦がかたまって出土する。

3月12日(火)

宮野の瓦出土地は遺構に直接結びつかなかったが、その東の桑園中地表下60cmで礎石列を発見する。地形測量と共に礎石列の実測図を作る。午後3時調査を終る。

調 査 団 の 構 成

主 催 者

熊 本 県 教 育 委 員 会

調 査 担 当 者

調 査 指 導		九 州 大 学 教 授	鏡 山	猛
調 査 団 長	熊 本 県 文 化 財 専 門 委 員	熊 本 女 子 大 学 教 授	乙 益	重 隆
調 査 員	同	熊 本 県 指 導 主 事	田 辺	哲 夫
	同	第 二 高 校 教 諭	原 口	長 之
	同	熊 本 大 学 教 授	松 本	雅 明
		肥 後 考 古 学 会 長	坂 本	経 堯
		荒 尾 三 中 教 諭	三 島	格 志
		山 鹿 高 校 教 諭	限	昭 一
		山 鹿 高 校 教 諭	杉 村	彰 一
		碧 水 小 教 諭	平 岡	勝 昭
		熊 本 農 高 教 諭	納 富	正 浩
		熊 本 大 学 助 手	佐 藤	伸 二
		肥 後 考 古 学 会 員	緒 方	勉 男
		社 会 教 育 課 主 事	上 野	辰 男

調 査 補 助 員 熊 本 大 学 学 生、熊 本 農 業 高 校、山 鹿 高 校、第 二 高 校 生 徒 他

調 査 事 務 局

調 査 責 任 者	社 会 教 育 課 長	重 石 隆 三
社 会 教 育 課	課 長 補 佐 木 村 繁	文 化 係 長 松 田 安 雄
	庶 務 係 長 伊 藤 昌 弘	主 事 上 野 辰 男
	主 事 富 永 久	主 事 高 浜 知 完
	主 事 福 田 那 智 子	主 事 高 木 幸 代
	主 事 東 大 森 慶 子	

調 査 協 力 者

菊 鹿 町 長 飯 川 巖	菊 鹿 町 教 育 長 富 田 貞
菊 池 市 教 育 長 佐 々 守 造	菊 池 市 社 会 教 育 主 事 高 田 貫 一
菊 池 市 社 会 教 育 課 長 津 留 清	
米 原 部 落 区 長 原 田 成 一 氏 他	堀 切 部 落 区 長 河 津 三 郎 氏 他
頭 合 部 落 区 長 木 野 政 幸 氏 他	医 師 松 尾 公 倫

地 主

米 岡 明、	木 野 政 敏、	村 上 幸 人
德 九 信 敏、	高 木 二 一、	米 岡 孝 臣
高 木 則 行		

昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報

第三次調査

Ⅰ 経 過 概 要

熊本県教育委員会が鞠智城跡の調査に着手したのは、昭和42年夏のことであった。その直接的な動機となったのは畑地開田工事のため、城の中心部とみられる長者原一帯に、ブルドーザが入り多くの礎石群を根固め石ごと掘り返してしまったことによる。その時炭化した米や瓦・土器なども出土した。

その後開田工事は何の予告もなく進行し、昭和42年末から43年初頭にかけて、長者山礎石群の西側一帯の山林が開墾された。ついで43年2月には長者山の東側、宮野の礎石群が何らの事前調査も行なうことなく破壊された。宮野礎石群は鞠智城内において、古瓦を出土する最も有力な建物遺構の一つであった。さらに昭和43年4月には、鞠智城で最も有力な城門礎石のある菊池市深迫一帯の畑地が、ほとんど水田化されてしまった。このように鞠智城跡では、遺跡保護のための事前調査が追従できないほどの急速度で開発が進行した。そのため第二年度調査は昨年にもまして緊迫感がみなぎった。

第二年度調査は昭和43年8月17日から同23日まで、延べ一週間行なわれた。作業期間が短かいため調査区域を制限し、重点的な問題把握につとめた。まず深迫の城門礎石付近では、城外から城内に通じる進入路の方向を探るとともに、現地に残る門礎は旧位置のままであるかどうかについて再検討を行なった。また「長者山」「灰塚」「涼みの御所」など一連の尾根につながる「佐官どん」のステップには、はたして建築遺構があるかどうか。さらに城の外周をめぐる土塁線および崖線は、人工的なものかそれとも自然の懸崖か。中でも確実な土塁線はどの部分か。などに重点をおき集中的な調査を行なった。それらの成果は次にのべる通りである。

本年度の調査も前年通り埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助をうけ、熊本県教育委員会主催のもとに地元の菊池市教育委員会・菊鹿町教育委員会が共催して行なった。

調査については九州大学鏡山猛教授の御指導をいただき、乙益重隆（熊本女子大学教授）、田辺哲夫（熊本県指導主事）原口長之（第二高校教諭）板本経堯（肥後考古学会長）三島格（荒尾三中教諭）隈昭志（鹿本高校教諭）杉村彰一（鹿本高校教諭）緒方勉（肥後考古学会員）上野辰男（県社会教育課参事）らが担当し、鹿本高校、鹿本商工高校、両校出身者等数多くの協力参加を得た。調査の運営は社会教育課長重石隆三、文化係長松田安雄、主事高浜知完、主事小村昇、主事福田那知子らがあつた他、菊池市および菊鹿町教育委員会、米原部落民、調査地関係地主等数多くの人の協力と援助をいただいたことをお礼と共に申しのべる。

なお、本報告書の作成にあたっては、1.経過概要（上野辰男）2.佐官どん（田辺哲夫・緒方勉）3.深迫門礎地区（三島格）4.土塁（坂本経堯・隈昭志・杉村彰一）5.阿高の礎石群推定地（隈昭志）6.小結（乙益重隆）の各調査員がおのおの分担執筆した。（上野辰男）

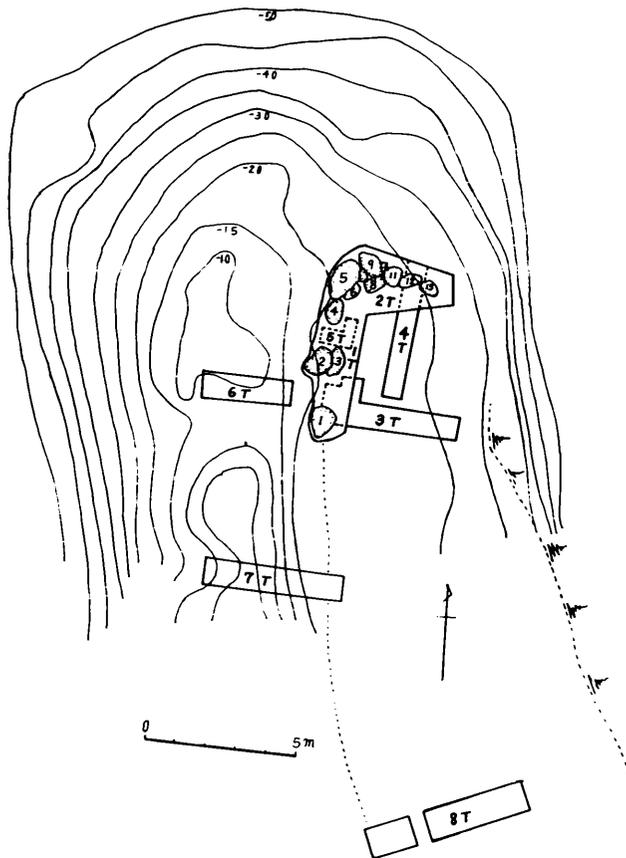
第39(1)図 伝鞠智城跡付近の地形図



Ⅰ 佐 官 ど ん

米原部落西方の連峰は従来土塁線と考えられてきた。佐官どんはその最北端にあたり、昭和42年度から調査を開始した。すでに第1年度の報告書にのべた通り礎石としては手頃な大きさの花崗岩が6個、土塁の裾にはほぼ南北に並んで露出している。しかしそれらはいずれも原位置を動いていることが明らかであった。ただ南側の第1号石だけは原位置を保っているものとする。さらにこれよりかぎの手状に7個の石が東に傾斜しながら埋没している状態を発掘した(第2トレンチ)が、石が並ぶ床面にのみ炭化物や焼土を伴ったので、これら7個の石が単なる自然堆積でないことを知った。

本年度の調査はこの位置に建築遺構の有無を追究することと、土塁の切断作業によって人工的な遺構を確認することに重点をおいた。



第40(2)図 佐官どんトレンチ配置図

(1) 建築遺構

もし、この地点に建築遺構があるとすれば地積から考えて土塁線東側の幅約10m内外の平坦面以外には考えられない。そこで先づ動いていないと考えられる第1号石から東へむかって第3トレンチを掘開した。第1号石よりほぼ8尺にあたる地点で地山(花崗岩の風化霏乱層)が陥没し、その部位の地表下40cmで礫の集合状態を発見した。それは礎石を抜いた跡ではないかと考えたので、さらに北へ第4トレンチを設定した。しかし、このトレンチでは礎石を抜いた痕跡は見当らず、また第1号石より北8尺のところ掘開した第5トレンチにもそれらしき徴候はなかった。さらに第1号石の周囲を掘開したところ、根石

なども存在せず、この石も原位置から移動したものであることが判明した。これらの結果、佐官どん土塁線下の車路先端部の平坦面には、礎石で原位置をとどめるものは皆無であり、根石や礎石を抜いた穴など、礎石を据えた痕跡も確実なものも発見されないことを確認した。

従ってこれらの石は礎石ではなく、建築遺構も存在しなかったと考えるかまたは埋没している石の周辺に焼土や木炭が存在したことから、前年度想定したように礎石群があったとみるべきか依然として疑問は残る。もしこれらの石が礎石であるとすれば建築遺構は発掘地点より離れて南に寄っていたことも考えられる。また考えようによっては発掘地点にあった構遺が、その後の開墾耕作によって礎石を抜きとった跡までも消失してしまったともみることができる。



第41(3)図 第5トレンチ

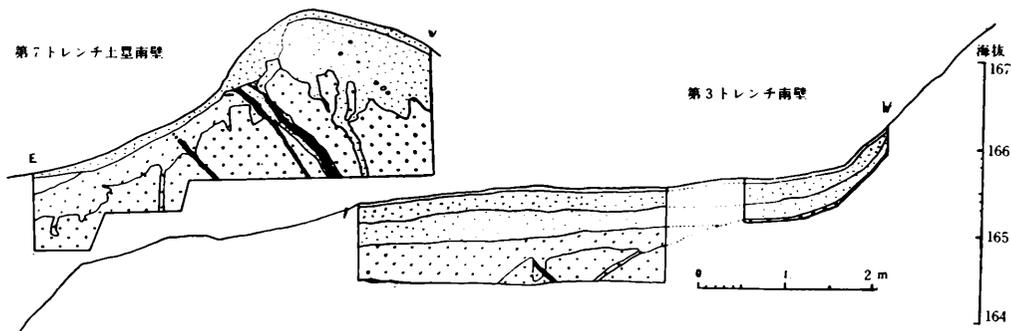
目下のところ積極的な根拠はないが、現地の平坦部は土を掘りひろげ、ことさらに地積を拡張した形跡が認められるので、おそらく本来建物があったとみるべきであろう。



第42(4)図 第7トレンチ

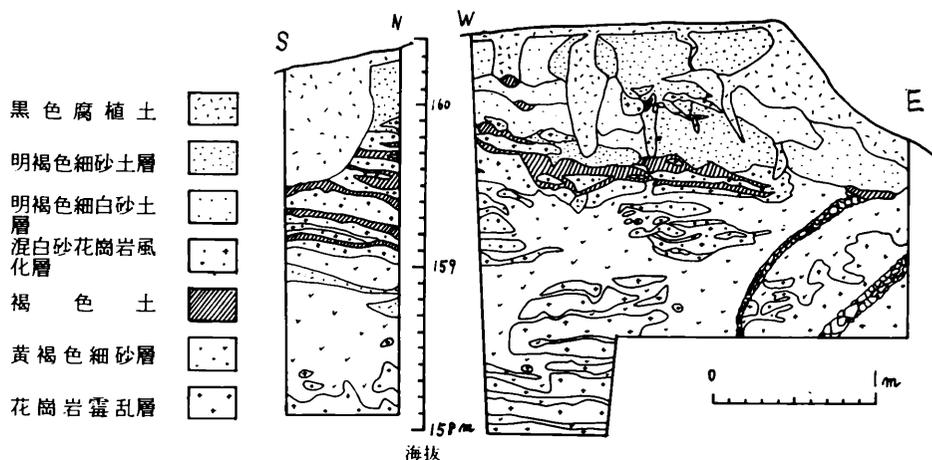
(2) 土 塁

佐官どんにおける土塁は自然の尾根を加工してつくられたらしく、外側は切り落しによる断崖をなし、深い谷にのぞむ。土塁の内側には車路が設けられ、その内側は段状の斜面をなす。今回の調査には土塁の北端から約15m南に寄ったあたりに長さ4.5m、幅0.8mの第7トレンチを設定した。トレンチ内には第は表土下約20cmに3条の石英の細い岩脈が見られ、(第4図)それが残る部位までは攪乱されていないことが明らかである。さらに断面観察によると最下層の花崗岩霏乱層が最も高くなっている部位は、土塁直下でなくむしろ土塁の内側寄りにみとめられた。とくに自然層の一つである黄褐色細砂土層は土塁の外側において、あざやかにそぎ落した状態がみとめられた。同様な切り落しは土塁の内側にもみられた。したがって、佐官どん地帯



第43(5)図 第7、8トレンチ土層実測図

における土塁は、多くのばあい自然の尾根を利用して外側を急に、内側を車路にするために、切落しながら構築したことがわかる（第5図）。しかし尾根が切れて平坦に近くなった北端付近では（第6トレンチ）石英の岩脈が尽きるあたりから、褐色土層を交じえた各地層が縞状に横たわり明らかに盛り土であることが判明した。



第44(6)図 第6トレンチ土層断面図

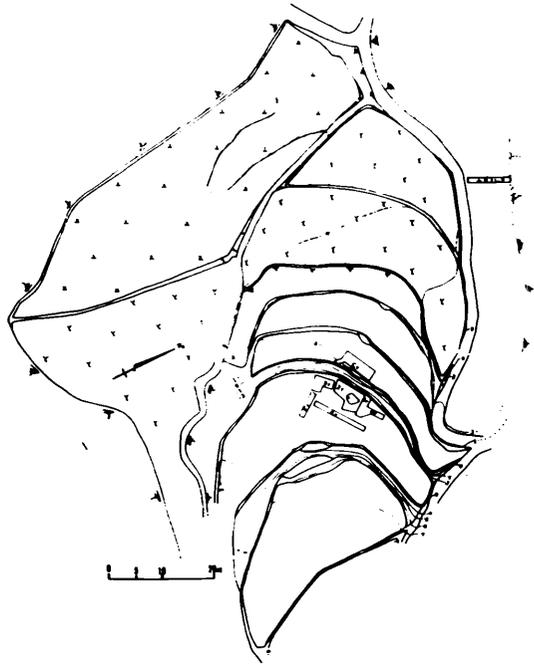
このように佐官どんん一帯では、尾根の外側を切落し、或は土盛りしているところから、これが城をまもるための土塁であったことは間違いないものとする。（田辺哲夫・緒方勉）

■ 深迫門礎地区

本年度は、昭和42年度の調査において、次年度の課題とした、城外から城門に達する道路を発掘により確認すること、門礎北方にあたかも城門に接続するかのごとく伸びる尾根に注目して、発掘によりこれを確認すること。に調査目的を限定した。

この地区は42年度の発掘成果で、いくつかの所見が確認乃至は推定されているが、今次調査に必要な部分のみを摘記する、註1

- (1) 門礎、(長径2.68m短径2.26m厚さ80cm以上)は、多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考えられる。
- (2) 柱根につくられた出納を、枘穴に嵌入して門扉を廻転する枘穴礎石であることは確実であるが、回転方向は枘穴の磨滅状況等から考慮すれば、門扉が後に開く「内扉」であったと推定される。
- (3) 対称位置に門礎があるのかどうか、あるいは片袖式であるのかなどの点については、明確にできなかったが礎石西側の地区において、礎石をぬいた根石群と思われる石群を発掘した。その間隔は枘穴中央より5.8m(唐尺19尺)である。礎石東側地区は日数の制限上未発掘。
- (4) 上記の門礎石と推定根石との間はピンクに近い硬質粘土で、人為的な盛土ではない。内法幅3.6m(12尺)。この面で土師器の細片を得た。
- (5) 推定根石に近く径30cm深さ34~40cmのピットを検出したが、これはあるいは礎石に附属する柱穴であろうか。
- (6) (4)以外の遺物は礎石下から布目瓦3片を検出した。
- (7) (4)のピンク色の硬い地山面を両門礎間の路面と推定し、礎石北方の崖面にわずかに認められるはり出した部分4箇所注目し、城門から城内平坦部に達するには、曲折急坂の多い道を上下するよりも、いくつかのステップをもつものではあるまいかと想定した。



第45(7)図 深迫地形測量図(昭42—43)



第46(8)図 深迫門礎石発掘風景

東側地区は未発掘であったので、本年度はその地区を含めた所謂門外の地区3箇所(E・F・Gトレンチ)と門内にあたる礎石上段の地区(Cトレンチ)を発掘し、上記諸点の解決に一步近づこうとした。以下調査結果を地区別に概観する。

1 門 礎 石 地 区

Eトレンチ (1×11m)

東側面の観察によれば、土層には

特別の変化はないが、地表下20—30cm前後で硬度によって上下層に分離される。部分的には3層まで区分出来るが、この層はより粘質が強い。注意すべきは地表下マイナス35cmで刀子片が出土したことである。今のところ硬い面を当時の地表面とする積極的な証左はないが、その可能性を全く否定するものではない。後に述べるGトレンチとの関連は第9図のごとくである。



第47(9)図 C G Eトレンチ断面図

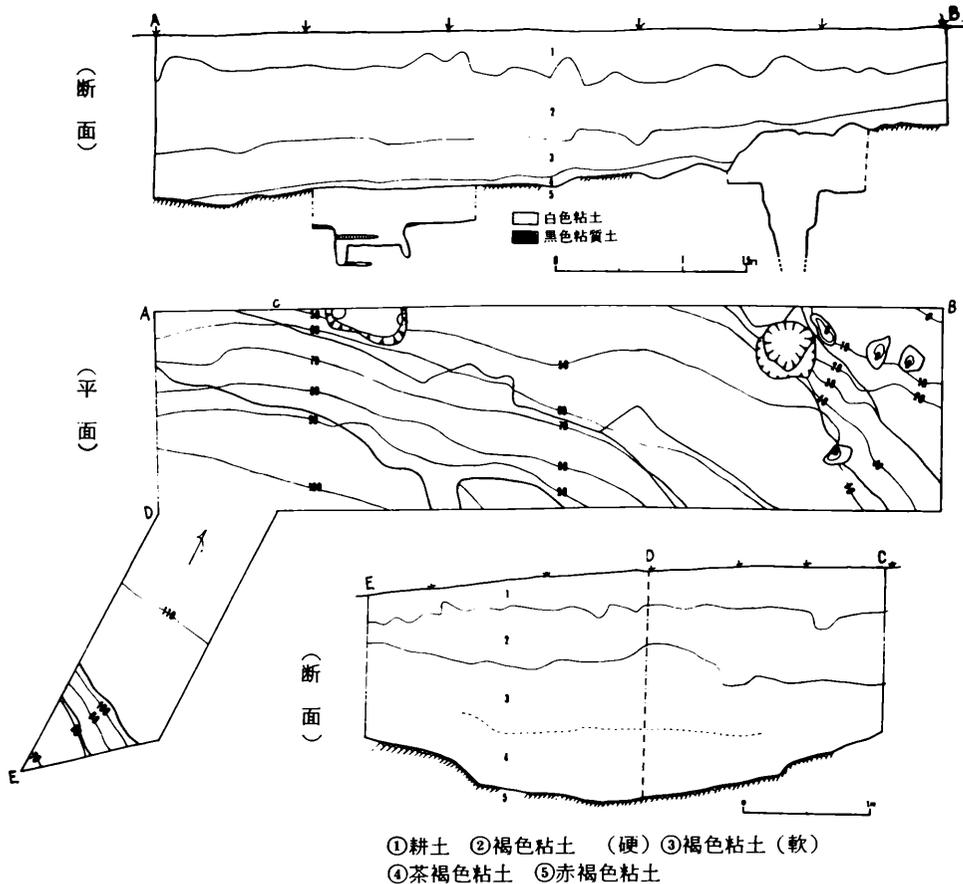
Fトレンチ (1 m × 5 m)

Eトレンチに直交するごとく設定したが、特別の変化は認められない。Eトレンチの第2層は本トレンチの第4層に対比される。

Gトレンチ

42年度トレンチに接して、東西に4 mのトレンチを設定しさらに図のごとく拡大した。その結果は、礎石を発見することはできなかったが、門礎石端より約50cmはなれて、黒色粘土と白色粘土があたかも圧延されたような状況で検出された。前者は現今農家の土間に見られるタタキのような堅さと黒さをもち、厚さ5—16cmを測る。後者は前者にくらべ薄い塊状の白粘土をたたきつけたような面でやはり硬い。また塊状のブロックの痕跡が残っている。そして断面図には出ないが白色粘

土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、版築状を呈する。以上の所見を門礎石とCトレンチの関係で見れば、第9図のごとくなる。版築状の白・黒の硬質粘土は門礎石と無関係とは考えられないようである。近世陶片一を得たのみで、関係遺物はない。



第48(10)図 C トレンチ 平面、断面図

Cトレンチ (6.6m × 2m. 第10図)

当初は崖に沿ってA・B・C・Dの4区を設定したが、労力の都合上最重要と思われるCのみを発掘し他は割愛した。また問題を解決するポイントとなる崖面の掘開も中止したが将来かならず実施すべきである。トレンチの位置は門礎石の位置する畝地より比高約3mを測る。

発掘中地表下マイナス70cm—160cmの間に土師質土器3片・刀子片1などを得た。その外凝灰岩礫片が若干同じ深さから検出されている。この数値は後述の第5層に近い数値である点は注目される。完掘の結果、硬質の赤褐色粘土層(第5層・地山)を全面に亘り露出し得た。(第10図)この層

は北に高く南に低いという遺跡の自然地形に通じているが、トレンチの南東隅部に長さ約3mの幅



第4911図 Cトレンチと柱穴

の狭い平坦面が認められたので、さらに拡大した結果、マイナス1.10mを最低位として、再びこの面は対称方向に高くなっていることが確認された。これを第10図でいえば図のマイナス90cm近くの実線と拡大区のマイナス1m下の実線の範囲である。その幅は約2.8mである。横断面で示せば第10図C—D断面によく認められる。この浅い凹字状の平坦面はかつての道路ではあるまいかと調査者らは考えたが、僅か6m余のトレンチ内での所見であるので結論はひかえたい。たまたまその想定を助けるものが、いわば道路ののりに相当する部位に発見された、柱穴と思われる2箇所のPitである。(第11図)

第1号Pit (トレンチの東側)

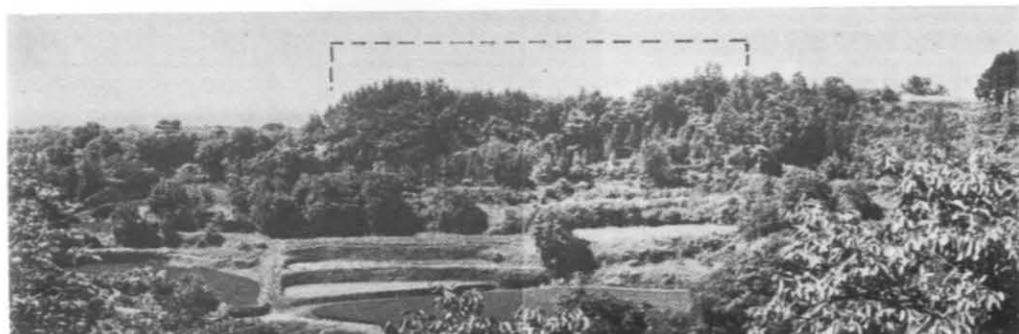
平面形は円形に近いが、2段にくびれている。上位の径は45~46cmを測り、深さ35cmでくびれてせまくなる。底は不明瞭であるが深さ55cm以上である。上位のPit内には軟質の黒褐色土が充満し、下位にはより粘質の強い黒褐色土がはいっていた。またPitの縁まわりの土に白粘土まじりの斑点が混在するのは注意される。

第2号Pit (トレンチの西側)

壁面に接して落こみがありその底に2箇の小形のPitが認められた。うち西側のものはやや内傾する。落こみの平面と断面には、白・黒粘土の薄層が交互に認められるが、黒色は硬く白色は軟かい。第1号と第2号(両Pitの中央)の間隔は約3.3mである。

2 深迫土壘推定地

門礎石の北方は俗称馬コカシに至る隘道によって現在は切断されているが、元来は一連の尾根で

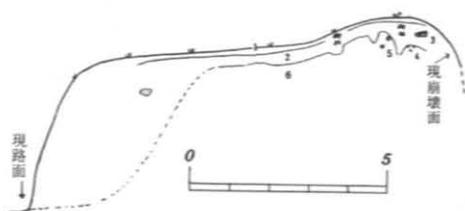


第5012図 深迫土壘推定地を北方(三枝石垣)より望む

あった尾根が台地から派生して、門礎のある深迫の谷とその北隣の谷との境界を形成している。尾根の先端部は門礎石と直距離20数mにすぎない。道路によって切断された以東の尾根は長さ約90mで、城外側は20m以上の急崖をなし谷に移行しているが、この崖面の崩壊はきわめて新しいものである。尾根幅は調査地点で約8mを有する、上記の急崖のみがやや高く（高さ50~70cm幅1m）しかも断続的に尾根と同方向にいくつかみられる。しかしてその内帯は平坦で削平されている。

調査は、こうした地形が土塁として当時構築されたか否か、言い換えれば土塁として扱ってよいか否かを、発掘によってたしかめることを目的とした。われわれは調査区域を深迫推定土塁と仮称することにした。

1m×7mのトレンチを尾根に直交するごとく設定し、地山に至るまで掘開を試みたが、日時不足で後述のごとく完掘できなかった。長側壁（北側）断面では、地山（第6層）の上に黒褐色粘土層（第2層）表土層（第1層）の順で、第2層の東端には含白色粗砂粘土とピンク色の薄層が少量認められる。（第13図）ここで注意すべきは第6層が東端から約7mの地点において深さ約2m



第5103図 深迫土塁推定地断面図

1. 表土
2. 黒褐色粘土層
3. 含白色粗砂粘土
4. 炭化物
5. 黄褐色粘土塊
6. 茶褐色粘土層

掘っても認められず、時間不足のために完掘できなかったのは残念であるが、図示推定のごとく現路面とあるいは接続するのであろうか。現路面は坂道のため流水などにより地山が露出している。もし土

塁とするには城内側をけずり取る方が工事上からも首肯されようとするれば、前述地山が急に深くなるのは注意すべき点である。

現在のわれわれが見る地形は、城外側がやや高く内側は平坦であるので、戦術上防禦しやすい地形であるが、それがただちに7世紀の地形に通ずるものではない。この台地の地質が崩壊・裂罅を生じやすい地質であることは既に地質学者の説く所である。崖側の高さ50~70cm幅1m位の丸みをおびた高みを土塁とするには賛成できない。成因つまり背後の崩壊を考えれば明白であり旧地形についての手がかりもな



深迫の発掘光景

い。つきにつづく6m余の平坦部もきめ手はなく、植林、島地などによる開墾の疑もたれる。以上やや否定面をのべたがそれはあくまでもこの地区に関してであって広域に亘る鞠智城に土塁が存在しなかったというのではなく、大規模な発掘によって、証明されるまでは、深迫土塁に関しては視野を転じてさきに指摘したごとく、門礎と尾根が直距離20数mの近距離である点を重視して、おそらく城門に接する自然地形は築城に際して利用されたであろうという程度に理解しておいた方が良く考える。

3 遺 物

各トレンチで得られ遺物を表示すると下表のごとくである。

遺物一覧表 - 95などはマイナス95cmを示す。

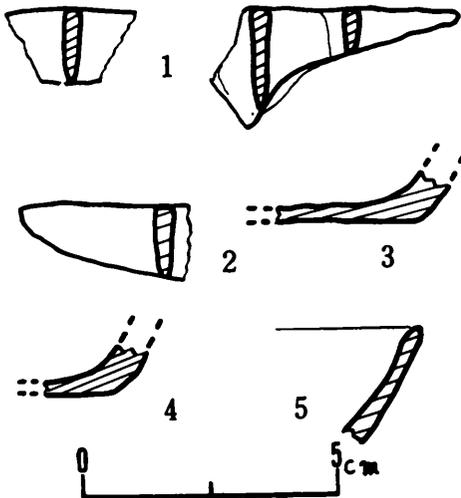
C				E	F	G
1 区	2 区	3 区	拡張区			
呉須付陶片 (ヤヨイ時代底部 その他1) - 95	土師質 2片 -- 70 " " 1片 - 115 " " 1片第三層	刀子 1片 - 70 (第10図- 2) 土師質 3片第二層	土師質底部 - 170 " " 口縁部 - 170 (第10図- 4.5)	刀子片 -- 35 (第10図 - 1)	(縄文 石鏃)	陶片 1
土師質小片片1-70 中世陶片 1片-50	中世陶 1片 -- 50 土師質 1片 -- 30					

土器はすべて細片であり、器形を知ることがほとんどできないが、第14図の3、4は底部片であり底面には糸切りは認められない。5は口縁部である鉄製品として2箇の刀子がある。第14図1は

片関(カタマチ)である。

上記各項を要約すると、

1. 門礎石の背後4-5mの地点の、Cトレンチにおいて、浅い凹字状の平面を検出し得た認められた長さは約3mにすぎないが、幅は拡大発掘により約2.8mであることがわかった。限定された発掘面積ではあるが、その横断面形は第10図においてかなり良好に看取される。調査者は断定をさけながらも道路ではないかとの想定をもった。その考えを支持するのは、刀子、土師質の土器片の出土と、道のりに相当する部位で検出された柱間3.3m pitである。しかも白・黒の粘土を版築状に使用している。



第52(14)図 遺物実測図

2. 上記の今次の推定道路は、門礎石の位置と関連する。昭和42年度の所見として、既述のごとく礎石西方の城門を通る推定道路がある。これと今次のそれはつながるのか否か。本年度の発掘所見からは関連づける材料はない。
3. この問題を考える上に見のがせないのは、Gトレンチにおける、版築状の遺構である。これを路面の一部と見るか、礎石に伴う遺構と見るか問題であるが、もし前者とみた場合、東側対称位置に第二の門礎石があることになるが、今までの発掘では発見されていない。そこで第三の考え方として崖の中にそれがあろうとする推理が生れる余地が生ずる。
4. 上記1～3の問題を解決する有効な方法は、現門礎の位置する畠地と比高3mの上段畠地の境界をなす崖を発掘すれば、問題は解決することになるだろう。
5. 土塁について。そうであるという確証は今のところはない。けれども築城計画にとり入れられたであろうことは十分に想定できる。深迫に限らず、米原地方では地質学的な証明と後代の地形変改を考慮に入れることを忘れてはならない。(三島 格)

註1. 三島格「深迫の門礎石」『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報、伝鞠智城跡』熊本県教委
昭和43年 熊本。

本遺跡の調査には鏡山猛教授の御指導を得た。記して感謝申上げる。なお実測図は佐藤伸二・隈昭志・緒方勉・亀井明德・中村幸史郎・松本健郎氏らによるものである。

IV 土 塁

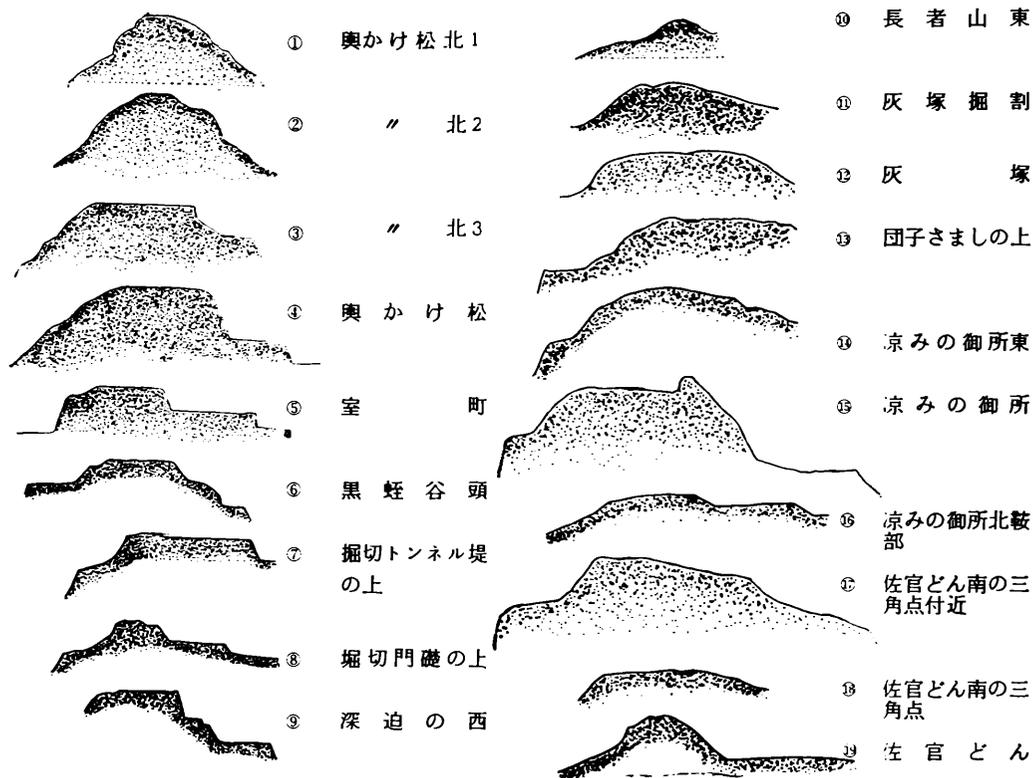
鞠智城の外周を明確にするためには土塁線の確認が必要である。第一年度の調査では一応の外郭線が推定されたのであるが、今回の調査目標はさらに土塁線の断面を計測することにより、推定の段階から一歩進めようということにあった。そのためには現在地表にあらわれている土塁の状態をそのまま計測しなければならない。今回の調査は土塁線と推定される箇所単なる断面計測だけに終わった。これを証明するためには土塁線を実際に切断しなければ明確に断定できないそれでも実測図によって一応の分類ができる程度の資料だけは得られた。

計測点の設定は調査員協議のうえ、比較的原形を留めている場所をえらび、かつ各地点間の距離的にみて必要と認められる所をえらんだ。設定した地点は以下のとおりである。

初田川と木野川にはさまれた松尾神社の東側の尾根(興かけ松～室町)、米原部落の西方に連なる「長者山」から「佐官どん」にいたる峰。その外郭とみられる頭合の南東部の谷頭、さらには谷頭から堀切に至る線など、合計19箇所である。

これらの土塁または土塁とみられる施設は、規模も形も地点によってまちまちである。このこと

は鞠智城の外郭施設があくまでも天然の地形に依存し、これをそのまま利用または加工したことによるものであろう。



第5309図 土塁実測図

まず米原部落の西側を限る、佐官どんから長者山にいたる尾根に構成された土塁線についてみると、頂部の幅は必ずしも一様ではない。広いものは約15m、せまい所では数mにすぎない。これらの土塁断面を実測すると、およそ二種に大別される。すなわちA型は山の尾根の外側と内側を切り落して懸崖にしたもので、尾根の頂部は平坦な面となり、その断面は梯形を呈する。B型は山の尾根の外側、つまり城外側を急傾斜に切り落とし、城内側には犬走り状の車路を設けるものである。そのばあい城内側は比較的ゆるやかにつくられている。

その点本分部落の裏手「奥かけ松」一帯の尾根にみられる土塁らしい遺構は、幅約15m～20mもあり、上面が平坦で、はたして土塁として意識的につくったかどうか疑うむきもある。しかし城の外側が急な懸崖となり、内側の傾斜がゆるやかであるところから、天然の地形を部分的に加工しながら、外敵に対する防禦線として最大限に生かしたのではなかろうか。

以上の知見はあくまでも現地の地形観察と、実測作業の成果にもとづく推論であって、鞠智城成立当時の地形が現在のままであったとは考えられない。何ぶん米原部落を中心とする周辺地形は、



第5406図 奥かけ松付近景観

きわめて崩壊しやすい土質で、今でも年々大きな崖崩れを生じる始末である。現在のところ米原部落の西側を限る長者山～佐官どんの峰にいたる断続的な土塁と懸崖は、おそらく築城当時のおもかげをとどめるものと思うが、他の地区についてはさらに精密な調査を必要とする。

(坂本経幸・隈昭志・杉村彰一)

V 阿高の礎石群推定地

鞠智城の南域は掘切より池ノ尾につづく崖線をもって限られる。その延長は頭合から黒蛭につづく尾根につながるものようである。ここにのべる阿高の礎石と推定される自然石群は、本分部落より初田川橋を経て黒蛭部落にむかう途中、県道から約300m北にむかって上った畠道の両脇にある。

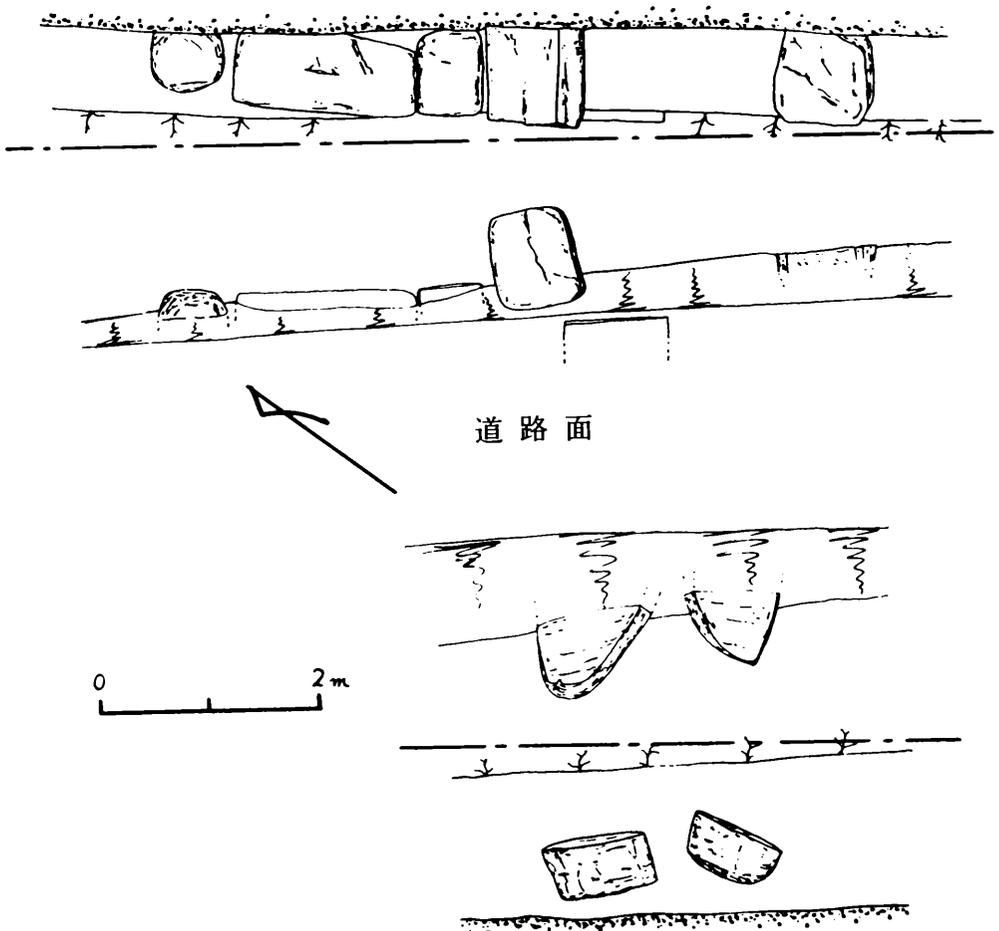
現地は標高約70mを有し、なだらかな斜面が急斜面に移る地形の変換地点付近にあたる。これより道は幅せまくなり、爪先上りの坂道が山の尾根へむかっている。この尾根の北側を流れる渓谷の谷頭に「池尾の門礎」があり、あたかも尾根は鞠智城の外郭線の役目をはたしている。



第5507図 阿高の礎石

石材はいずれも質のよい花崗岩の自然石で、道をはさんで北側に6個、南側に2個、いかにも意

味ありげな配置をなしている。各石材は上面が平らかですわりがよく、もちろん原位置から移動していることはいうまでもない。石材の大きさは一辺の長さ約70~90cmの立方体に近いもの4個、長さ80cm以上、幅約80cm、厚さ40~50cmを有するもの2個、長さ170cm幅80cm、厚さ不明1個、大きさ不明1個からなり、完全に露出するとさらに歩確な数値が得られるであろう。何ぶん現地は農地にいたるテラーの幹線道路であるため、発掘できなかった。はたしてこれらの石材がいかなる建物配置を構成していたものか、現段階では推測の域を出ない。或は単に後世の石工が、山から掘り出した姿のよい石材を運び出し集積放置したのかもしれない。とにかくその実態究明は、今後の調査計画の一つとしてとりあげることにした。(隈 昭志)



第56(18)図 阿高礎石群

Ⅶ 小 結

以上のべたとおり、昭和43年度（第2次調査）における鞠智城の調査は、短期間に集中的作業を遂行したにかかわらず、従来疑問視されていた多くの問題解決の端緒を得た。即ち、佐官どん地区においては、建造物遺構の存否をめぐって、対立的な考え方が残るが、現地の地積、発掘調査の成果から何等かの遺構が存したことは明らかであろう。特に、佐官どん地区における土塁は天然の地形を城外側は切りおとしにして懸崖を作り、内側には犬走り状の車道を設けるなど、明らかに人為的な遺構が確認された。更に、土塁の延長線上には土盛りをし、人工的な遺構が認められた。

深迫地区においては、初年度以来の懸案であった城外から城内にはいる道路進行方向の確認に重点がおかれ、その遺構と見られる断面がU字形を呈した地山のおちこみや、掘立柱らしいものの遺構も検出され今後の調査に明るい見とおしがたつに至った。

次に鞠智城をめぐる土塁線については、現地一帯の土質がきわめて崩壊しやすい花崗岩の風化土壌と、軟質凝灰岩からなるために、現在でも年々大きな崖くずれを生じる始末である。したがって、これら土塁線の確実な遺構を把握することは極めて困難な作業であった。しかし、米原部落の西方を限る長者山～佐官どんに至る尾根状に断続的に見られる土塁線は、おそらく築城当時の面影をとどめるものと思われる。その他、頭合部落^{つごう}の北東部、掘切より黒蛭方向に続く尾根には人工的な土塁遺構こそ発見されなかったが、通称阿高の山道にかかる農道の両脇に礎石にふさわしい花崗岩の石材8個が堆積していた。これを建築遺構の名残りとするか、単なる石材の集積と見るかについては大きな問題として残るが、今後の調査計画の一つとしてとりあげたい。

来年度の調査には

- (1) 鞠智城全域の確認
- (2) 長者原における礎石群の露出と実測
- (3) 池ノ尾門礎および石積群の発掘
- (4) 宮野礎石群の露出と実測
- (5) 紀屋敷、小監どんの実態把握
- (6) その他、第1、第2年度の補正調査

などが残されている。

これだけの調査が完遂されても鞠智城に関する問題点は完全に解明されたとはいえない。今後といえども、問題意識を新たにしながら継続的調査と研究がのぞまれる。（乙益重隆）

昭和44年度埋蔵文化財緊急調査概報

第四次調査

I 経過概要

鞠智城の調査が企画され、第一次調査に着手したのは昭和42年7月であつた。ついで翌43年3月には第一次調査時に実施できなかつた分の補足調査を行ない、同年8月には第二次調査を行なつた。ここに従来「幻の城」といわれてきた鞠智城の全貌は、ほぼ明らかになつた。したがつて今回から伝鞠智城の名称は、あらためて鞠智城とよぶことにした。

第三次調査は夏場の作物をさける意味で、昭和45年2月12日より同月18日まで、厳寒の候をえらんだ。今回の調査は去る昭和43年3月、ボーリング調査によつて発見した長者山の東麓、宮野の桑畑内に埋没している礎石群の全面的な露出を行なつた。それとともに従来焼米の出土をもつて知られる、長者原の礎石群の露出作業を行なつた。一方長者山地区では、従来いちじるしく繁茂していた竹笹と、クヌギ林の下刈りが行なわれていたため、全面的な測量を行なうことができた。その副産物として、米原部落の共同墓地の東に隣接した林の中から、自然礎石を2.2mの等間隔に4個配置した建物遺構を新たに発見したのは何よりも幸いであつた。

今回の調査も国庫からの補助を受け、熊本県教育委員会が主催するとともに、地元の菊池市と菊鹿町の共催をえた。また今回も前年同様に、九州大学文学部鏡山猛教授の御指導をいただいた。今回の調査組織とメンバーは次の方々である。

熊本女子大学教授	乙益重隆	福岡市文化財主事	三島 格
肥後考古学会長	坂本経堯	福岡市文化課嘱託	緒方 勉
鹿本高等学校教諭	隈 昭志	熊本県教育研究所員	桑原憲彰
”	杉村彰一	熊本県教育庁社会教育課参事	上野辰男

尚調査の運営については、熊本県教育庁側より社会教育課長高野達雄、同文化係長松田安雄、庶務係長河野宗忠、社会教育主事村中昇、同主事田辺哲也、同主事高浜知完、同主事福田那智子らが連日交代であつた。また地元の菊池市教育委員会、菊鹿町教育委員会、ならびに米原部落の地主の方々、部落の方々には一方ならぬ御協力をいただいた。とくに鹿本高等学校考古学部の諸君には総力をあげて調査に御協力いただいた。ここに列記して厚く御礼申し上げるものである。

本報告書の作成にあつては、次の方々に分担執筆いただいた。

- I 経過概要 (上野辰男)
- II 長者原礎石群 (三島 格・緒方 勉)
- III 宮野礎石群 (隈 昭志・杉村彰一・桑原憲彰)
- IV 長者山の遺跡 (乙益重隆・上野辰男)
- V 小 結 (乙益重隆)

Ⅱ 長者原礎石群

長者原とよばれる、平坦部の桑園から、炭化米が得られその地中に礎石が包蔵されていることは耕作者・村人のみならず研究者の間にもかなり広く知られていた。けれども近年の開田化の波はこの地にも達したことは、緊急調査概報^{註1}に記すごとくで、本調査地域においても地主の高木則行氏によると、8箇の礎石を抜いたという。^{註2}

本地点については、すでに昭和43年3月10日ボーリングによる試掘^{註3}が行なわれ、南北5列・東西3例の、礎石配置をもつ遺構が概ね確認され仮の配置図が作製されていた。本年度は上記の遺構を発掘により確認することを目的として実施された。

調査は、上記の配置図により南北9m東西5mの発掘区を設定し、全面掘開を行なつたが、地表下20cm前後で、A-1、A-2、A-3、A-5^{註4}の計4箇の礎石上面に達したが、概ねこの深さで土の色に変化を認められた。(図3)変化とは、黒色土と茶褐色粘土の面が、それぞれ不整形のひろがりをもつて、-20cm前後から発掘区全域にわたつて認められることをさし、前者はA列の礎石があると推定されることにより面的ひろがりをもち、かつ黒色土中には、多量の炭化した米粒を含む。その深さは厚い所で20cm余、薄い所では2-3cm。後者は礎石を抜き取る際にあばかれた土と考えられるが、そのひろがりの中には黒色土が、かすり状に混在する。なお両者の中には、少量ではあるが、灰や黄色を呈する粘土^{註5}も混入する。以上を要約すると、かつてこの建物が火災にかかり、木材や収蔵されていた米などが火気を受け炭化し、建物全域面に落下堆積した。後代に至り地表下-20cmでは、耕作時の鋤先に石はかかるので、黒色土の下層にある茶褐色粘土層^{註5}があばかれ、石が除去された。茶褐色粘土のひろがりの下には礎石は無い。以上の所見は、東西中央断面における所見とも一致する。

つぎの発掘は、日程の制約上発掘区の南半のみの掘り下^{註6}ぎにとどめたが、A列のみは礎石の遺存状況が良いので、将来の保存をも考慮にいれA列東側の一部のみを掘開した。

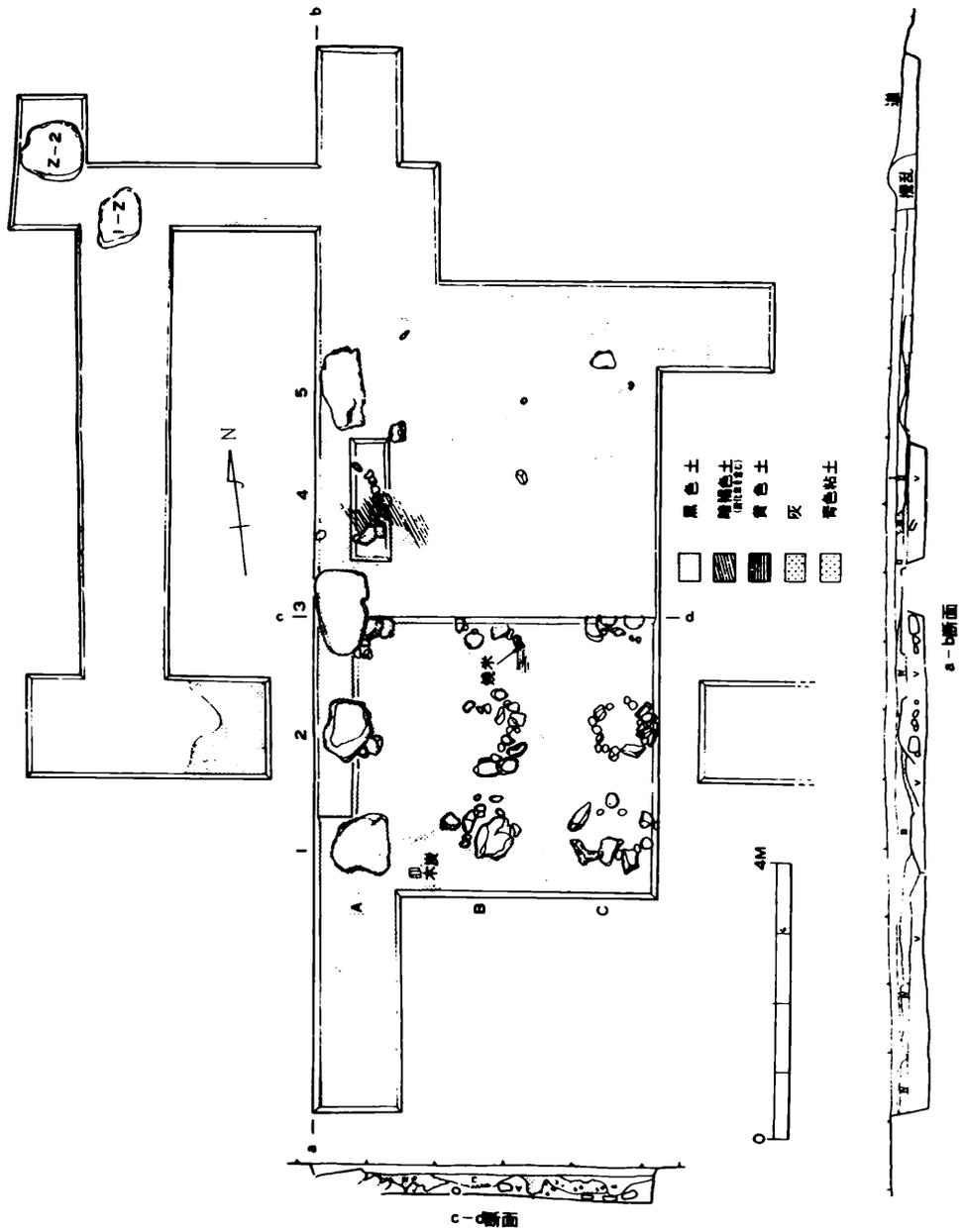
つぎに、断面の観察と各礎石について略記する。

南北断面

発掘区の西側を延長区をも含めて、約13mを観察した。既述のごとく20cm前後の耕土(第Ⅰ層)の下に、褐色土(第Ⅱ層)があるが、この第Ⅱ層までブルドーザーが入り、より下位の黒色土層(第Ⅳ層)をもひっつけているので、褐色土と黒色土の双方が混在したブロック(第Ⅲ層)が点在する。礎石の頂部を含めてかなりの深さまでが、第Ⅳ層に属する。根石について付言すると、断面図はA列の投影であるが、A-1は未確認であり、A-2・3・4・5は現存する。点色土のひろがり北側では、A-5近くまで認められるが、漸次稀薄となる。南側はA-1より南に約3m延びて、漸次稀薄となる。断面からは遺物は検出されない。

発掘区における礎石列

既述のごとく、第Ⅳ層以下の発掘を南半区にのみとどめたが、露出された礎石は、A・B・C列



第57(2)图 長者原礎石実測図

の各1・2・3だけであるが、A列以外は根石のみである。石材は当地方でコメ石と呼ばれる、花崗岩のみに限定されている。(図4)

A—1 長径84cm 短径76cm 頂部に楕円形の平坦面をもつ、前記のごとくこの石のみが他に比べ低い。根石は未確認。

A—2 長径72cm 短径68cm 真下の根石と側面からさしこんだ根石を認める。

A—3 長径124cm 短径64cm 他に比べ大きくかつ平坦面も広い。北東隅の根石は認められないが、もともとないものとも思われる。

A—4 (根石) A—3とA—5の間がこの部分のみ長いので、小試掘坑を入れた結果、半環状にめぐる根石を検出した。

A—5 露出作業時に、既に平坦面が露出した礎石。長径116cm 短径60cm。 A—3と同じく長形で平坦面も広い。

B—1 (根石) 10箇の根石がほぼ環状にならぶが、とびぬけて大きい根石が1箇ある。これはのせる礎石の裏の形状に関連するものであろう。長径116cm。

B—2 約16箇の根石が環状にならぶが、西側はかなり抜き取られている。長径124cm。

B—3 中央断面にかかり、全形状をうかがえないが、7箇が環状にならぶ。長径96cm。

C—1 12箇が円坐状にならぶ。長径130cm 短径120cm。

C—2 約21箇が円坐状にならび、C—1とともに根石としては、遺存のよい方である。長径100cm。

C—3 約6箇が認められるが、B—3と同じく未発掘に属する。

中央断面(東西断面)

A—3、C—3をきつた東西の断面を示したものであるが、B列C列の礎石を抜いたための攪乱土が看取されるが、A列は黒色土につつまれ安定している。

つぎに、礎石の方位と柱間間隔について簡記する。方位はA列において磁北より6度5分東偏する。柱間間隔は不正確であるが、次のごとき数値を得た。

A 2—A 3 168cm 5.544尺 A 2—B 2 182cm 6.006尺

A 3—A 4 162cm 5.346尺 B 2—C 2 202cm 6.666尺

A 4—A 5 158cm 5.214尺 A 3—B 3 202cm 6.666尺

上述の数値において、ほぼ確実に柱間を計測し得たのは、A列のみであり、他は比較的遺存のよい根石を使用したか、不正確である。さらに北半の発掘において良好な礎石を得て、より正確を期したい。

第1次2次の調査で得られた礎石からは、2間4間の建造物となるが、さらに礎石がかつて存在したのか否かを一応考えてみる必要がある。発掘の結果からは、南側については抜き取られたと考えられない。おそらくA—1は角柱であろう。北側には、次のような多少の疑点がある。それはA—5に接する攪乱層は、A—6が抜かれた結果の攪乱と見られる点で、もしそうであつたとすると



第58(3)図 黒色土と礎石を抜いた跡



第59(4)図 南半分の礎石

西1区の黒色土はA—6に関連づけられ理解しやすくなる。確証はないが、Z—1, Z—2のいずれかをA—6に比定されもする。西側については発掘の結果から存在し得ないのではないかとと思う。東側については、東1区を約3m拡大したが、存在を示唆するような所見はない。但し東側地区は、かつて段落ちとなつて現町道に平行な細長い畠地があつたという記憶が、地主にも確実にあるので、東側のその1列が段畑をひらいた為に破壊されたとも考えるが、いまそれを実証す材料はない。

発掘拡大区

図示のごとく、発掘区を拡大したので、その概況をのべる。

東第1・2試掘区 前者については特記事項はないが、断面に崖状の段落ちが認められる。後者には黒色土の限界が見られる。

西第1試掘区 黒色土の北限が、本区と北第1区にかけて見られるが、この地点は攪乱がかなり激しいので、黒色面のひろがり、はや北にのびていたと考えられる。攪乱部には搬出された礎石2箇(Z—1, Z—2)が検出された。礎石下には水道管が通る。

西第2試掘区 黒色土は漸減するが、明瞭な境界は認められない、おそらく西1区・西3区をつらぬる線が、本区の東壁下を通るものと思う。

西第3試掘区 礎石A—2より西に約1.4mはなれた所に黒色土の境界が認められる。西限であろう。

南第1試掘区 礎石A—1より南に約1.5mで、黒色の境界が認められ、断面にも検出される。

南第2・3試掘区 遺構・遺物など検出されない。

遺物

布目瓦小破片・南第1試掘区とC—3近くで出土。

青磁片 南第1試掘区出土。

米・木材片 いずれもまつ黒く炭化している、前述の黒色土の中に前者は含まれる、もみがらのついたものとつかないものがあるが、つかないものが量的に多い。A—1とB—1の中間の南側壁の角近くから、米と木材がかなり多量に出土。米粒の出土状況は、個々の米粒は揃っておらず、塊状で不統一であるので、穂のままで焼けたとはいえない。

土師質壺 高台付土師質の破片その他の小片が僅かであるが出土。^{註7}

結語

今次の調査によつて、多少の疑点はあるにしても、四間二面の建物のプランを明かにし得、かつその建物が火災にあい焼失したことも明かにし得たと思う。焼失のおおまかな時期を示すのは、土師質の土器片であり、以降の遺物は全く含まれない。

従来、長者原一帯から出土する焼け瓦、焼け米などの説明にあつて、『文徳実録』所収の天安2年(853年)の「菊池城不動倉十一宇火」の記載を引用して、その事実を示す材料であると、通説のようにいわれているが、われわれの調査の結果断定はつしまなければならないが、その可能性が考えられるようである。ただし不動倉の規模や十一宇という棟数については、われわれの知識は完全でない。不動倉十一宇がはたして長者原とよばれる台地にのみあつたのか否か、疑つてみる必要があり、これらは今後に残された問題である。伴出の木材の樹名、稲の同定などは本報告にゆ^{註8}ずりたい。(三島格・緒方勉)

註1 『昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報』伝鞠智城跡・三万田遺跡 熊本県教委 昭和44年

註2 近年の開田による抜き取り以外にも、たとえば、長者原のほぼ中央を通る県道拡張工事の際にも、多少の地形変改がなされているが、この変改は礎石配置に重要な関係をもっている。

註3 乙益・田辺・緒方・上野および三島らが担当した。文献は『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報伝鞠智城跡』昭和43年 熊本県教育委員会。

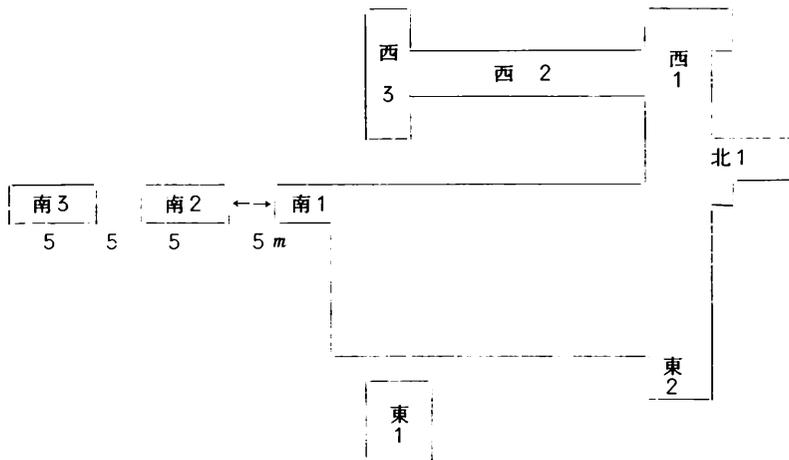
註4 礎石には下記のごとく番号を付した。A—1はA—2、3、5よりやや深い。これはブルド

ーザーによる沈下を思わしめる。

	1	2	3	4	5
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○

註5 この黄色粘土は、宮野礎石における、礎石下の知見により判断すれば、根固め用の粘土の一部と考える。

註6



註7 長者原では、炭化米のほかに粟・稗・小麦などが得られている。(註3書の長者原の項)

註8 昭和31年8月滝川政次郎教授を中心とする菊池古文化調査の折に、三島は米原部落近くで、相当量の炭化米と木材片を検出した。

本実測図のトレースには高木恭二君らの協力を得た。記して感謝申し上げる。

Ⅲ 宮野 礎石 群

昭和43年3月のボーリング調査で、地表下約30~50cmに、南北に長軸をとる礎石群が埋設していることを確認した。そこで今次の調査はその礎石群を露出して、建造物の規模を明らかにし、この建造物が鞠智城の中でどのような機能をもっていたかを推定するためのものであつた。ただ日程の関係で礎石以外の遺構については調査できなかつた。調査は前回のボーリング調査にもとづいて礎石の周囲だけを露出したが、礎石の下部の調査は1礎石にとどめた。露出した礎石群は西から東へA・B・C・D列、南から北へ1~10とした。(図6)

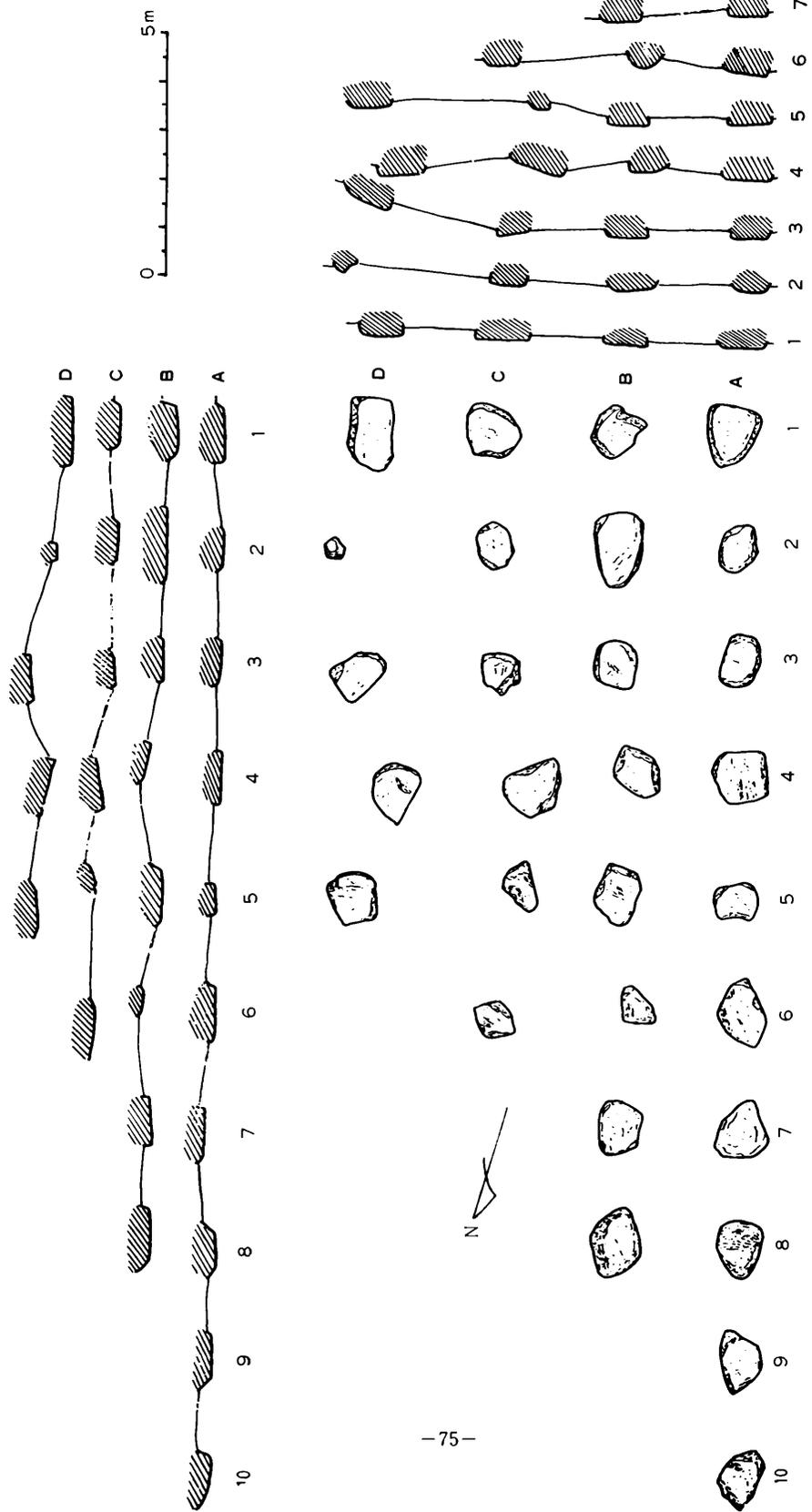
礎石列はA列が10個、B・C・D列はそれぞれ8、6、5個で合計29個を確認した。A-10は現在の桑園の北の端にあたり、その北側は段落ちの畑地になつていて、そこに2個の礎石が存在している。おそらくこの礎石群の中から移動したものであろう。礎石の石材はD-2(硅岩質)をのぞいてすべて花崗岩を使用しており、上面は平坦になるよう加工されている。

29個の礎石のうち原位置から移動したと考えられるものは、B列の4、6・C列の3、4、5・D列の2、3、4の8個で、A列は全部原位置であらう。とくに地形がA-1からD-5方向にかけて低くなつているため、D列は耕作時の邪魔になる関係からD-1以外をかなり深く埋めこんでいる。実際地主の話によると、D-1は表土下わずか12~13cmであつたので、耕作するたびに邪魔になつていたということである。

原位置にあると考えられる礎石間の中心距離は東西、南北ともに約2.41~2m(=8尺)である。したがつて東西約7.20~30m(礎石端から礎石端までの距離8.35m)、南北約21.60~70m(同22.70m)の長さになる。つまり現状では間口3間、奥行9間の建造物を想定するのが妥当であらう。なおこの建造物の性格については別項にゆずることとする。



第60(5)図 宮野 礎石 群



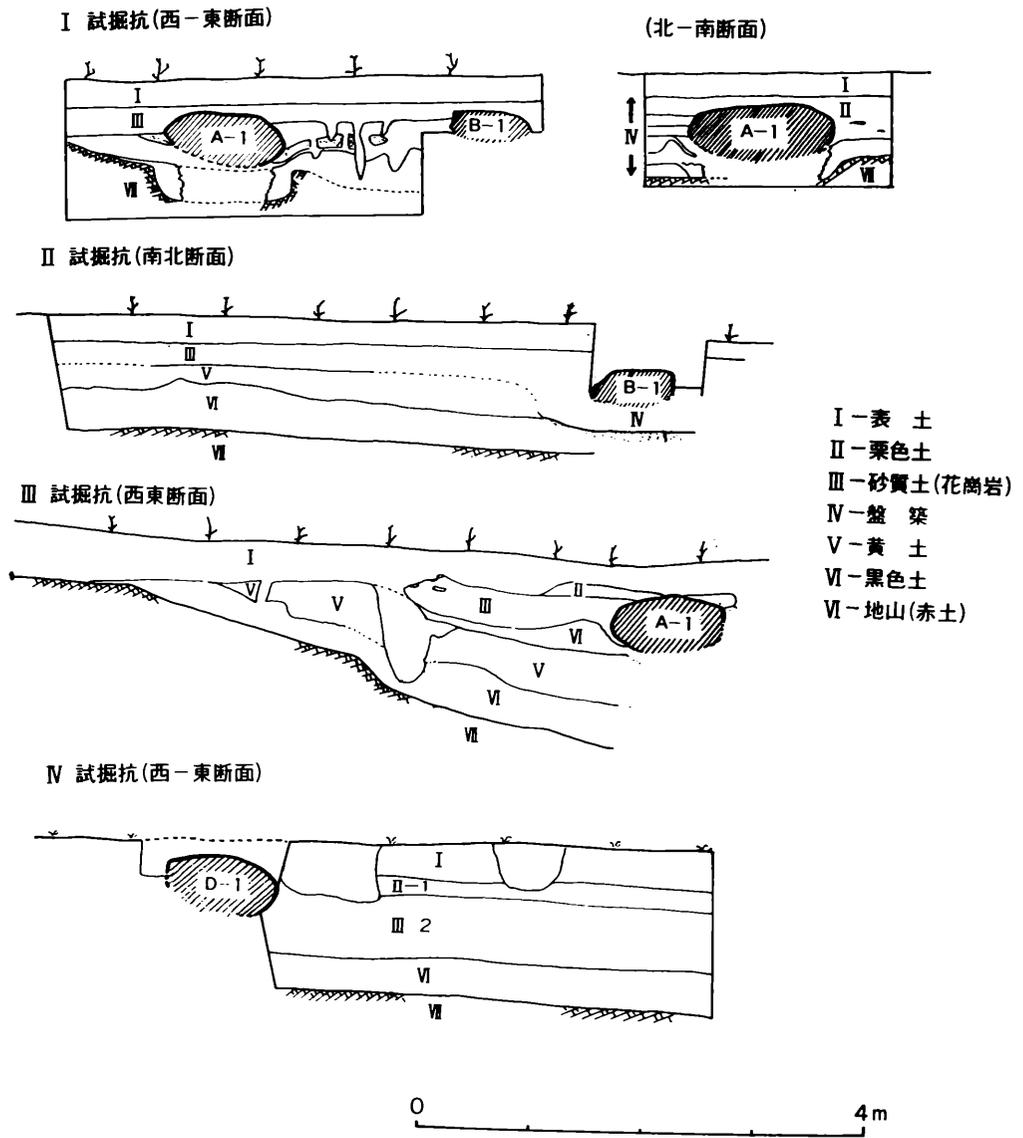
第616图 宫野磁石群配置图

この礎石列の中でとくにD—4は移動しているうえに、石の表面に多量のススが付着している。このような例は宮野礎石の中には他に例のないことである。そのほか礎石の周辺から遺物を検出したのはA—2、3、5、C—3で布目瓦片、A—8とA—9のほぼ中間からやや西よりのところから平瓦のかなり大きな破片を、A—1から土師片をから碗型土器を検出した。とくに瓦類は二次的な火をうけたとみえ赤味をおびている。

礎石群の露出後、版築の広がりや遺構を確かめるため試掘坑を設定した。(図8) A—1を東西南北に掘った第Ⅰ試掘坑、B—1から南方に3.5m延ばした第Ⅱ試掘坑、A—4から西方6.5mの第Ⅰ試掘坑、D—1から東に4mの第Ⅳ試掘坑がそれぞれである。第Ⅰ試掘坑は礎石を固定する場合にどのような方法を取っているかを確認するためである。まず地山を鍋底状に掘り下げてある程度固め礎石を安定させるために約30~40cmの厚さで版築を行なっていることがわかる。この場合建造物の外側になる部分、つまり西側と南側とはわずかな版築を行なっているにすぎない。版築は地山の赤



第62(7)図 宮野出土古瓦



第63(8)图 富野礎石土層断面图

土や黒色土を交互に固めたもので、スコップでもかなり手こずるくらいに固めている。なお礎石下に根固め土も使用していないことも特色であろう。第Ⅱ試掘坑も版築の広がり確かめるためのものである。ここでは地山が深いので地山の上層の黒色土層に黄色がかつた版築を行なっている。第Ⅰ試掘坑の状態と同じように建造物の外側にはわずかに約40cmの版築の広がりを認めるだけである。第Ⅳ試掘坑では版築の外側への広がりはずっと認められない。建造物の西側の遺構を調べるための第Ⅲ試掘坑では礎石の外側に約1.70mの広がりをもつ黒色土層（地表下約60cm）を確認した。この地層は地山上の黒色土の二次堆積層と考えられる。またその上面がやや固いことから、当時の地表の一部ではないかと推測する。なお図中で地山が西側で平坦になつている部分があるが、これは近年ブルドーザーによつて削平されたためである。また礎石の外側約1.50～1.80mのところ、深さ約30cmで平瓦片を多数検出した。（図7）

宮野礎石列の全般的な特徴として、礎石の下部をある程度固めたことはもちろんであるが、建造物の内側になる部分は、礎石の上端から約10cmの深さで非常に固めており、建造物の外側はほとんど手を加えていないことを指摘できる。また版築の上面に花崗岩の風化した砂質土が、約2cm～8cmの厚さで存在する部分がある。この砂質土は版築後おそらく建造物の西側から流入した堆積物であると考えられる。

（隈 昭志、杉村彰一、桑原憲彰）

IV 長者山の遺構



第64(9)図 長者山

長者山は米原部落の南西約500mにある小丘で、長者原台地の西端を限る要害の地である。この小丘は北につづき、灰塚・涼みの御所の土塁線を経て佐官どんの峰につながり、一連の小山脈をなす。この地には昔から米原長者どんの「御金蔵」があつたという伝説がある。おそらく現在地表に露出している礎石群からおこつた伝説であろう。

現地は鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原530番地にあたり、丘全体は雑木とクスギ林におおわれている。丘の大部分は米原部落の共同墓地になつているため、頂部の変形いちじるしい。この地に礎石列があることは早くから知られており、熊本県が「伝鞠智城跡」として指定したのもこの地であつた。しかるに墓地の周辺は竹笹や雑木が生い繁り全貌を確かめることは容易ならぬものがあつた。たまたま今回は米原部落の人たちによつて、樹林の下刈りが行なわれていたため、全山の地形測量を完遂するとともに、新しい礎石群を発見し、多大の収穫をあげることができた。(図10)

長者山は宮野礎石群の所在地から約60メートルはなれたゆるやかな丘で、宮野の礎石群との比高差約10メートルを有する。丘頂は数段に分割された平坦部が構成され、米原部落の共同墓地になつている。従来、礎石群の判明していたのは、共同墓地の北側に接したクスギ林の中の平坦部地点で、南北2列、東西4列、合計7個におよぶ。これらのうち、東西の礎石間隔は7尺の柱間が想定され、南北は7尺5寸の柱間が復元される。このような1間3面の建物はありえないので、おそらく礎石列の北側か南側にもう1列分の礎石があつたと考えられるが、確認されていない。おそらく抜きとられたのであろう。この地点に礎石列のあることは古くから知られており、かつて昭和30年8月、神道文化会と菊池文化顕彰会が共催して調査したさいには古瓦の残欠や須恵器の小破片が検

出されている。

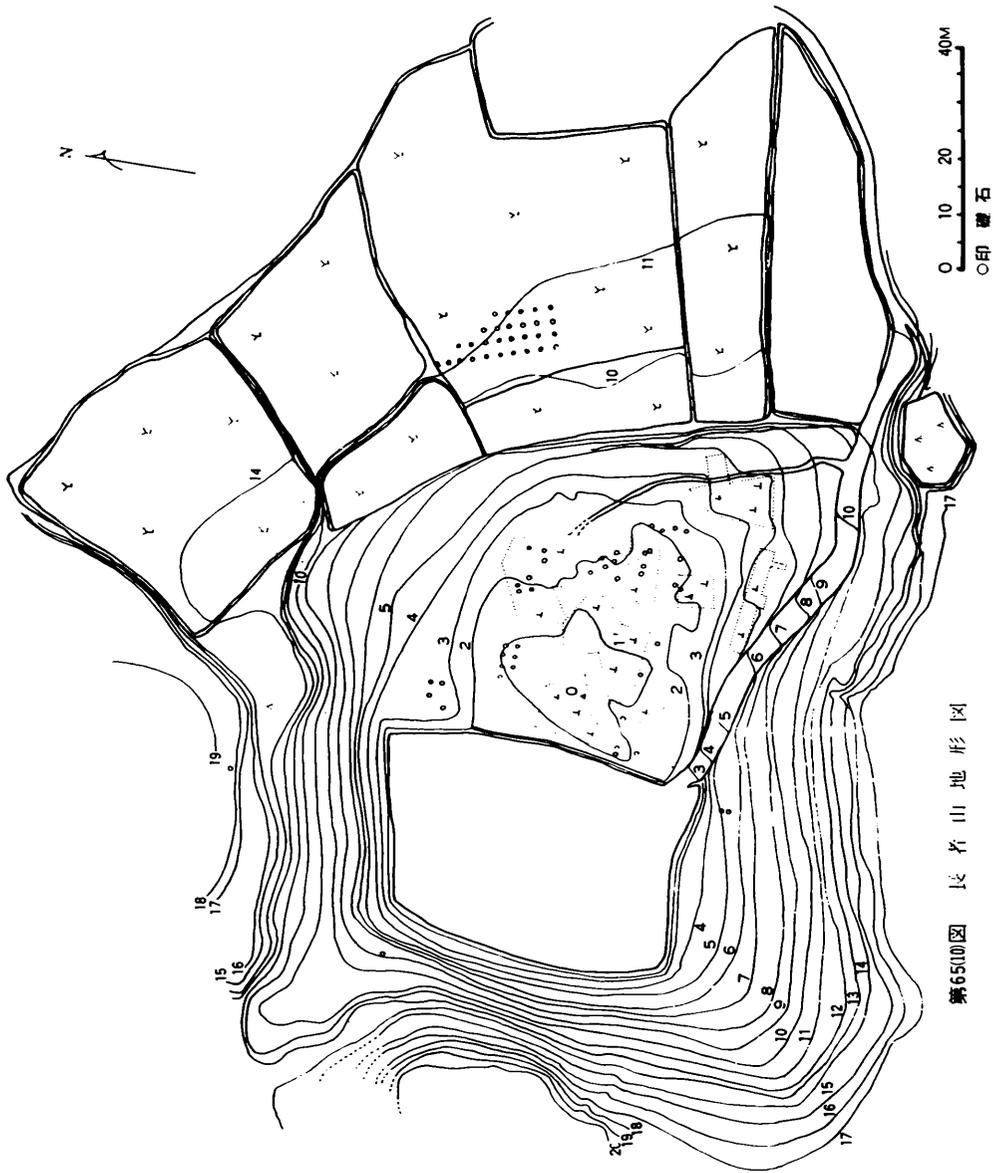
共同墓地内の礎石群は合計10個以上に及び中には移動していないものもあるが、多くは埋葬のさい、動かされ、不均等な配置をもつて散在する。これだけの礎石群をもつて幾棟分の建物を復元できるか問題であるが、少なくとも現状から考えて、二棟以上はあつたものと考えられる。さらに、墓地の東側のクヌギ林の茂みから今回新たに発見した4個の礎石列は、柱間間隔7尺が復元され、おそらくこの地点から墓城の平坦部にかけて1棟分の建物があつたことが考えられる。

又、墓地の北西側の段落ちになった山林中の平坦部に南北方向に2.2m間隔で3個の礎石があり、その西に2個の石がみられる。まだ埋没しているものも予想され、ここにも1棟の建物が予想される。

次に、共同墓地の西側では、昭和43年正月、何らの予告もなくブルドーザー開墾が実施され、多くの礎石群が消滅した。後日、聞くところによると、開墾された平坦部には等間隔をもつて7個の礎石列があつたといわれる。おそらくこの平坦部には、1棟以上の建物があつたと考えられるが、今は探索のしようがない。墓地の西端には、現在移動していない礎石1個と移動した礎石2個が認められるが、おそらくこの地点にも1棟分の建物があつたのであろう。現在、開墾されてしまった長者山西側の平坦部では、西北方の谷と東南方の谷に合計3個の礎石が転落している。又長者山の南、比高約20メートル下がつた地点には平坦な土地があり、あるいはこの地点にも何らかの建物遺構が存在するかもしれないが、今回の調査では確認することができなかつた。

要するに長者山の礎石群は、地形的にみて鞠智城内でも重要な施設があつたものと考えられる。すなわち、北は、灰塚、涼みの御所、佐官どんの尾根につながる土塁線をひかえ、東は宮野礎石群及び長者原礎石群に接し、西は池ノ尾城門礎石をのぞみ、南は深迫城門礎石及び堀切の城門礎石を見下ろす展望のよい地点にあたり、軍事的意義は大きい。しかも長者山の建物は瓦葺であつたと考えられ、従来、数片の古瓦が採取されている。

(乙益重隆・上野辰男)



第65100图 长 春 山 地 形 图

V 小 結

以上のべた通り鞠智域は、昭和42年度の第一次調査に着手以来、第二次調査（昭和43年度）を経て本年度の第三次調査を終るにあたり、従来判らなかつた多くの問題を解決することができたことは、何よりも有意義であつた。

すなわち第一次調査時には、鞠智域の外郭線を一応把握するとともに、米原部落およびその周辺に散在する礎石群を記録し、長者原一帯の測量調査を行ない、基礎的な作業を概成した。さらに「堀切」と「深迫」・「池ノ尾」に現存する城門礎石を完掘露出し、城の全体配置を探索する有力な手がかりをえた。一方米原部落の西を限る小山脈に設けられた土塁線をたどり、「佐官どん」の、尾根にある平坦部の発掘を行なつた。また従来実態の明らかでなかつた「馬こかし」の石垣や、「三枝」の石垣はたとえ後世の所産とはいえ、鞠智域の配置を知る有力な手がかりとなつた。とくに同年3月に行なわれた補充調査によつて、「宮野」と「長者原」に礎石群が埋没していることが明らかになり、第三次調査の端緒となつた。

第二次調査は主として「深迫」の城門礎石一帯に進入道路の方向を把握するとともに、周辺に土塁遺構らしきものを発見した。とくに第二次には土塁線や切落しの崖線をたどり、その実測図を作成することに重点をおいたが、「長者山」から「灰塚」「涼みの御所」「佐官どん」の尾根にいたる土塁線、および車路のほか明確に把握できるものはなかつた。それというのも米原地方は花崗岩の風化土地帯であるため、崖線の自然崩壊箇所が多く、人為的遺構との区別があまりにも困難であつたからである。

第三次調査はすでにのべた通り「長者山礎石群」および「宮野礎石群」「長者原礎石群」に重点を



第66(1)図 米原台地全景

おき、礎石列の全面露出作業を行なった。「長者山」地区では今回新たに発見した礎石列も合計して、約1000平方メートルの中に、5～6棟分の建物が想定された。とくに従来判っていた墓地の北側にならぶ礎石列は、南北7尺、東西7尺5寸の柱間間隔が復原された。このような礎石配置は従来類をみないので、さらに今後の探索が必要である。また「宮野」の礎石群では東西4列、南北10列分の礎石列が確認され、柱間東西は8.5尺、南北8尺の間隔を有することが判った。おそらくこのような九間三面の建物配置から考えると、長倉の跡と考えられ、三間四方を単位とする東倉・中倉・西倉の三倉が一棟内に在ったものと推定される。

さらに「長者原」の礎石群は東西6.5尺、南北5.5尺の柱間間隔が復原され、礎石は東西3個、南北5個分だけしか確認できなかつた。少なくともこのような礎石配置の建物は他に類がなく、柱間間隔も他の礎石とはまるでちがった数値をえた。一体鞠智城では、各礎石群によつて柱間間隔を異にするのは、いかなる理由によるものであろうか。或は各建物の機能が本質的に異なるのであろうか。また各建物の成立年代がちがうのであろうか。いずれにしても大きな問題が残る。

このように鞠智城は従来幻の城跡とよばれていたが、ここによつて全体の概念だけでも明らかにすることができたのはまことに幸である。しかし、まだ多くの問題が残されている。すなわち城の全域には「少監どん」「紀屋敷」をはじめ「長者山」の南平坦部、「堀切」の門礎石の上段にある古瓦出土地点、「長者原」における埋没礎石群、その他域の外郭線と内郭線の把握など、疑問点が少なくない。今後といえども鞠智城は、抜本的な継続調査を行なうことがのぞまれるものである。

(乙益重隆)



昭和54年度埋蔵文化財緊急調査概報

第五次調査

調 査 の 組 織

発掘調査は菊鹿町教育委員会より調査員派遣申請を受けた熊本県教育庁文化課が実施し、調査事務は菊鹿町教育委員会が担当した。

調査主体	菊鹿町教育委員会
調査責任者	高 田 貫 一（教育長）
調査員	高 谷 和 生（県文化課技師） 鶴 嶋 俊 彦（県文化課嘱託）
調査事務局	早 田 政 義（総合建設室長） 松 永 鶴 広（社会教育課課長） 家 入 憲 隆（土木課課長） 菊 川 常 久（社会教育係長） 芹 川 真 正（土木課第1係長） 高 木 勇（土木課第2係長）
調査指導及び協力者	三 鳥 格（元福岡市立歴史資料館長） 白木原 和 美（熊本大学文学部教授） 甲 元 真 之（熊本大学文学部助教授） 小 田 富士雄（北九州市歴史博物館主幹） 西 谷 正（九州大学文学部教授） 木 村 幾多郎（九州大学文学部助手） 近 藤 義 郎（岡山大学文学部教授） 森 郁 夫（国立奈良文化財研究所） 石 松 好 雄（九州歴史資料館技術主任） 高 倉 洋 彰（九州歴史資料館主任技師） 森 田 勉（九州歴史資料館主任技師） 高 橋 彰（九州歴史資料館主任技師） 古 賀 寿（久留米市教育委員会社会教育課） 富 永 直 樹（久留米市教育委員会社会教育課） 菊鹿町社会教育課職員一同 菊鹿町土木課職員一同 下田建設株式会社 本田啓介米原地区区長 米原地区住民一同 岩 崎 辰 喜（県文化課課長） 田 辺 宗 弘（県文化課課長補佐） 真 弓 袈裟勝（前県文化課課長補佐） 上 野 辰 男（県文化課主幹） 隈 昭 志（県文化課文化財調査係長） 島 津 義 昭（県文化課学芸員） 県文化課職員一同

I 調査にいたる経過

菊鹿町総合建設室では昭和54年度に町道稗方～立德線における米原地区道路拡幅工事を予定した。しかし米原地区には県指定史跡である鞠智城が当地区をとり囲むような状態で位置していた。今回の町道拡幅地区は昭和34年の県指定史跡の範囲内ではないが、立地等から見て明らかに当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の中核に位置している。そこで総合建設室土木課及び町教育委員会では文化財保護法にのっとり法的手続きを行った。一方県教育委員会では当該地には鞠智城関係の重要な遺構等が検出される可能性が強い為、菊鹿町教育委員会の発掘調査に県職員の派遣を決定した。また調査の方針等については昭和54年度第2回文化財保護審議会において概要の説明を行った。さらに文化庁においては、遺跡の重要性を考慮し、調査において重要な遺構等が検出されたときは、設計変更等によりその保存に十分配慮をはらうように熊本県教育長及び菊鹿町長あて通知を行った。このような経過のもとに拡幅地区内の全面発掘を行った次第である。

(高谷)

II 発掘調査の経過

昭和54年9月10日 町道拡幅地区を踏査する。その結果発掘期間にはほぼ30日間必要である



第68図 調査区全景

と考え10月1日からの調査に向けて準備等に入った。今回の調査においては調査事務は町当局で行ったが、調査用具の準備等に手間がかかり、用具類が不十分な状況のまま調査に突入した。現場における作業は町当局の努力にもかかわらず、発掘人夫の欠員等で困難をきわめたが、当初の予定日数を20日間延長し11月30日に完了した。

10月1日 菊鹿町役場において調査の方針について打ち合わせを行った。町道より西側、字名では上原地区より調査を行い、完了後東側部に漸次移行することとした。

10月2日～4日 A区に第Ⅰ号～第Ⅴ号まで5本のトレンチを設定。浅い所で40cm、深い所でも1mでローム層へ達する。南側より北側へゆるやかに傾斜を持つ。全く遺物、遺構等は検出されなかった。

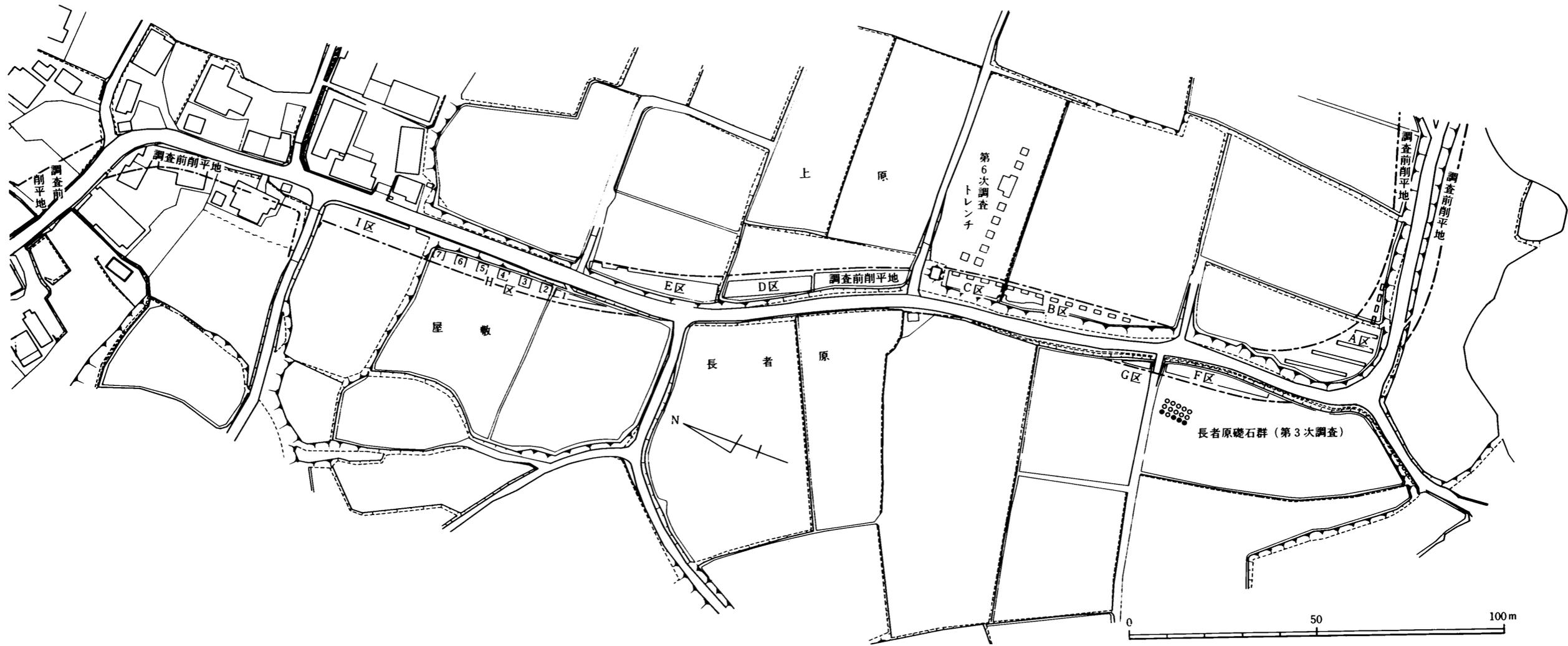
10月5日～10日 B区及びC区に南北方向のトレンチを各一本ずつ設定する。B区は工事先だち旧地権者が採土を行った為に調査地区は半減している。トレンチにおいてピットを検出し確認に努めたが不明である。C区においては瓦、土器類等を検出し一部焼土らしき面を検出した。しかしながら、調査面積が遺構面が不明である為に、この調査区の調査を一応中断して、次の区へ移動した。

10月11日～15日、11月1日～11月2日 E区では南北方向にトレンチを設定した所、礎石が一個確認された為に、全区拡張を行なった。まず削掘機により表土剥ぎを行ない、平面プランの確認を行なった。瓦、中世陶器、土師器、須恵器等がSK502、SD501・502に落ち込んだ状況で、南側及び西側には、近世陶磁器を含むSD503、504が検出された。さらにこの地区では総数7個の礎石が発見され、礎石を抜き取ったと思われる一連の土壌、SK503・504も検出されたが、礎石については全個とも原位置を保っていない。

10月1日～10月31日 再度B区及びC区にもどる。茶褐色土下部より遺物が全面にわたって出土した。大量の瓦に伴い、土師器、青磁が包含する状態で出土したが、遺構に伴うものではなく、下層から検出されたピット群の上面にかぶさる状態であった。さらにD区では南北方向にトレンチを設定した所瓦類の出土を見たために、第Ⅱ層までの全面剥ぎを行った。西側に道路状遺構SF501を、北側に楕円形土壌SK501を検出した。部分的に炭化物、炭化米の散布が見られたが層を成すようなものではない。さらに遺物では土師器、瓦、土器、瓦等が出土したがこれもまた遺構に伴ったものではなく、西側に向かって流れ込んでいる。

11月5日～8日 F区～I区までの発掘にとりかかる。F区は昭和42年度に調査された田の続きで、通称長者原礎石群と呼ばれている。前回未確認部分、礎石の続きが予想されたが直接関係する遺構は検出されなかった。隣接するG区では田のコーナーの一角であり、深い所でも80cmでロームに達する。H区においても同様であり、40cmでローム層に到達し、中にピットが数個検出されたが、直接関係するような遺構は確認されていない。

11月9日～11月30日 各遺構の実測および調査区全体の実測を行なった。30日、各調査区の



第69図 鞠智城跡第5次発掘調査地区全図

土層の比較検討を行ない、発掘調査が終了した。

(高谷)

III A区 (字上原444の2・445の2番地 面積 486㎡)

水田として利用されていたA区では、1m幅のトレンチを合計8本設定した(第69図)。8トレンチ北半においてローム層が北側へ傾斜しており、耕作土・茶褐色土層・黒褐色土層・赤褐色土層・ローム層という層序をなす。しかし、8トレンチ南半及び他のトレンチでは黒褐色土層・暗赤褐色土層を欠失しており、地表下25~30cmでローム層が現われた。

A区は米原の台地上の中でも標高の最も高い地点にあり、以前の水田化に伴い削平され整地されたものであろう。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

(高谷)

IV B・C区 (字上原447の2・448の2番地 面積311㎡ 字上原449の2番地 同139㎡)

B区は水田、C区は桑畑として利用されていた。両区に1×2mのトレンチを2m間隔で設定したところ、B区の北端トレンチでピットを検出し、C区では比較的多くの遺物が出土した。そこで、両地域のトレンチを拡張して遺構の有無を確認することにした。

土層の関係 B・C区は耕作土(I層)・茶褐色土層(II層)・黒色土層(III層)・暗赤褐色土層(IV層)・黒褐色土層(V層、C区のみ)・赤褐色土層(VI層)・ローム層(VII層)の層序がみられた。遺物は主にB区とC区南半においてはIV層上位に、C区北半ではIII層下位に包含されており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦・青磁・中世陶器と多岐にわたる。完形の知れる遺物はなく、すべて破片・細片となって出土し、量的には土器類は少なく、布目瓦が主体をなす。この遺物包含層が中世期の土器類を混在する形で出土していることは、中世期以降に成因のあることを示し、遺物が破片・細片となって出土するのは、これと関係するとみられる。

検出遺構(第71図) B・C区では合計70個のピット群がVI層下位・ローム層上面で検出された。検出作業はIV・V・VI層を注意深く掘下げて行なったが、南北断面図(第71図)にみられるように、断面にかかるピットはB区ではVI層上面、C区ではV層上面ないしはIV層中から掘りこまれていることを観察できた。一方、ピットの埋土にあつては、B区のNo.1、C区のNo.13が黒色土であったことを除けば、多くのピットがIV層の土を埋土としていた。したがって、ローム層上面で最終的に確認した多くのピット群が掘りこまれたのも、B区ではVI層上面、C区ではV層上面ないしはIV層中からではないかと考える。ただし、IV・V・VI層とも極めてしまりのないフカフカの土層であり、上面といっても断面から想定するもので、平面的に検出することができなかったことを断っておく。

ピット群は径20~50cm大のものがほとんどであり、円形ないしは不整円形の形状をなす。ピットの底の標高値(第72図)による観察では、B区で145.00~145.40mに、C区では144.80~



C区 瓦集中地点



B区 ピット群



C区 ピット群

第70図 B・C調査区

145.30mに多くのピットが位置する。8例のピット中には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦等の遺物を出土した(第72表)。

そのほか、B区北端部ではⅥ層中に長さ150cm、幅50cmにわたり焼米が薄く散布する箇所があり、その中に径20cm前後の焼土を検出した。

遺構の性格 検出されたピット群の中で、比較的規則的な配列をとるとみられるピットに、C区のNo.4・18・25およびNo.29・33・38・39がある。ピットの間隔と方位(磁北)は、前者が2.3m前後でN1°30'W、後者が1.1~1.34mでN38°Eである。そのほかB区ではNo.1・3・5~9(N31°E)と、No.10~15(N39°E)がほぼ一直線上に並ぶ。これらのピット列の底の標高値は、C区のもの40cm前後、B区のもの80・90cmという差がある(第72表)。発掘面積が限られているため、ピット列の性格については断定を難しいが、一応4本の柱列を想定し、その年代については布目瓦片を混入するピット(C区No.25)があることから、鞠智城築城から遺物包含層が堆積した中世の間とみられる。

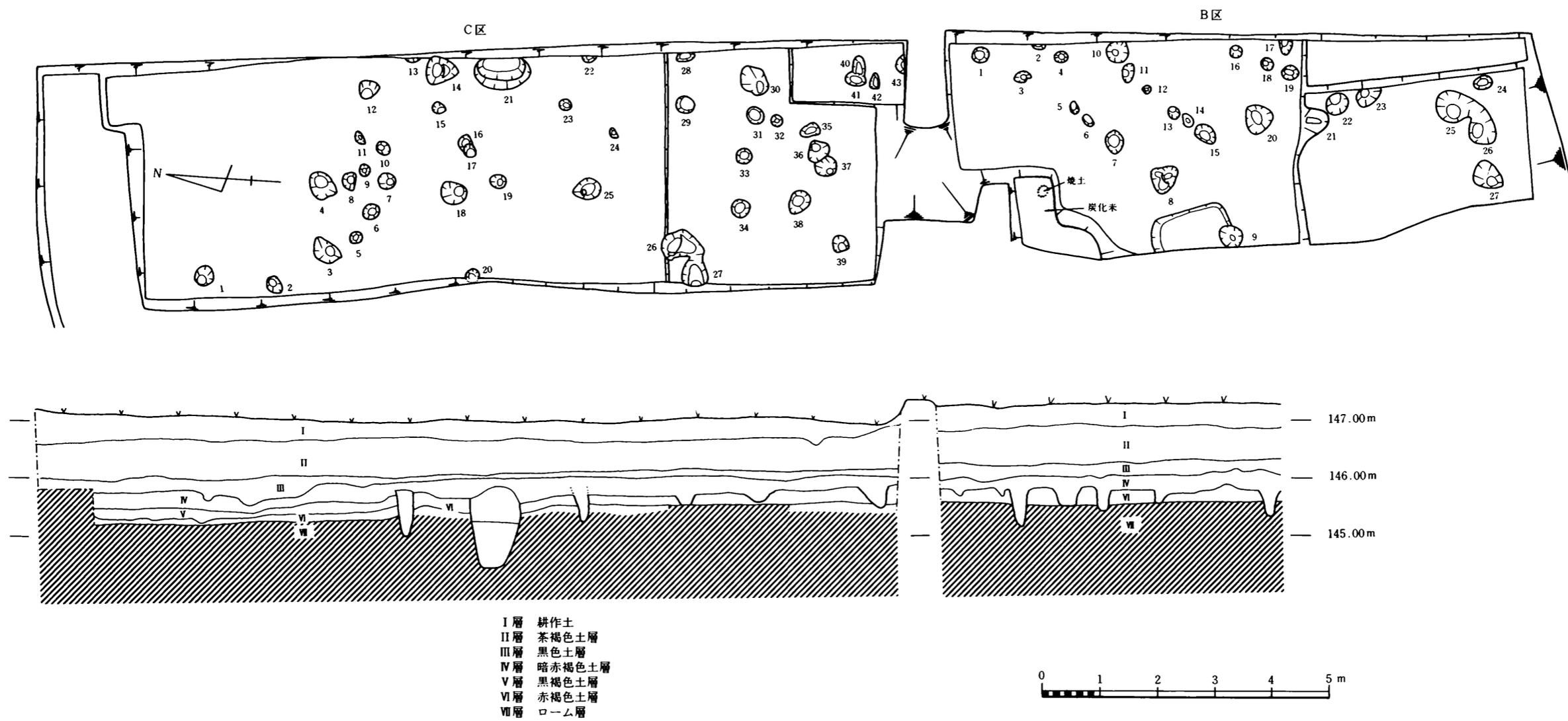
出土遺物

B・C区で出土した遺物のほとんどはⅢ・Ⅳ層中に包含されており、下層からは出土していない。遺物の大部分が瓦類で、土器類が若干ある。また、8個のピット内からは縄文土器・須恵器・布目瓦が出土している。全形の知れる遺物はなく、すべて破片・細片となって出土している。

瓦類(第73図~第76図)

C区のⅢ・Ⅳ層中から軒丸瓦の破片を含む比較的多くの瓦類が出土している。

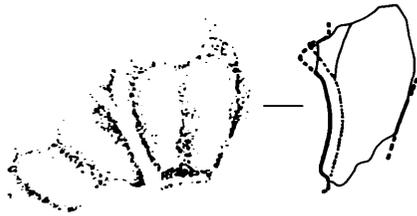
軒丸瓦(第73図NM-1) 蓮弁2葉分の破片で、中房・周縁は欠失しているが、素弁8葉の蓮華文軒丸瓦に復原される。弁は長さ4.0cm、幅3.6cmで中央に丸みを帯びた陵線が走り、



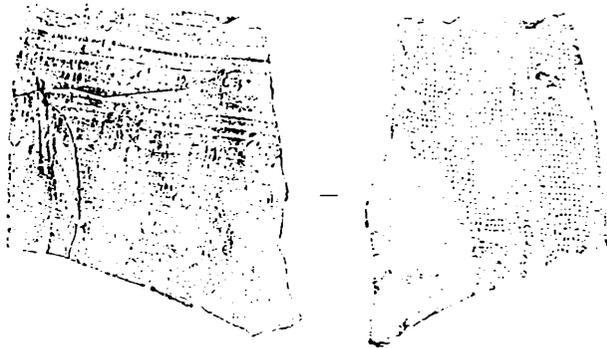
第71图 B·C平面图 東壁断面实测图

第72表 B・C区ビット計測値

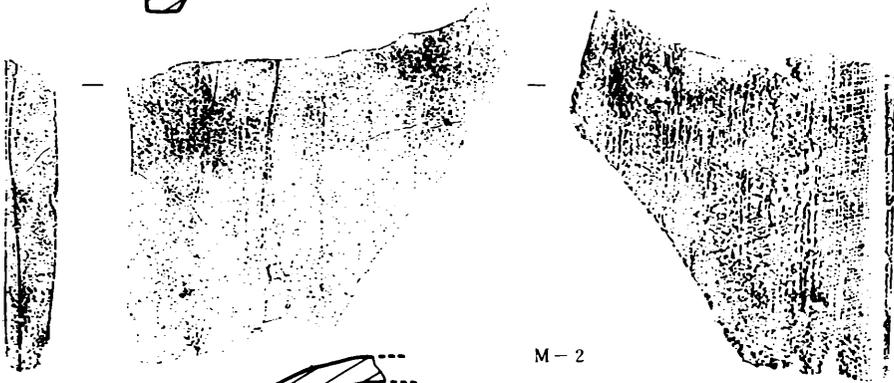
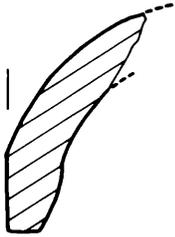
区	ビット番号	深さ (cm)	ビットの底標高値(m)	長径×短径 (cm)	備 考	
B 区	1	40.8	145.157	29×25	VI層上面からの掘りこみ 弥生土器壺胴部片	
	2	64.4	145.098	23×?		
	3	24.4	145.253	30×19		
	4	28.3	145.188	24×19		
	5	28.7	145.192	22×15		
	6	46.0	145.012	22×13		
	7	36.7	145.075	40×32		
	8	20.6	145.904	50×44		
	9	40.0	145.670	44×37		
	10	88.7	144.903	38×?		VI層上面からの掘りこみ
	11	37.3	145.164	32×20	VI層上面からの掘りこみ	
	12	18.0	145.320	15×14		
	13	38.0	145.095	23×20		
	14	18.0	145.265	22×18		
	15	42.5	145.720	40×28		
	16	22.0	145.305	20×20		
	17	44.0	145.295	?×21		
	18	34.5	145.175	20×20		
	19	20.5	145.330	28×24		
	20	26.5	145.905	50×48		
	21	16.0	145.545	47×47		
	22	41.5	145.295	40×37		縄文土器2片
	23	40.5	145.290	?×30		
	24	31	145.350	30×20		瓦1片
	25	44	145.225	63×55		縄文土器1片、瓦5片、須恵器甕1片 瓦1片
	26	62	145.025	71×45		
	27	25	145.385	63×47		
C 区	1	66.5	144.510	33×33	IV層中からの掘りこみ	
	2	39.5	144.790	24×32		
	3	42.9	144.780	50×35		
	4	44.0	144.865	50×38		
	5	32.7	144.915	21×19		
	6	33.2	144.935	28×26		
	7	40.6	144.886	30×27		
	8	23.0	145.047	27×22		
	9	29.8	144.995	19×19		
	10	63.4	144.671	22×22		
	11	18.7	145.109	24×14		
	12	56.1	144.655	36×31		
	13	73.5	145.015	27×?		IV層中からの掘りこみ
	14	69.5	144.580	57×50		
	15	37.4	144.929	23×19		
	16	14.1	145.166	?×23		
	17	29.0	145.040	?×20		
	18	59.3	144.735	45×35		
	19	45.6	144.885	28×23		
	20	25.1	145.035	25×?	瓦片出土	
	21	120.0	144.46	96×(54+α)	V層上面からの掘りこみ・黒褐色の埋土	
	22	53.0	145.135	32×?	V層上面からの掘りこみ	
	23	20.6	145.175	22×18	瓦片出土	
	24	31	145.055	20×10		
	25	24.5	145.096	50×37		
	26	68.0	144.425	75×58		
	27	53.9	144.877	50×44		
	28	24.0	145.515	34×?		
	29	34.1	145.127	31×30		
	30	33.9	145.186	57×46		
	31	24.3	145.257	30×28		
	32	28.4	145.222	20×20		土師器甕口縁部片出土
	33	25.6	145.231	26×26		
	34	44.2	145.027	33×31		
	35	25	145.255	33×22		
	36	59.2	144.865	40×35		
	37	54.9	145.48	37×33		
	38	66.3	144.795	34×43		
	39	25.3	145.213	28×26		
	40	19.8	145.177	?×21		
	41	35.1	145.005	36×19		
	42	17.1	145.196	28×15		
	43	31.6	145.020	32×?		



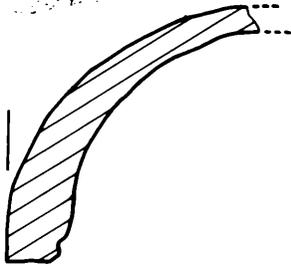
NM-1



M-1



M-2

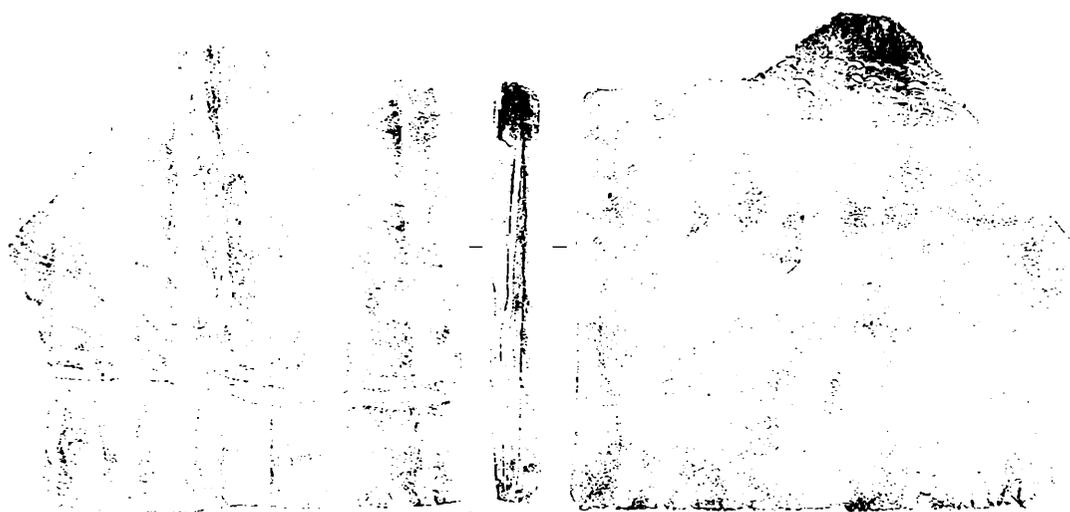


0 5 10cm

第73図 軒丸瓦・丸瓦実測図(1:2)



第74図 平瓦 a・b・c 類実測図 (1 : 4)

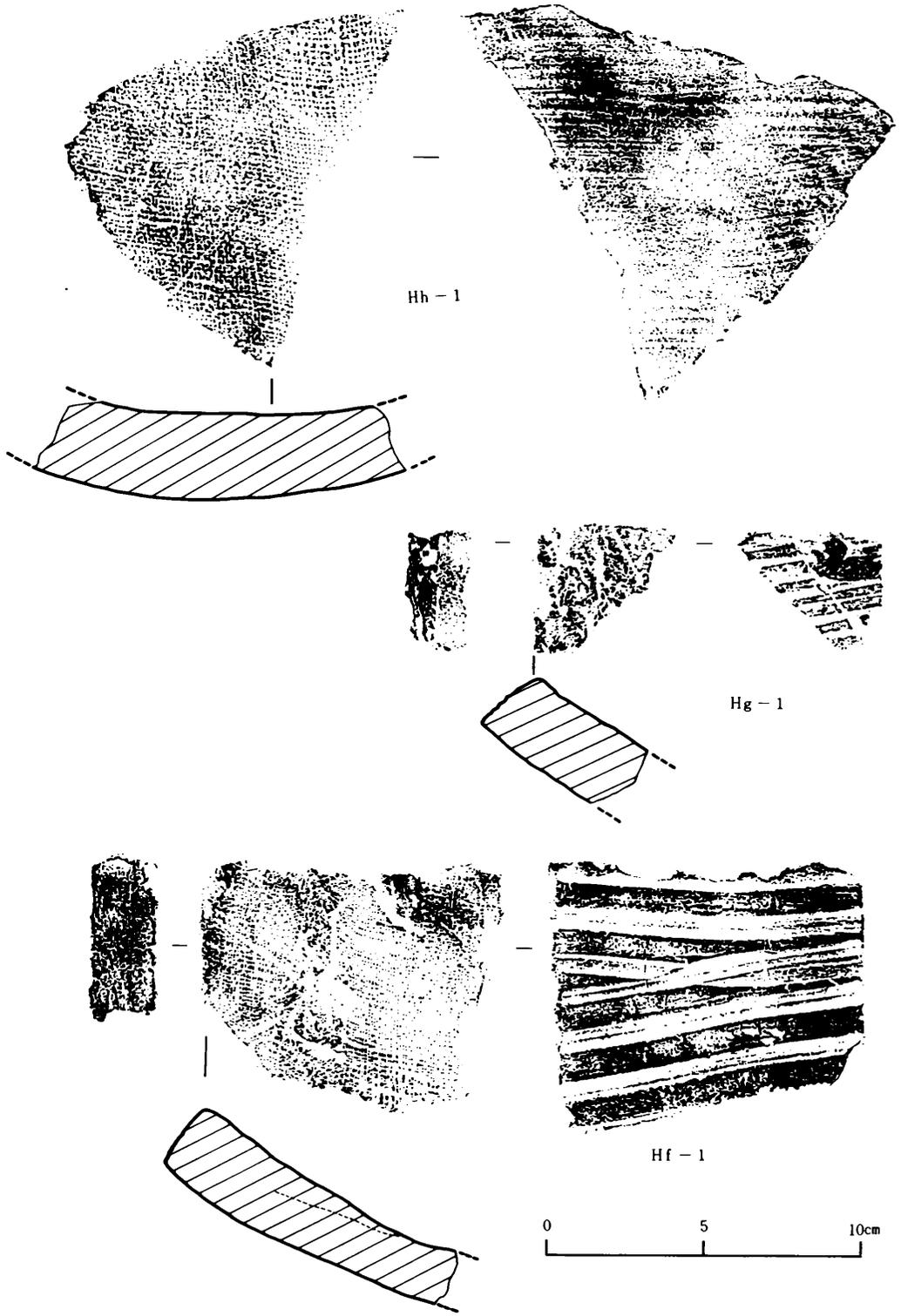


Hd - 1

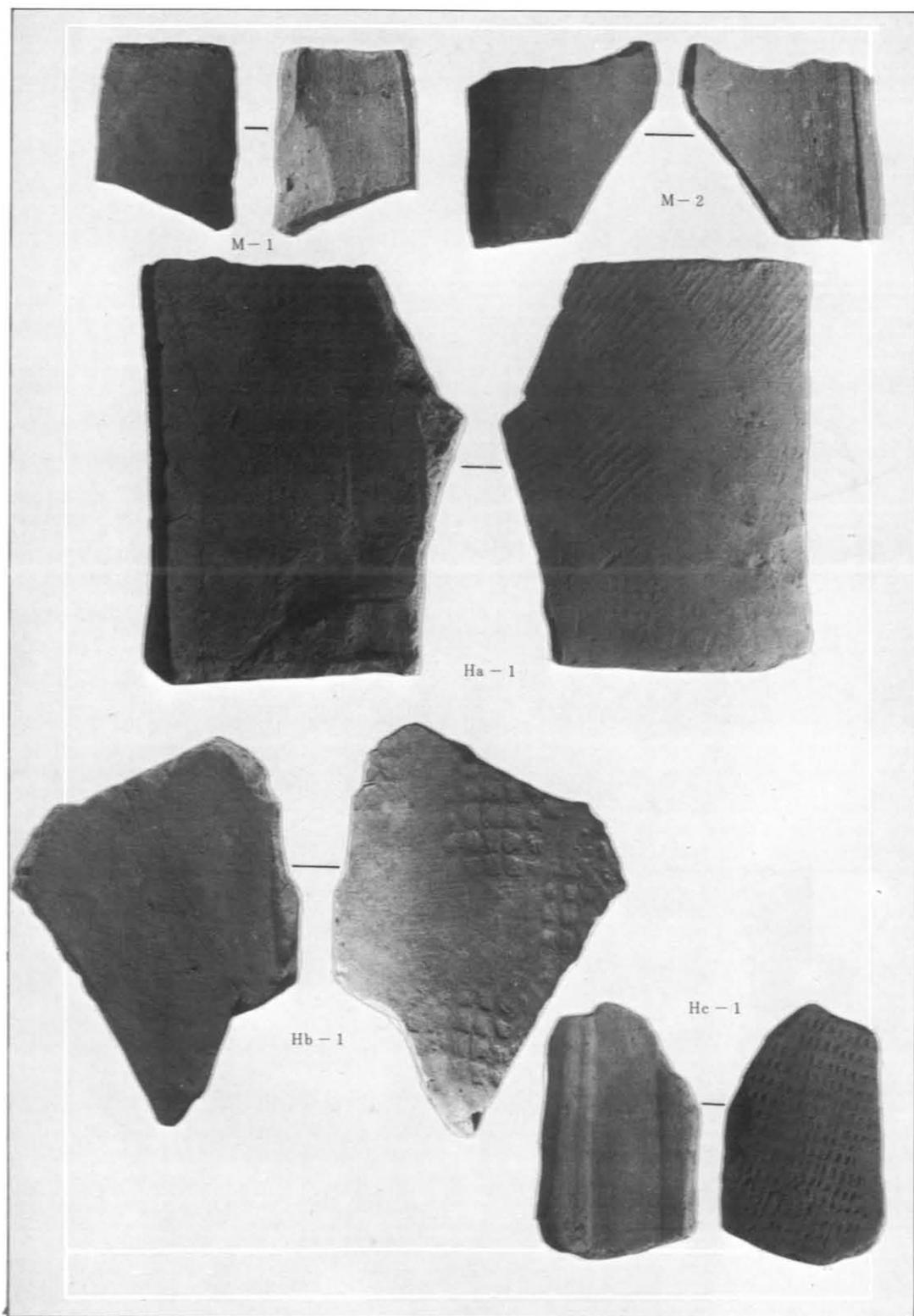
He - 1



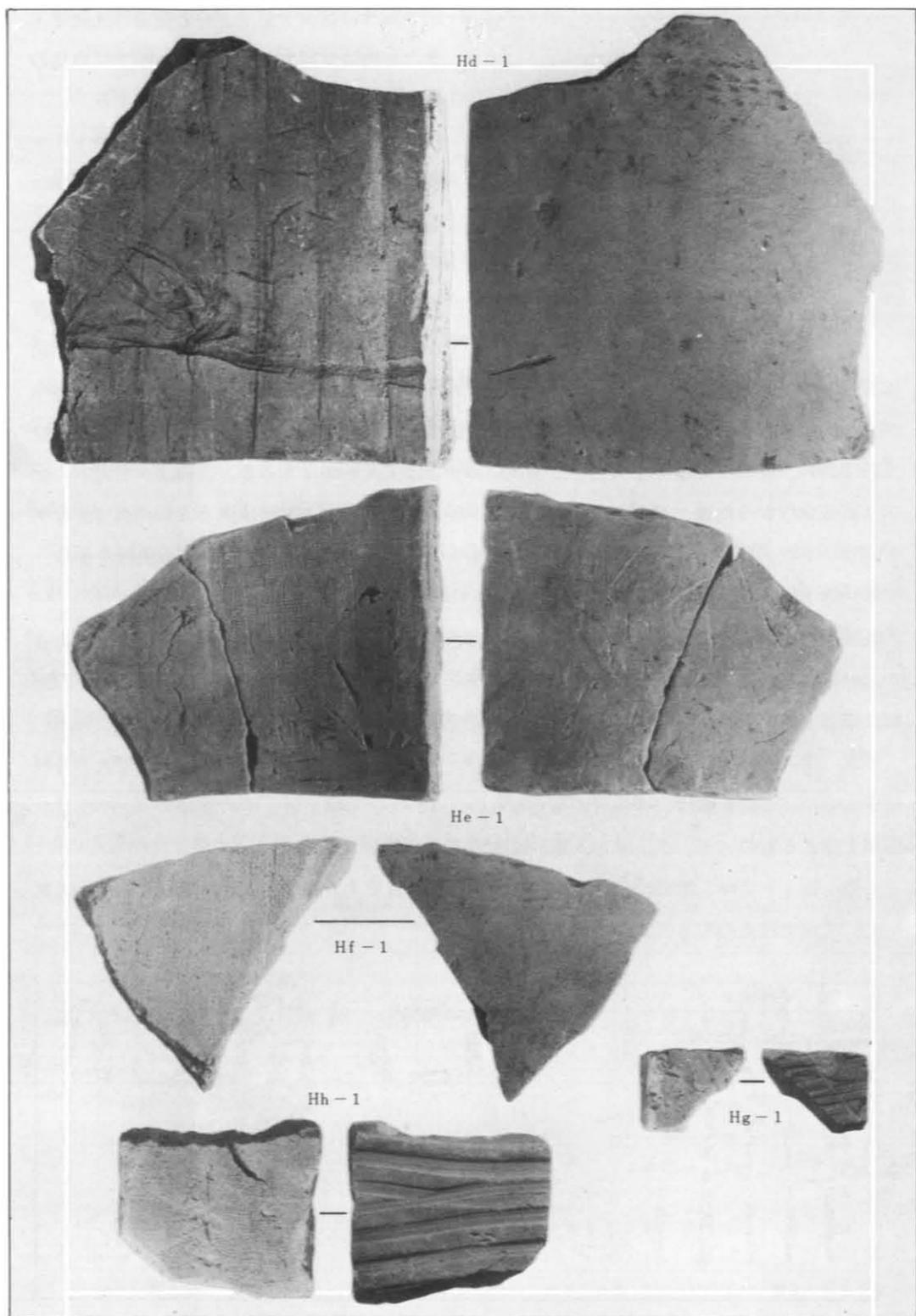
第75図 平瓦d・e類実測図(1:4)



第76图 平瓦 f·g·h 類実測図 (1:2)



第77图 C区出土丸瓦·平瓦



第78图 C区出土平瓦



第79図 C区出土軒丸瓦

その左右は匙面を呈す。弁と中房は連続せず、また弁間には間弁が配される。胎土に白色砂粒を含み、焼成は堅緻で褐色を呈する。

弁区の復原径12.8cm、中房の復原径3.8cm前後となり、周縁を加えた推定瓦当径は18cm前後となろう。

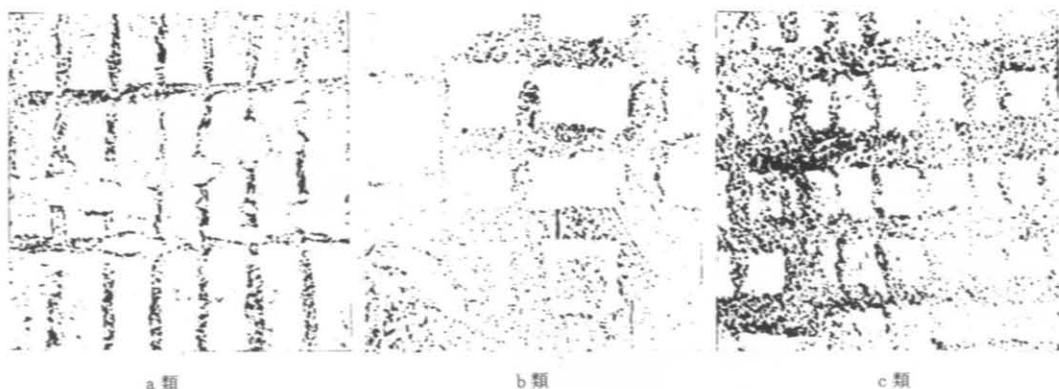
丸瓦(第73図) すべて小破片で点数も平瓦に比較して大幅に少ない。M-1は行基葺き丸瓦の尻部片とみられる資料である。凸面

は後述する平瓦g類に類似する回転利用のハケ目調整がなされ、その後凸面側縁は頭の方へケズリ調整される。側面は頭の方へケズリ調整され、面取りは行なわれない。胎土は良好で砂粒を若干含み、焼成は堅緻で暗灰色を呈する。M-2は丸瓦胴部片である。凸面はタテ方向のケズリ調整を行なった後、タテ方向のナデ調整が加えられている。凹面はタテ方向の部分的なナデ調整がされ、側縁には分割界線とみられる幅4mm深さ2mmの沈線が残り、凹面側縁を面取りする。胎土は良好、焼成堅緻で灰色を呈する。

丸瓦は胎土が良好で器壁が薄手のものと、白色砂粒を含む厚手のものに大別できそうであるが、いずれも凸面調整はタテ方向にケズリ調整される。また、側面の凹面側に分割断面、凸面側に破面を残す資料がある。丸瓦の分類については、今後の資料の増加を待ちたい。

平瓦(第74図～第76図) 完形の資料はないが、凸面の叩き目と凸面調整によって次の8種に分類した。この8類は、叩き目の見えるもの(a、b、c類)と、その後にナデ、ハケ目状調整を加えるもの(e、f、g、h類)に大別することができる。

a類: 幅1～2mm、間隔2.5～5mmの刻線とこれに直交する幅2～4mm、間隔6～17mmの刻線を加えた叩き板による長格子の叩き目。



a類

b類

c類

第80図 平瓦叩き目集成(1/1)

b類：幅5mm、間隔7～9mmの刻線とこれに直交する幅5mm、間隔10mm前後の刻線を加えた叩き板による大型の格子叩き目。

c類：幅2～3mm、間隔3～5mmの刻線とこれに直交する幅3～6mm、間隔5～7mmの刻線を加えた叩き板による小型の格子叩き目。

d類：全面をタテまたはヨコ方向にナデ調整し、凸面の広端付近をケズリ調整する。

e類：ヨコ方向のケズリ調整。

f類：ヨコ方向の浅い条線となるハケ目状調整。

g類：幅2mm前後で間隔3mm前後のヨコ方向の条痕となる調整。

h類：幅・間隔とも8mm前後の条痕となる調整。

以上分類した8種の平瓦の中で、a～c類は叩きの後にヨコナデ・ナデ調整を加えるものがほとんどであり、調整の丁寧な資料をd類として分類していることは十分に考えられる。また、e類のヨコ方向のケズリやh類の特異な条痕を調整段階のものとして考えてよいかという疑問をもつが、ここでは一応調整段階の作業によるものとみなした。

さて、8類の平瓦は細片で2点出土ただけのg類を除いて、凹面に糸切り痕・模骨痕がみられ、a・b・d・e・f・hの6類に粘土板の合せ目（S型）、d類に布の綴じ合せ目の圧痕、d類に分割界線が認められ、また、側面は8類のすべてが凹面側に分割断面、凸面側に破面を残している。

以上の痕跡によって、出土した平瓦は、粘土板桶巻作り平瓦と考えられる。

なお、a・d類の多くの資料に凹面広端縁に布端の圧痕がみられ、凸面広端縁をタテ方向のケズリ調整を加えていることは（第83図参照）、d類の大半の平瓦がa類の叩き目を後の調整によって消失させたものであることを示すと考えられる。

第81表 各区の丸瓦・平瓦出土数

	B区	C区	D区	E区	F区	計
丸瓦	0	15	1	3	0	19
平瓦	20	158	13	72	2	265
a類	1	18(5)	1	5(1)	0	25(6)
b類	2	31	0	0	1	34
c類	0	9	0	0	0	9
d類	12(2)	55(7)	8(1)	25(5)	1	101(25)
e類	0	1	0	0	0	1
f類	1	3	0	4	0	8
g類	0	2	0	0	0	2
h類	0	8	0	2	0	10
不明	4	16	4	36	0	60
計	20	173	14	75	2	284

※カッコ内の数字は平瓦凹面広端縁に布端の圧痕をもつ資料数。

第82表 平瓦各類観察表

分類番号	厚(cm)	凸面	凹面	側面	胎土	焼成	色調	備考
a類-1	3.3	長格子の叩き目 ↓ ヨコナデ ↓ 広端付近のケズリ	糸切り痕 模骨痕 広端縁よりに布 端の圧痕	分割断面と 破面があり 軽くケズリ 調整する	良好	普通	褐色	—
b類-1	2.4	大型の格子叩き目 ↓ ヨコナデ	糸切り痕 模骨痕 分割界線	"	"	"	灰色 ↓ 灰黒色	分割界線は 幅5mm深さ 3mm
c類-1	2.5	小型の格子叩き	模骨痕	"	砂粒を 少し含 む	"	灰褐色	—
d類-1	3.0	ヨコナデ ↓ 広端付近の横・ 斜方向のケズリ 調整	模骨痕 糸切り痕 布の縦合せ目 広端縁よりに布 端の圧痕	"	良好	堅緻	灰色	模骨痕の幅 は約4cm
e類-1	2.7	横方向のケズリ 調整	糸切り痕 模骨痕 粘土板合せ目(S) 広端縁のケズリ調整	"	"	普通	明るい 赤褐色	—
f類-1	2.8	横方向のハケ目 様調整 ↓ 部分的にナデ	糸切り痕 模骨痕	—	砂粒を 少し含 む	"	明褐色	—
g類-1	2.3	f類より深いハ ケ目様調整	細片のため不明	分割断面と 破面があり 軽くケズリ 調整する。	良好	"	灰褐色	—
h類-1	2.4	幅の広い条痕と なる調整	糸切り痕 模骨痕 粘土板合せ目	"	"	"	"	—

※ 実測図を所載する資料に限る

土器類（第83・84図）

縄文土器（1・2） 1はB区のピットNo22内、2はC区Ⅳ層中から出土した。両者とも鉢形土器のやや外傾する口縁部片で、内・外面に条痕がみられる。1の口唇部は研磨されている。1・2とも胎土に角閃石をはじめ砂粒を含み、焼成良好で暗褐色を呈する。

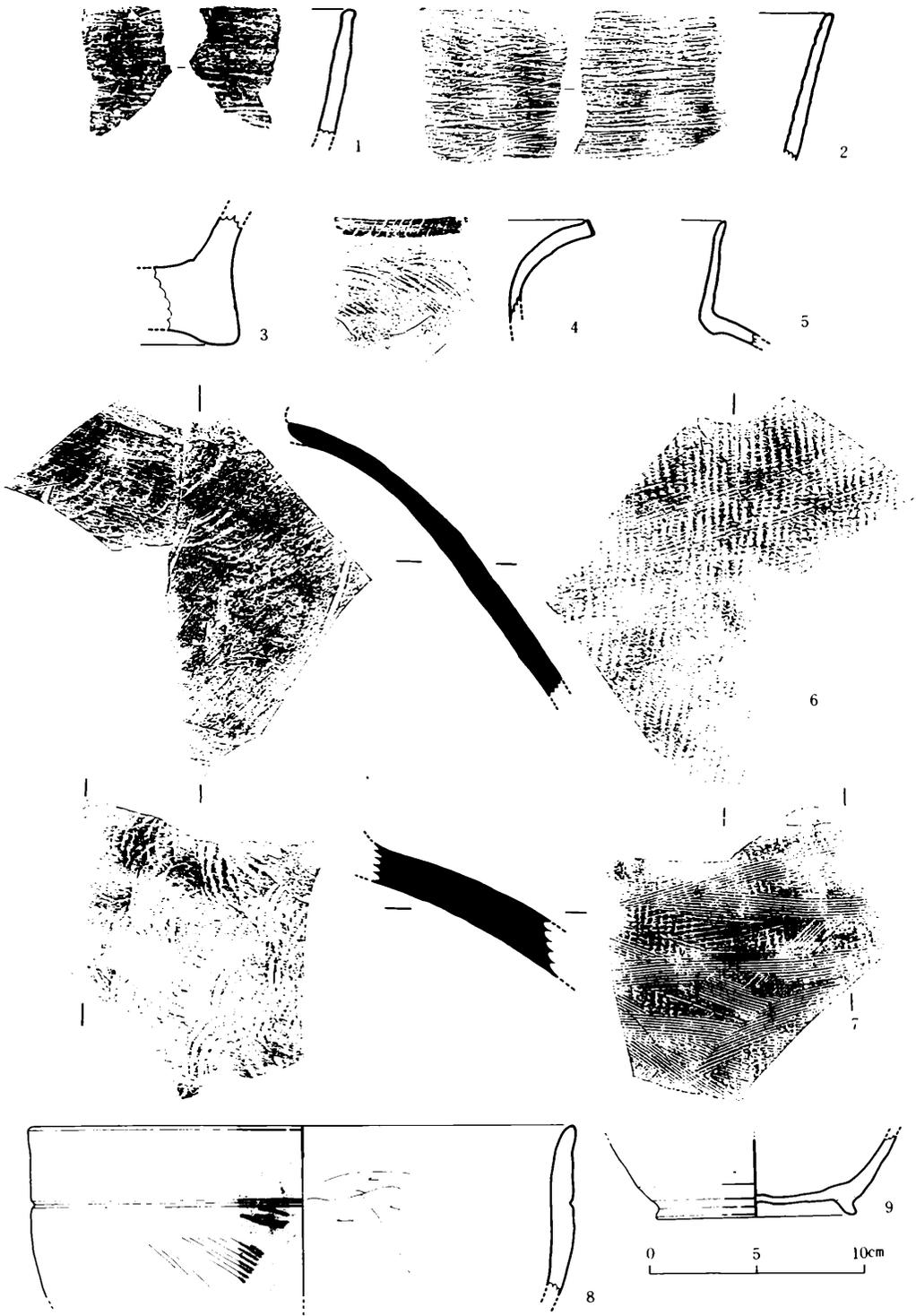
弥生土器（3・4） 3はB区2トレンチのⅣ層中から出土した甕形土器の底部片である。体部外面を縦方向にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。4は壺形土器の強く外反する口頸部片である。内面をナデ調整、外面を強いハケ目調整する。口唇部平端面に5mm前後の間隔でハケ目工具の端部を押し当てた列点文が施される。胎土に微砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。

土師器（5・8・9） 5はC区Ⅳ層中から出土した壺の口縁から肩にかけての破片である。口頸部は直線的でやや外傾する。肩部の内面を左回りにヘラケズリ調整する。器面が風化しており、ほかの調整は不明。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。8は丹塗りの鉢であろう。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は外反ぎみで、口唇から3.6cmの位置に一条の沈緑を配する。胴部のハケ目調整の後に口縁から胴部にかけてヨコナデ調整し、丹塗りを行なう。局部的にヘラ研磨する。内面の口縁部はヨコナデ、胴部を左回りにヘラケズリする。胎土・焼成とも良好で、内部は褐色を呈する。復原口径は25.4cmを測る。9は丹塗り高台付杯で口縁部を欠失する。高台は底部端にとりつき、内面をナデ調整、外面・高台部をヨコナデ調整し、底部外面は回転ヘラ切離しである。胎土・焼成とも良好で、内部は褐色を呈する。底径9.4cmを測る。

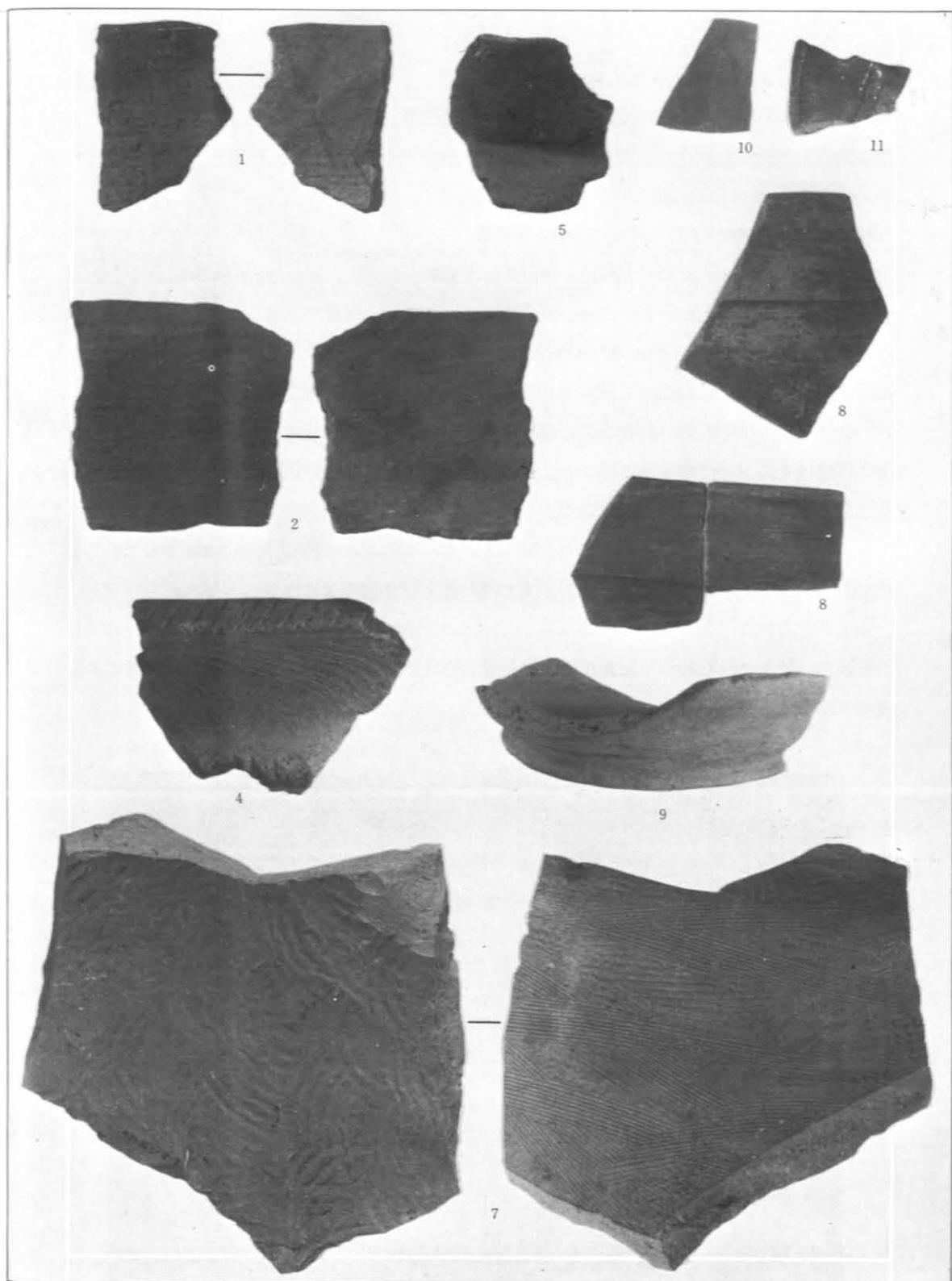
須恵器（6・7） 両者とも甕の肩部片で、外面を格子叩きの後に横・斜方向のカキ目調整を行なう。内面は6が同心円叩きの後にヨコナデし、7は右回りの同心円叩きを行なったままである。両者とも胎土・焼成は良好で、暗灰色を呈する。

青磁椀（10・11） 両方ともC区のⅢ層中から出土している。10は口縁部から体部中位にかけての破片で、外面に削り出しの蓮弁文がみられる。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色を呈し細かな貫入がみられる。11は体部下位の破片で、外面の削り出し蓮弁文の上に櫛目をいれる。内面には見込みの花文の一部がみえる。胎土は灰白色で、釉は灰オリーブ色を呈し細かな貫入がみられる。10・11ともに龍泉窯系のものであろう。

（鶴嶋）



第83图 B·C区出土土器实测图(1:3)



第84图 B·C区出土土器

V D区 (宇上原196の3番地 面積180㎡)

第Ⅲ層(暗い茶褐色土)の上面に縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、布目瓦等が出土している。散存しており特徴はないが一部西側のSF501に流れ込む状況で検出された。

検出遺構(第91図)

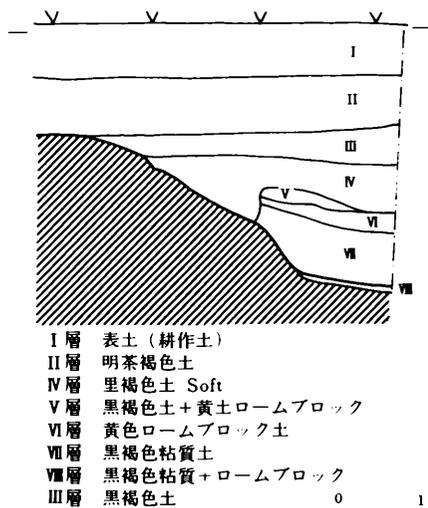
SF501 道路状遺構と思われる。Ⅳ層中に土師器(第87図-7)、須恵器等を含んでいる。Ⅴ層は黒褐色土に黄色ロームのブロックを含むものでかなり堅固である。さらにⅧ層においては黒褐色粘質土にロームブロックが混入したものであり、この面においても堅固さを持つ。これはこの遺構は2回にわたって使用されたものであり、第1回はⅧ層中に布目瓦が2点出土していることから、その時代は布目瓦の使用されていた時期もしくはそれ以降と考えられる。また2回目はその上面に中世陶器等が含まれることからそれ以前の時期であると考えられる。現存のものは遺構の東限にあたり対応するものは確認されない。

SK501 楕円形の二段に掘り込んだ土壇である。長軸方向1.8m、短軸方向0.9mであり、更にもう一段下がり深さは60cmを測る。埋土は黒褐色を呈し、遺物は出土しない。

炭化米散布地点 SK501の南側に、南北方向に主軸を持ち長軸4.5m、短軸2.0mの楕円形の範囲内に散布が見られ、一部炭化米、炭化物の集中する箇所もあるが、層として確認できるものではない。



第85図 D区全景



第86図 SF 501断面実測図

瓦類 (第81図)

D区では平瓦16点、丸瓦2点の総18点の出土である。その内d類が多く8点を占める。

調査地区内西側のS F 501に流れこむような状況で、もしくは第II層明茶褐色土層中から瓦が出土する。第II層自体は各時期の遺物が含まれる二次的な層であり、この地区出土の瓦も遺構に伴ったものではない。

土器類 (第87・88図)

縄文土器(1、2、3) 1は鉢形土器の肩部片で、口縁部に向ってやや外傾する。外面は横位の調整を、内面は同じく横位の研磨が施される。胎土に微砂粒

を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。2は底部片である。底部はややあげ底状をなし、復原径は6.8cmである。胎土には微砂粒を多く含み、焼成はもろく、色調は褐色を呈する。3は平底の土器の底部片である。底部の周縁は指頭圧痕と思われるくぼみが連続する。胎土には石英粒を含み、焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈する。

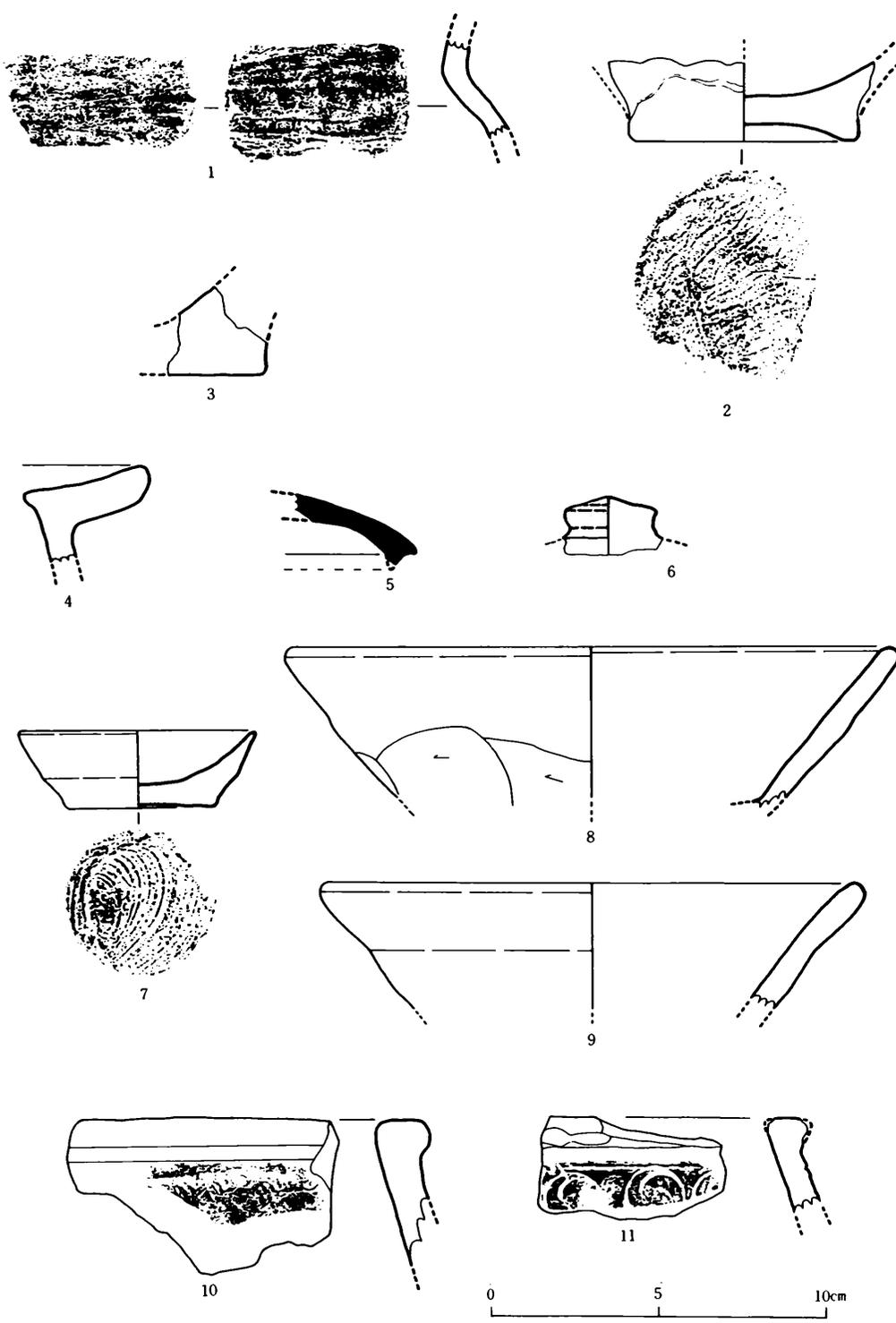
弥生土器(4) 中期の甕形土器の口縁破片である。口縁上部がややくぼみ内側へ張り出す。外面はていねいにナデ調整がなされ、内面には横位のハケ目が見られる。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。

須恵器(5) 坏蓋の天井部から口縁にかけての破片である。かえりを有し復原径は12cmである。外面は天井部付近をへら削りし、他はヨコナデ調整を施す。焼成は良好堅緻で、色調は黒灰色を呈する。

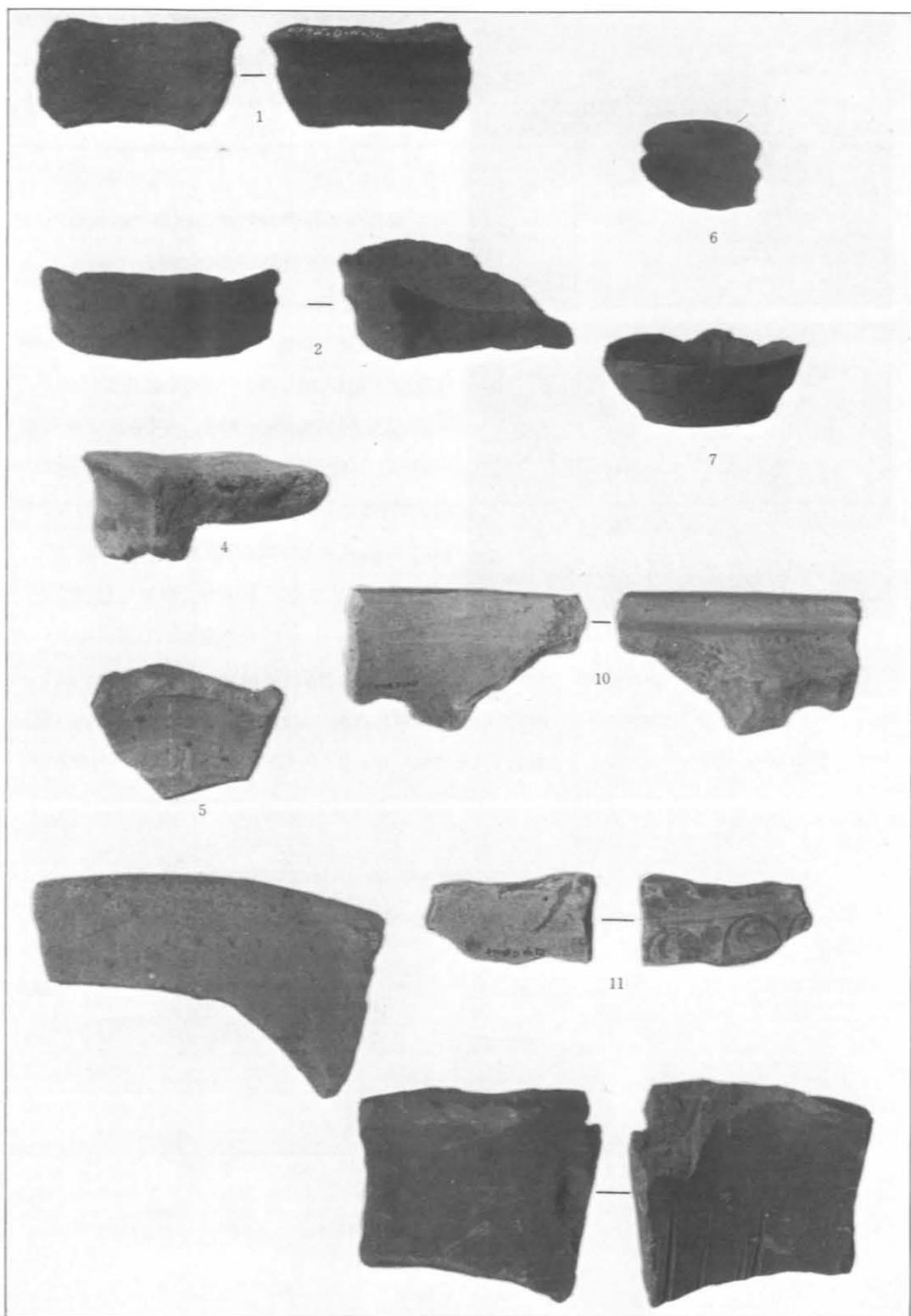
土師器(6) 丹塗り坏蓋のつまみ部である。凝宝珠形をなすがやや偏平である。横位のナデ調整を施し、胎土は密で焼成も良好である。

土師質土器(7) 糸切り底の小皿の完形品である。道路状遺構の上面、第二層黒褐色土層からの出土である。胎土、焼成ともに良好であり明褐色を呈する。

中世陶器(8~11) 8は瓦質の皿である。体部下位を左方向にへラケズリ調整を行ない、他はナデ調整を行なう。復原口径は18.5cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好。色調は外面が灰黒色を内面が灰白色を呈する。9は土師質の鉢型土器の破片である。風化が著しく調整不明。復原口径は33.4cmである。胎土には石英粒を若干含み、焼成良好である。色調は赤褐色を呈する。10は火舎の口縁部破片である。玉縁状の口縁を持ち下部には文様らしきものが見られるが明瞭ではない。内外面ともにナデ調整を施し、焼成良好である。色調は灰褐色を呈している。11は火舎の口縁部破片である。口縁は玉縁状をなすと思われる。口縁下には不等間隔で径



第87图 D区出土土器实测图



第88图 D区出土土器



第89図 E区全景, SK502

1.8cmの三ツ巴文が刻印されている。内外面ともに調整を施し、焼成良好である。色調は灰白色を呈している。(高谷)

VI E区 (字上原195の3番地 面積250㎡)

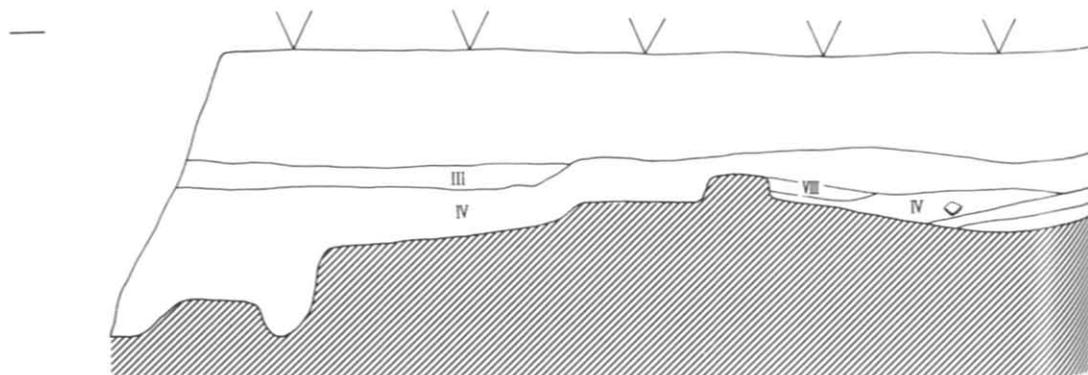
第II層茶褐色土を剥ぐと、一部赤色ロームに達し、遺構面が明瞭に現われる。

検出遺構 (第92図)

SD503・504、共に近世陶磁器染付等が出土する遺構である。SD503は南側へ傾きを持ち深さは30cm程である。SD504は現行道路面とほぼ平行に走り、深さは70cmを測る。

SK502 南北4.8m、東西3.5mを測る土壌である。多数の土師器、須恵器、備前甕、瓦等が出土しているが、土壌面に密着した状況ではなく、浮いた状態で全遺物が検出されている。

SK503・504 礎石を抜き取った跡の穴と思われる。SK503は長軸方向2.0m、短軸方向1.2m、深さ0.4mである。土壌内埋土は3層に分かれII層黒褐色には根固めの用と思われる径15cmの安山岩を含む(第94図)。SK504は長軸は1.5m短軸1.0m深さ0.2を測る。深さが浅いのは、この



第90図 E区東壁断面実測図

地区では北側が強く削平を受けているためである。S K 503と S K 504の柱間間隔は3.6mであり、それはさらにもう一間S D 503側に延びる可能性は充分ある。しかしながらS D 503がさらに深く削平を行なっている為にすでに遺構とはばされていると想像される。さらにS K 503の第II層からは備前焼が出土し、この礎石が移動された時期を示すのではなかろうか。

S K 505 礎石を抜き取った後に礎石をさらに地中深く潜らせる為の穴である。S K 505は第1号礎石を埋める為の土壌であり径は3.5m、深さ1.0mを測る。

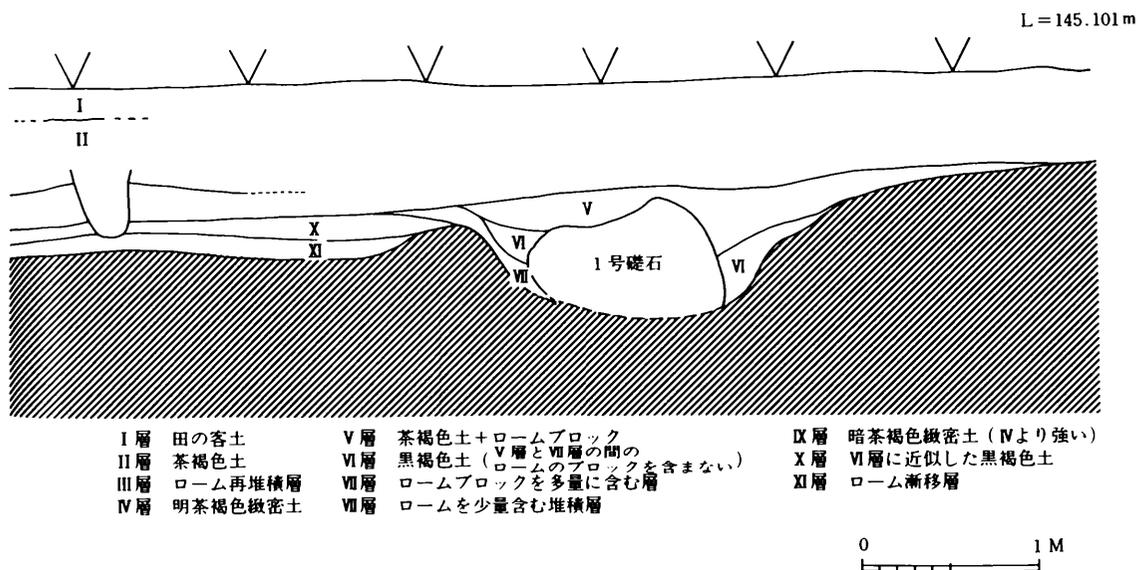
S K 506 南北方向及び東西方向に一条の溝を持つ不整形の土壌である。土壌埋土の第IV層は褐色土層で中世陶器のすり鉢を含んでいる。また第5号礎石はこの層の上面に載っており、おのずと礎石の置かれた時期が限定されよう。

S D 501 東西方向に走る幅1.5m、深さ0.2mの溝遺構である。西側に向うにしたがって浅くなっており、途中で端部は消滅する。溝内には瓦が溝底部より2cm程浮いた状況で検出される。

S D 502 ほぼ東西方向に走り、最短幅部で3.0m、深さ0.3cmの溝遺構である。溝内からは須恵器、中世陶器、瓦類が検出されるが、これらも溝底部より10~20cm浮き上がった状況で確認された。

瓦類 (第81図)

瓦の出土は平瓦75点、丸瓦3点の総数78点であり内訳は第81図の通りである。その内で特徴的であるのはa類及びf類が比較的によく、さらにf類では端部を有するものがa類の2に対し5と多いことが指適される。



しかしながら出土の状況及び瓦がかなり強く磨耗を受けていることなどから本来の位置を保ったものではなく、中世の時期攪乱によって混入したものと思われる。

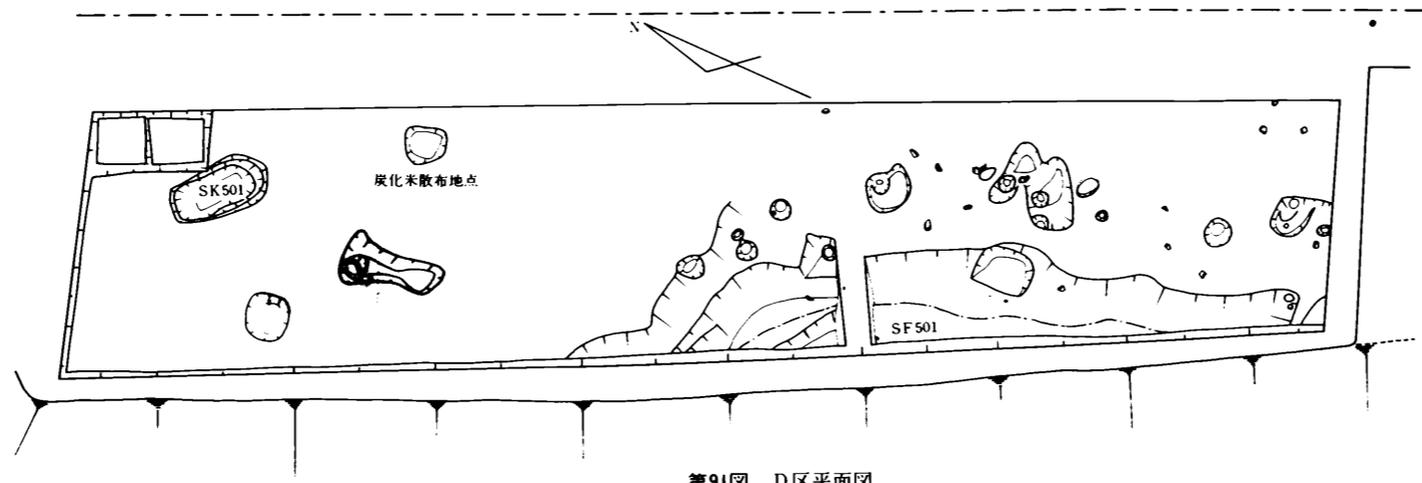
土器類（第95・96図）

S K 502 この土壌内からは中世時期の遺物が多く出土している。1は中世陶器である。胴部より口縁部に向ってゆるやかに外反する壺である。外面には6mm方形の格子目文の叩きを施し、内側にはへらによる調整が見られる。復原口径は18.0cmで焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。2は中世陶器である。備前焼の大甕であり、所謂玉縁状をなす。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。また計測は不可能ではあるが同個体の胴部片が検出されている。3は土師器である。甑の取手で、残存長4.8cmである。胎土内には石英粒を多数含む。焼成は良、色調は茶褐色を呈する。なお全調査区内で唯一の出土例である。

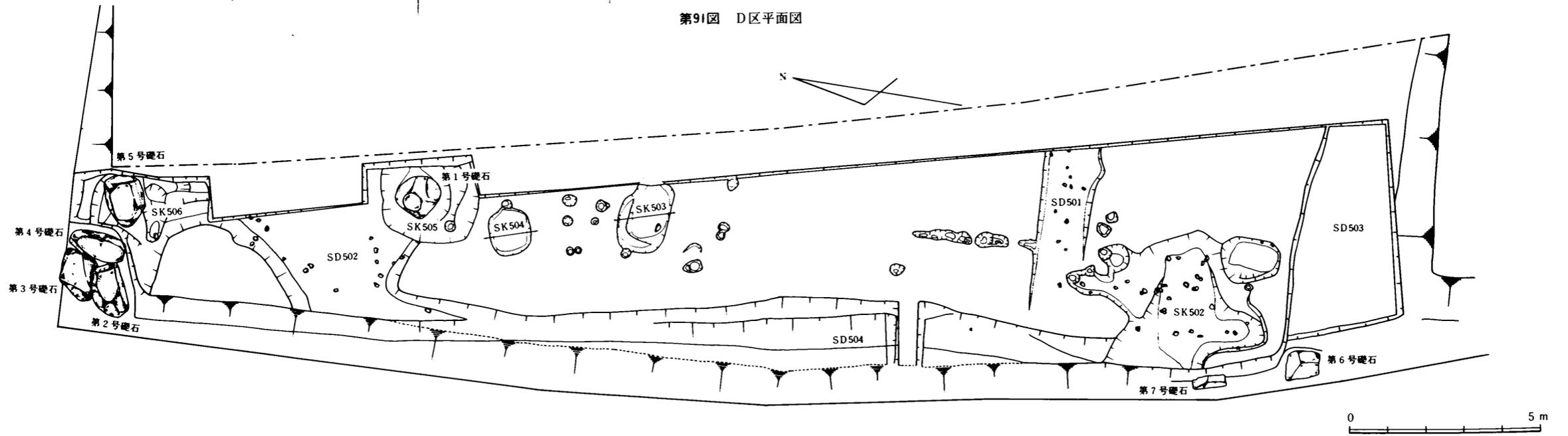
S D 502 4は瓦質土器である。すり鉢の底部であり底部径は11.8cm、残存高2.7cmである。底部より上方に向って刻線を施し、1cm内外の単位に5本の条線を持つ。焼成は良好で堅緻。色調は灰色を呈する。5は須恵器である。破片であり、内面に同心円文の叩きを、外面には不鮮明ながらも叩きを施している。焼成は良好。色調は乳灰色を呈する。6は中世陶器である。すり鉢の胴部片である。下部より上方に向って刻線を施し、1.5cm内外の単位に7本の条線を持つ。外面には小型の格子目文を持つが磨耗の為不鮮明である。焼成は良、色調は明褐色を呈する。7は中世陶器である。外面には7mm大の方形の格子目文の叩きを施す。11と類似する。胎土に微石英粒を含む。焼成は良好、色調は暗紫灰色を呈する。8は中世陶器である。火舎の底部であり、復原底部径は29.6cmを測り、下部に凸帯を一本持ちそれをへらで調整を行う。焼成は良好で、色調は乳灰色を呈する。

S K 506 北側第4号礎石の埋まっていた土壌である。9は中世陶器である。すり鉢の底部であり、復原底部径は13.0cmを、残存高は5.0cmを測る。内面にはまず横位の浅い条痕をめぐらし、底部より上方に向って2cm内外の単位に6本の条線を持つ。胎土は密。焼成は良好、堅緻、色調は灰色を呈する。10は瓦器である。胴部片であろうが、部位は不明である。外面は器壁が荒れ観察不能であり、内面には不鮮明ながらも叩きが観察される。胎土には5mm大の石英粒を含む。焼成は良、色調は暗黒灰色を呈する。11は中世陶器である。胴部片であり1と類似する。外面には長辺1.0cm、短辺0.6cmの長方形の格子目文叩きを施す。さらに内面にはハケ目による調整を左上方より右下方へと横位に施す。胎土は密。焼成は良好、色調は明灰色を呈する。

なお図中にはないが、龍泉窯と思われる青磁片がS K 502より1点、S D 503より1点出土している。



第91图 D区平面图



第92图 E区平面图

SK503



第93図 礎石抜き取り穴

SK504

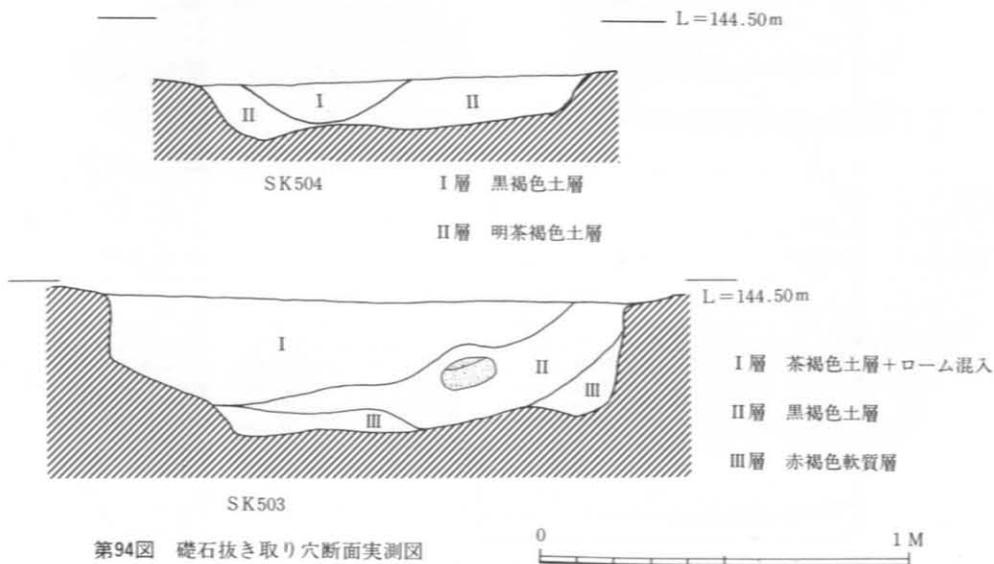
礎石

この地区には礎石が7個確認されている。しかしながらも原位置を保っておらず、第2号～第4号に致っては埋土等から近年移動し集められたことが、第6号、第7号は町道整備の際、邪魔であった為、掘り上げ現法面に打ちつけた事などが確認された。以下各礎石につき概況を述べる。

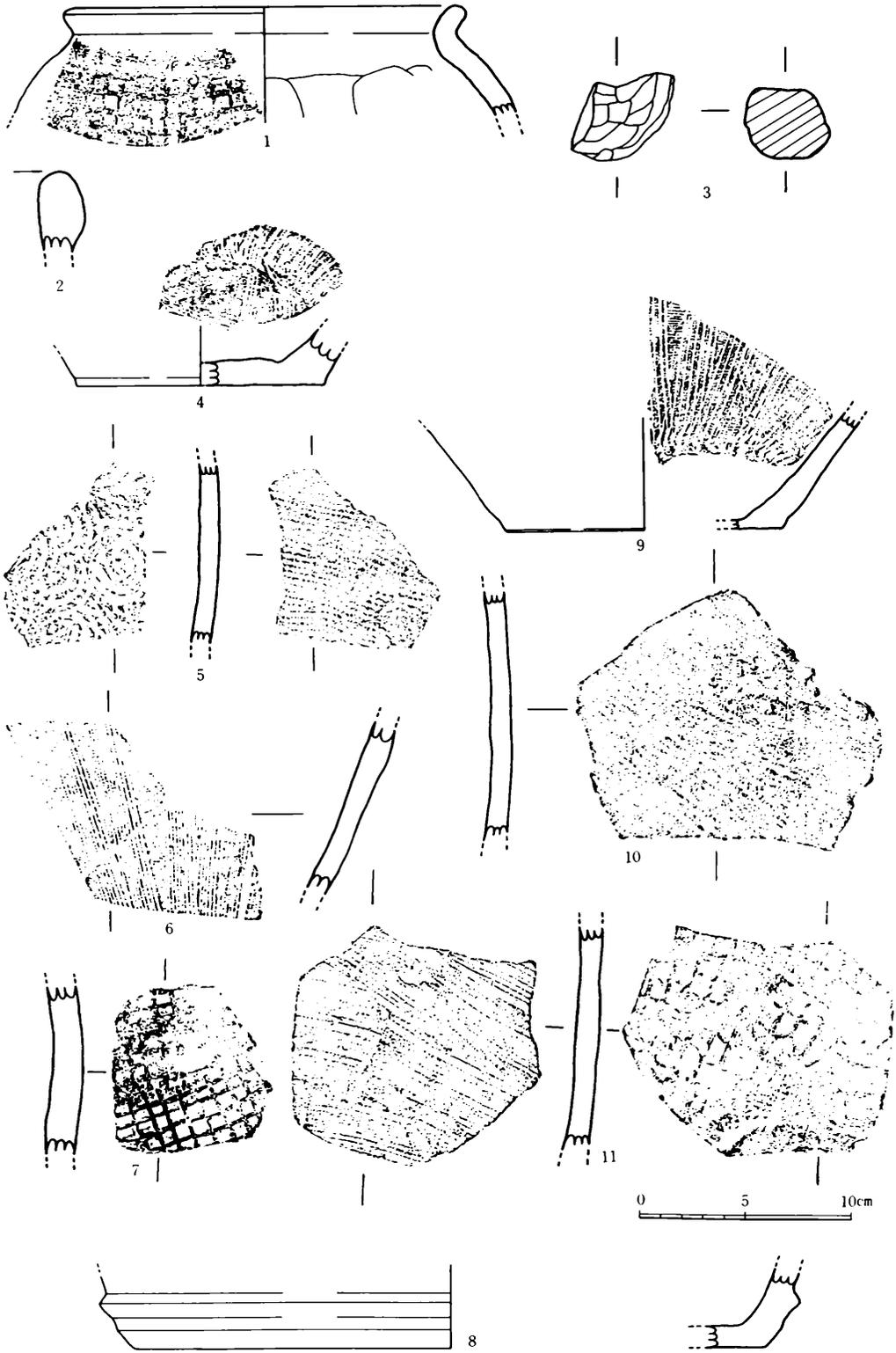
第1号礎石。安山岩、自然石、旧上面は逆転して下方を向く。第2号礎石。花崗岩、自然石、旧上面は上方を向く。第3号礎石。花崗岩、自然石の周囲を打ちかき調整を加える。旧上面は逆転して下方を向く。第4号礎石。花崗岩、自然石。旧上面は逆転して下方を向く。第5号礎石。花崗岩、自然石の周囲を打ちかき調整を加える。火を受けて赤変している。旧上面は上方

を向く。第6号礎石。安山岩、自然石、旧上面は側方を向く。第7号礎石。安山岩、自然石、旧上面は上方を向く。

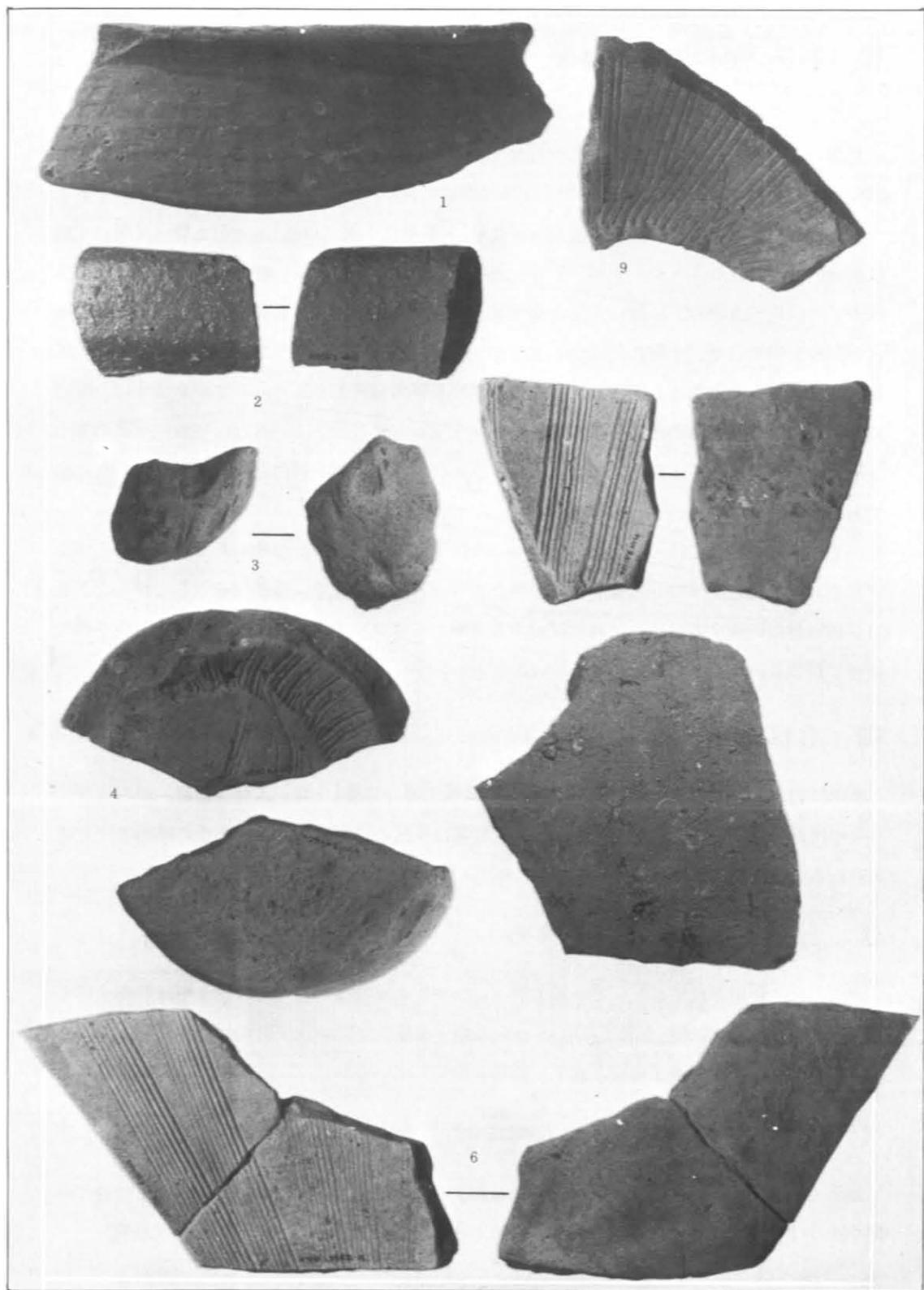
(高谷)



第94図 礎石抜き取り穴断面実測図



第95图 E区出土土器实测图



第96图 E区出土土器

VII F区 (字長者原503の2番地 面積170㎡)

水田として利用されており、第4次調査で発掘された長者原礎石群が、西方約6mの水田下に埋設していることから全面的な発掘を行なった。F区の道端には、花崗岩・安山岩の礎石が4個露出していたが、これは以前の水田化工事に際して、西方水田中から掘りおこしたものである。

F区は耕作土(I層)・暗茶褐色土層(II層)・茶褐色土層(III層)・黒色土層(V層、北側に部分的にみられる)・ローム層(VI層)という基本層序から成る。北側部分ではII層に比較的多くの炭化米を含み、III層に少量の炭化米と布目瓦・中世陶器・青磁・近世以降の磁器が細片となって出土した。土層の関係からすると、ローム層に達する削平が行なわれた後にI～III層が堆積したものである。第4次調査の長者原礎石群の発掘でもふれられているように、町道側のF区付近は段落ちの細長い畑であったという話からすれば、I～III層は整地のための客土と考えることができる。炭化米を含んでいることは、西側の礎石群付近の土を客土としたためであろう。

一方、F区の北側では、V層上面で土壌または溝状の落ちこみを検出した(SX501)。埋土(IV層)は、褐色土やローム塊を含む茶褐色土等の互層から成り、遺物は出土しなかった。長者原礎石群に近接するため、これに関連する遺構の可能性が考えられるが、限られた調査区であり、遺物も出土していないので断定は控えない。(鶴鳴)

VIII G区 (字長者原502の2番地 面積40㎡)

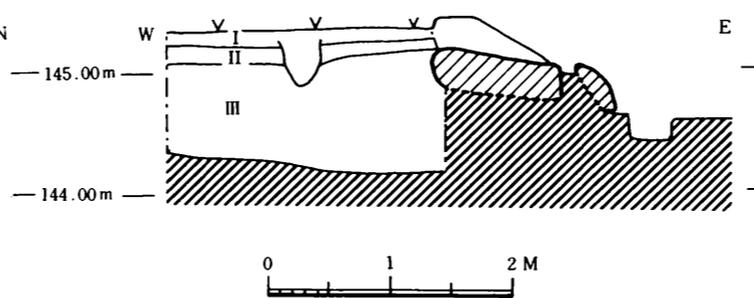
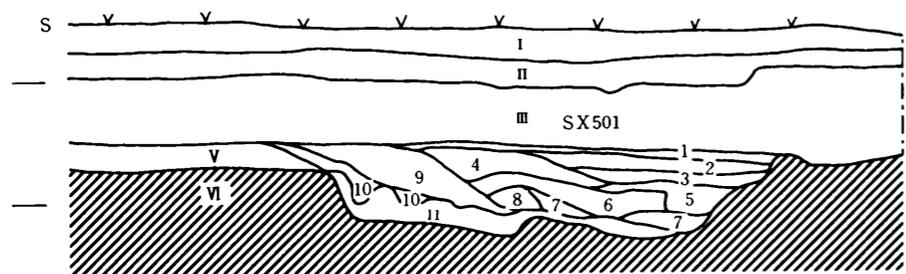
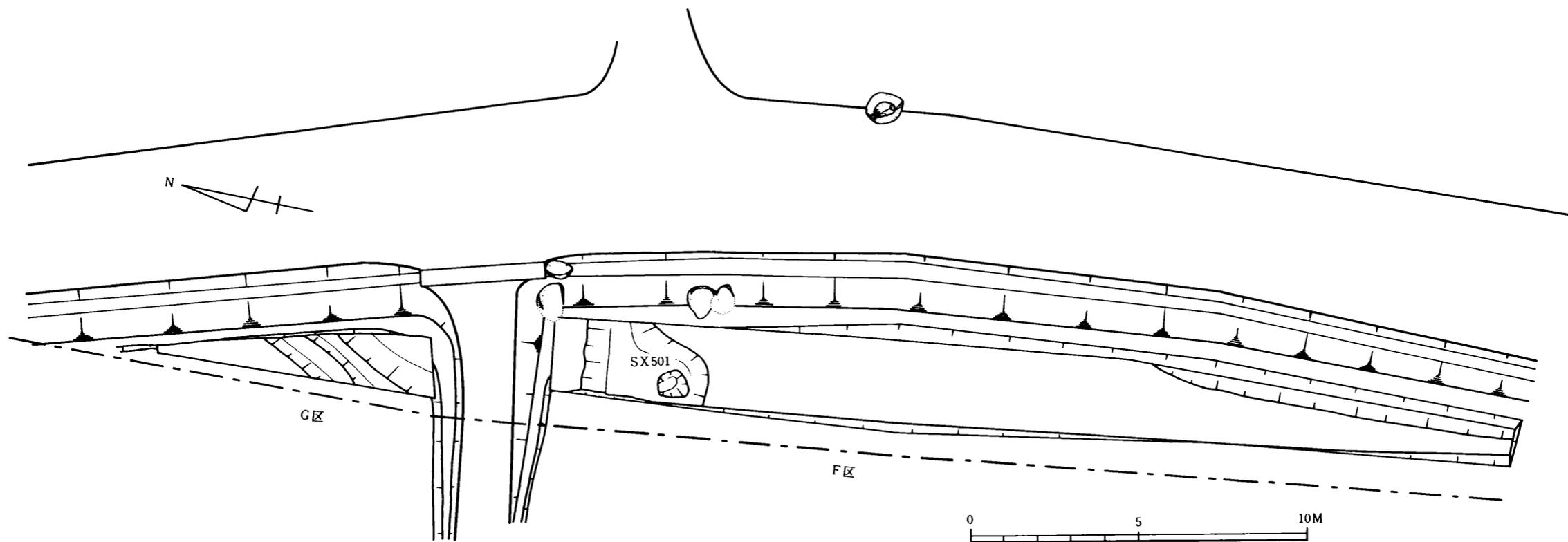
水田に利用されており、耕作土(I層)・茶褐色土層(II層)・ローム層(III層)がみられ、II層中に近世以降の磁器片が1点出土した。II層はF区のIII層に対応し、整地の際の客土と考えられる。遺構は検出されていない。(鶴鳴)

IX H区 (字屋敷688の2番地 面積181㎡)

水田として利用されており、3m四方のトレンチを3m間隔で設定した。土層は耕作土(I層)・水分を含んだ茶褐色土層(II層)・ローム層(III層)で、水田化の際にローム層に達する削平をうけている。遺構は検出されず、遺物も出土していない。(鶴鳴)

X I区 (字屋敷693の3番地 面積128㎡)

地元で「オトマル」と呼ばれる桑畑であるが、かつて宅地であったためローム層まで達する削平をうけていた。遺構は検出されず、遺物も出土していない。(鶴鳴)



- I 耕作土
- II 暗茶褐色土層 (炭化米を多く含む。)
- III 茶褐色土層 (炭化米を含む。)
- IV SX501埋土
 - 1. ローム塊を含む茶褐色土層
 - 2. ローム塊と黒色土塊を含む茶褐色土層
 - 3. 黒色土塊を少し含む茶褐色土層
 - 4. ローム塊を少し含む褐色土層
 - 5. やらわかい褐色土層
 - 6. ローム塊と黒色土塊含む暗茶褐色土層
 - 7. ローム塊を少し含む暗褐色土層
 - 8. ロームの再堆積
 - 9. 黒色土塊を多量に含む茶褐色土層
 - 10. ローム塊と黒色土塊を含む茶褐色土層
 - 11. ローム塊からなる層
- V 黒色土層
- VI ローム層

第97図 F・G区平面図 F区北壁断面実測図 下区西壁断面実測図

XI 総括

昭和41年9月の水田化工事を直接の契機として行なわれた翌年からの4次にわたる調査は、多大な成果をあげ、「幻の城」と呼ばれていた鞠智城を米原一帯に断定するに至り、その全体像を明らかにした。しかし、継続調査の必要性が説かれていたにもかかわらず、十数年を経過してしまい、今次の道路拡幅工事に伴う緊急調査を行なうこととなった。

すでに削平をうけた区画も一部にあったが、遺構の存在が予想された台地上については、道路敷となる部分の発掘を行なうことができたことは幸いであった。

上原地区の遺構

字上原地区における遺構の検出である。従来町道より東側、米原地区最高所にあたる字上原地区には遺構が確認されていなかったが、今次の調査で次の遺構が検出、確認された。まずB・C区においてピット群を検出し、中に4本の柱列を想定できた。ピットは第一次調査の深迫の門礎石の付近から検出されているが、今回のように柱列を想定するには至っていない。またE区においてはS K503・504とS K505が検出された。柱間間隔は土壌の北端から北端まで3.4m（約11尺）、南端から南端まで3.8m（約13尺）、中心から中心まで3.6m（約12尺）を測り、更に何間か延びて、東隣の水田下に礎石もしくはその抜き取った跡の土壌が埋没しているものと思われる。^{註1}しかしながら柱間間隔は宮野礎石群が東西8.5尺、南北8尺。長者山礎石群では南北7尺、東西7.5尺、また長者原礎石群では東西6.5尺、南北5.5尺を測り、E区検出の遺構では南北約12尺となり、柱間間隔については更に問題が残された。

鞠智城とほぼ同時期と思われる大野城跡・基肆城跡においても12尺という長尺の柱間間隔は確認されていない。しかし北西隅に4個の礎石が集中している事や土壌の状況等などから、ここに礎石を持つ建物を推定したい。

軒丸瓦の出土

今次の発掘では遺構に伴うものではなかったが、鞠智城跡で初めて軒丸瓦が出土した。^{註2}破片だが素弁八葉蓮華文軒丸瓦に復原される(第98図)。^{註3}弁が肉厚で稜線が通り、弁先が強く反転するという特徴は、百濟末期様式のそれである。^{註4}九州における百濟末期様式の軒丸瓦は、基肆城跡・大野城跡をはじめ北部九州に集中的に分布する「九州式単弁瓦」あるいは「百濟系単弁軒丸瓦」呼ばれているものが有名であり、その九州への流入の契機は天智天皇4年(665)に着工される大野城・基肆城の築城にあると考えられている。^{註5}この九州式単弁瓦に比較して鞠智城跡の軒丸瓦は、個々の弁がはっきりしており、弁面にふくらみがなく逆に弁全体が強く湾曲し、中房の径も小さく復原される。これらの相異は両者の系譜上の違いによると考えられる。最近、大野城跡でも九州式単弁瓦と異なる7世紀後半代とみられる軒丸瓦が出土しており、^{註6}弁の平面形や稜線が基部から弁先まで通る点では、鞠智城跡の軒丸瓦との類似性がうかがえ注目される。

一方、鞠智城跡の軒丸瓦を模倣したとみられるものが、城南町陳内廃寺から出土している。3類のCとして分類されている素弁八葉蓮華文軒丸瓦^{註7}で、弁の形状が極めて類似する。しかし弁は細身となり整齊性に欠けるので、鞠智城跡の軒丸瓦に後出するものと考えられる。3類の軒丸瓦は創建後の補修瓦とみられ、8世紀初頭頃に考えられている^{註8}。なお、3類の軒丸瓦に伴う重弧文軒平瓦の中には、格子タタキの後に鞠智城跡の平瓦h類と同様の広幅の条痕となる調整を加えている例がある^{註9}。この調整方法は他地域に例を知らない特異なものであり、軒丸瓦の類似性と共に双方の瓦製作が無関係でないことを推測させる。

鞠智城跡から出土した軒丸瓦は蓮弁2葉分の破片であり、中房・周縁の文様および瓦当と丸瓦との接合方法など不明である。したがって、その年代観については速断をつつしむべきであろうが、陳内廃寺との関係から西暦700年前後に求めるのが最も妥当かと思われる。これに誤りがければ、鞠智城が史料上に初現する文武2年(698)の「繕治」の際に製作された可能性がある。

その他の時代

鞠智城時代の遺物の他に縄文時代晩期、弥生時代中・後期、古墳時代(土師器壺片)中世期の遺物が出土したことである。先行する時代については過去の調査等から当然生活域が想定されていたが、今後の調査でさらに資料が増加した。また現在継続中である第6次調査ではC区東隣の水田下に弥生時代後期の竪穴住居址一軒が確認され鞠智城に至る糸口が示された。また鞠智城以後についても多くの資料を得た。C区出土の青磁は龍泉窯系のものであり、13世紀前半～13世紀中葉の時期のものと思われる。またD区出土の小皿は13世紀前半～14世紀中葉の時期と考えられる^{註10}。さらに下るが、米原集落内原田成一宅には「大永7年」(1527)の銘を持つ方柱形の逆修碑がある。このように13世紀頃には集落が営まれていたとみられる。

以上第5次調査は第4次調査から10年経過し、更に昭和55年度より実施されている鞠智城跡遺跡範囲確認調査に至る過渡的な意味合いが強い調査であった。しかし昭和44年来より提起された種々の問題には答えることが少なく、第6次調査へうまく橋渡しできたか、はなはだ疑問であるが、今後の調査の発展的展開に期待してやまない。

(高谷、鶴鳴)

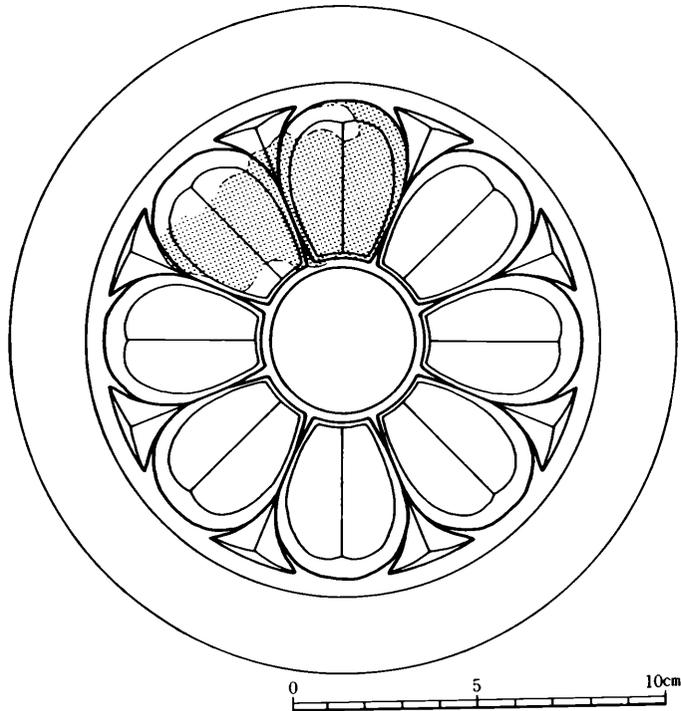
註1 以前の調査の際に第2号及び第3号礎石等の集合状況により、この水田に建物の想定がなされている。

註2 乙益重隆氏からかつて軒平瓦が出土しているという御教示を得た。遺物とその出土地については未確認である。

註3 瓦当文様の呼称法については原則的に「古代の瓦」(稲垣晋也編『日本の美術』No66 至文堂 1971)によった。

註4 稲垣晋也編「古代の瓦」『日本の美術』No66 至文堂 1971

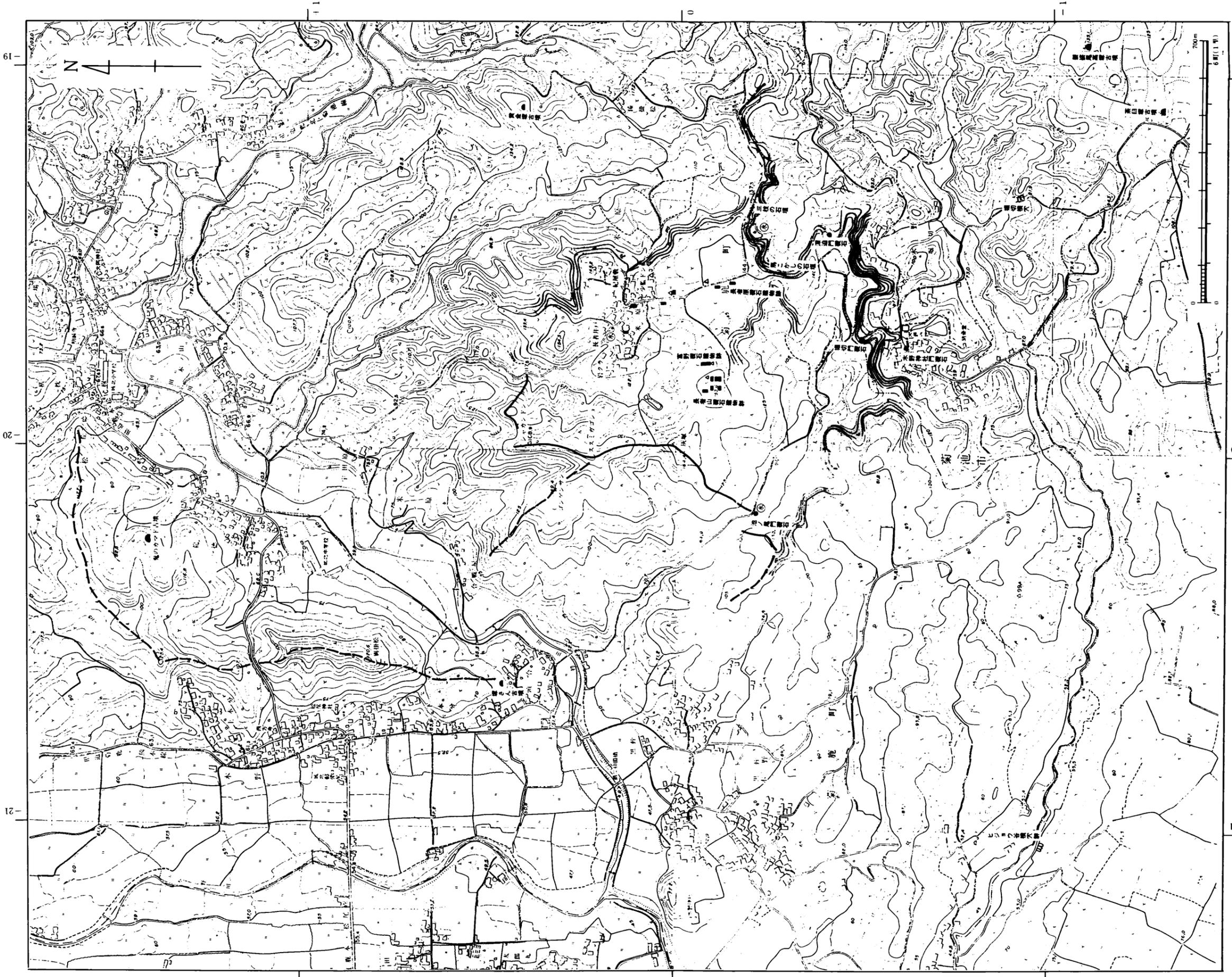
- 註5 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究・歴史時代篇』 1977
- 註6 「特別史跡大野城跡Ⅲ」 福岡県教育委員会 1979
- 註7 松本雅明「陳内廩寺」『城南町史』 1965
- 註8 前掲註6
- 註9 この調整に使用された原体については、板の小口に刻目を入れたもの、あるいは叩き板（平行叩き目・格子叩き目）の先端を利用した場合が考えられる。
 なお、平瓦h類の条痕については、「削条痕」という呼称が適当ではないかという横山浩一氏の御教示を得た。
- 註10 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集（下）」 福岡県教育委員会 1978 C区出土の青磁は分類上R3類に含まれる。
- 註11 前掲註10と同じ。ここでは小皿と規定しているが、法量との関係等から特小皿に分類される。



第98図 鞠智城跡第5次調査出土軒丸瓦復原図

鞠智城関係年表

- 663 天智天皇 2年 白村江の敗戦。
- 664 " 3年 防烽を置き、水城を作る。大野・椽の2城を築く。
- 665 " 4年 長門国に築城。
- 667 " 6年 高安城・屋嶋城・金田城を築く。
- 670 " 9年 長門に城1。筑紫に城2を築く。
- 698 文武天皇 2年 大宰府に勅して大野・基肆・鞠智の3城を繕治せしむ。
- 858 天安 2年 菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城の不動倉十一宇やく。
- 875 貞観17年 群鳥菊池郡(城か)倉舎の葺草を断み抜く。
- 879 元慶 3年 菊池城境(院か)の兵庫の戸自ら鳴る。



韮智城跡概要図 (1万分の1)

凡例

- | | | | |
|-------|----------------|---|-------|
| — | 土塁線・土塁推定線(狭域説) | ● | 門礎石位置 |
| - - - | 土塁線・土塁推定線(広域説) | △ | 古瓦出土地 |
| ▨ | 急岸線 | ⊕ | 自然湧水点 |
| 〰 | 石垣 | ⊖ | 円墳 |
| ■ | 礎石建物跡とその推定地 | ⊕ | 横穴 |
- 使用地形図：「国土基本図」(国土地理院発行)
 II-JD 94・95
 II-KD 04・05
 座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第II座標系

韮智城跡調査報告書付図
 昭和56年3月31日作成